

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向
化と主観的幸福感・レジャー満足度に関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 秀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/1215

博士学位論文

海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向化と
主観的幸福感・レジャー満足度に関する研究

平成 27 年度

(2015 年 9 月)

東京海洋大学大学院
海洋科学技術研究科
応用環境システム学専攻

松本秀夫

博士学位論文

海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向化と
主観的幸福感・レジャー満足度に関する研究

平成 27 年度

(2015 年 9 月)

東京海洋大学大学院
海洋科学技術研究科
応用環境システム学専攻

松本秀夫

目 次

第 1 章 緒論

1. 本論文の背景.....	1
2. 本論文の目的.....	8
注記および引用文献	10

第 2 章 レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性：

アメリカ在住の釣り人を対象として

1. 目 的	15
2. 方 法	15
3. 結 果	17
4. 考 察	23
5. 結 論	25
注記および引用文献	27
資 料	29

第 3 章 レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性に関する

国際比較：日米のスクーバダイバーを対象として

1. 目 的	31
2. 方 法	32
3. 結 果	36
4. 考 察	46
5. 結 論	50
注記および引用文献	52
資 料	56

第4章 レクリエーション専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度に与える影響につ
いての質的分析：専門志向化したスクーバダイバーを対象として

1. 目 的	58
2. 方 法	58
3. 結果および考察	64
4. 総合考察	89
5. 結 論	91
注記および引用文献	92
資 料	95

第5章 総合考察

1. 本論文のまとめ	97
2. 今後の課題	100
引用文献	102
謝 辞	104

第1章 緒論

1. 本論文の背景

1) 海洋スポーツ・レクリエーションと専門志向化

日本は四方を海に囲まれた海洋国家であり、古くから漁民（漁師や海女）による漁業や物流としての海運が営まれ、海と人々の生活は密接な関係を持ってきた。人々が海水に身を浸けて行う活動は、主に生業としての漁業などに限定され、それ以外は、潮湯治（しおとうじ）」の習俗のみであった¹⁾。海水浴は、江戸後期から明治初期にかけて西欧から伝わったとされている²⁾。その後、明治10年前後に現在のような余暇活動を目的として行われるようになり、日本の夏の代表的な余暇活動として普及し多数の人々が海水浴場を訪れている³⁾。

このように海水浴から始まった海での余暇活動は、現在、サーフィン、ダイビング、ウインドサーフィン、カヌー、カヤック、フィッシング、セーリングなどの多種多様な種目が欧米から流入し行われており、それらを総称して海洋スポーツ・レクリエーション⁴⁾、あるいは、海洋性レクリエーションと呼んでいる^{注1)}。これら様々なタイプの海洋スポーツ・レクリエーションは、年齢、性別、体力などの個人の状況によって活動の選好が可能であることから、ライフステージに応じて多くの人々に親しまれており、その動向や行動様式を分析、研究することは意義あるものである。

レジャー・スポーツ行動を扱う研究は、余暇時間を利用してレジャー・スポーツ活動に参加する人々が、その過程において生じる諸事象を行動科学の理論的枠組みにおいて解明しようとする学問領域である⁵⁾。そして、原田⁶⁾は、北米における余暇行動の研究動向についてレビューを行い、社会心理学の発達アプローチをレジャー・スポーツ行動の研究に用いた概念として、レクリエーション専門志向化を取り上げている。

このレクリエーション専門志向化を提唱した Bryan⁷⁾は、スポーツフィッシングを行う釣り人を対象に参与観察とインタビューを用いた調査を行い、参加者が経験を積み重ねるにしたがって用具を揃え、技術を修得し、場所を選択して活動を行うよう行動様式を変

化させることから、フィッシング参加者を Occasional Participants（不定期参加者）、Generalists（ゼネラリスト）、Technique Specialist（技術のスペシャリスト）、Technique & Setting Specialist（技術と場面のスペシャリスト）^{注2)}に類型化している。そして、レクリエーション専門志向化を、活動に用いられる用具や技能、活動場面の選好に関して、一般的な状態から特殊化した状態に至る行動の連続体であると示している。つまり、レクリエーション専門志向化の概念は、繰り返し行われる余暇活動の経験に伴い、時間経過における発達過程で、人々が技能や知識を修得し、その活動への関与を高め、態度や価値観が変化し専門化するというものである。

二宮ら⁸⁾は、このレクリエーション専門志向化の概念が、レジャー・スポーツ行動の研究において体系的なレビューがなされていないことを指摘し、詳細なレビューを行っている。そして、レクリエーション専門志向化の理論的背景において、時間経過における発達過程の基礎が、心理学の学習理論や強化理論を根拠としたホーマンズ⁹⁾の社会的交換理論における成功命題と飽和命題を理論的根拠としていることと、時間経過における発達過程の枠組みが、Kelly¹⁰⁾のレジャーの社会化を理論的根拠としていることを指摘している。この成功命題は、人間の行為と好ましい結果との結びつきを示し、飽和命題は、報酬を頻繁に得たことによる飽きである。すなわち、専門志向化の発達過程において、人は同じ行為を反復し、その繰り返しの報酬結果から、その行為に飽き、新たな価値を要求しているということである。また、レジャーの社会化は、発達過程において環境が変化し、レジャー活動が拡張や中断、再学習されるというものであり、専門志向化の発達過程において、レジャー活動の経験が拡張することによって、その活動が専門化するというものである。

このレクリエーション専門志向化の測定に関しては、Bryan の最初の研究が、使用する用具、漁獲する量、水域の好み、魚種の好み、釣り場のマネジメント、活動歴、社会的な状況などの観察可能な要因で判断していたことから、Buchanan¹¹⁾は、そこに、Affective Attachment（感情的愛着）が含まれていないことを指摘している。そして、専門志向化に、感情的愛着による関与の高まりを示したコミットメントの概念を含め、専門志向化が低い不定期参加者のコミットメントは低く、専門志向化の高いスペシャリストのコミットメントは高いことを示している（図1）。

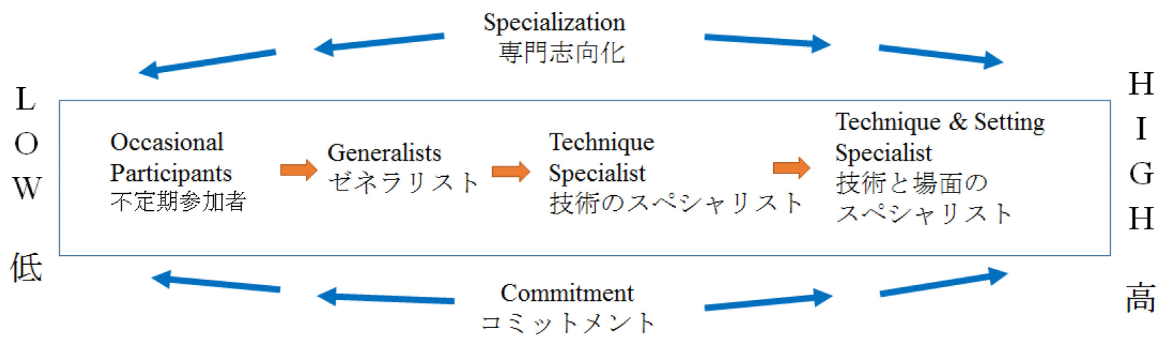


図 1. レクリエーション専門志向化の連続体
 †Buchanan(1985, p406), 二宮 (2007, p25) を改変して作成

また，McIntyre と Pigram¹²⁾は，同様の指摘によって従来から用いられていた行動局面 (Behavioral) と認知局面 (Cognitive) に，感情局面 (Affective) を追加して，3 局面によるレクリエーション専門志向化モデルを構築している (図 2)。

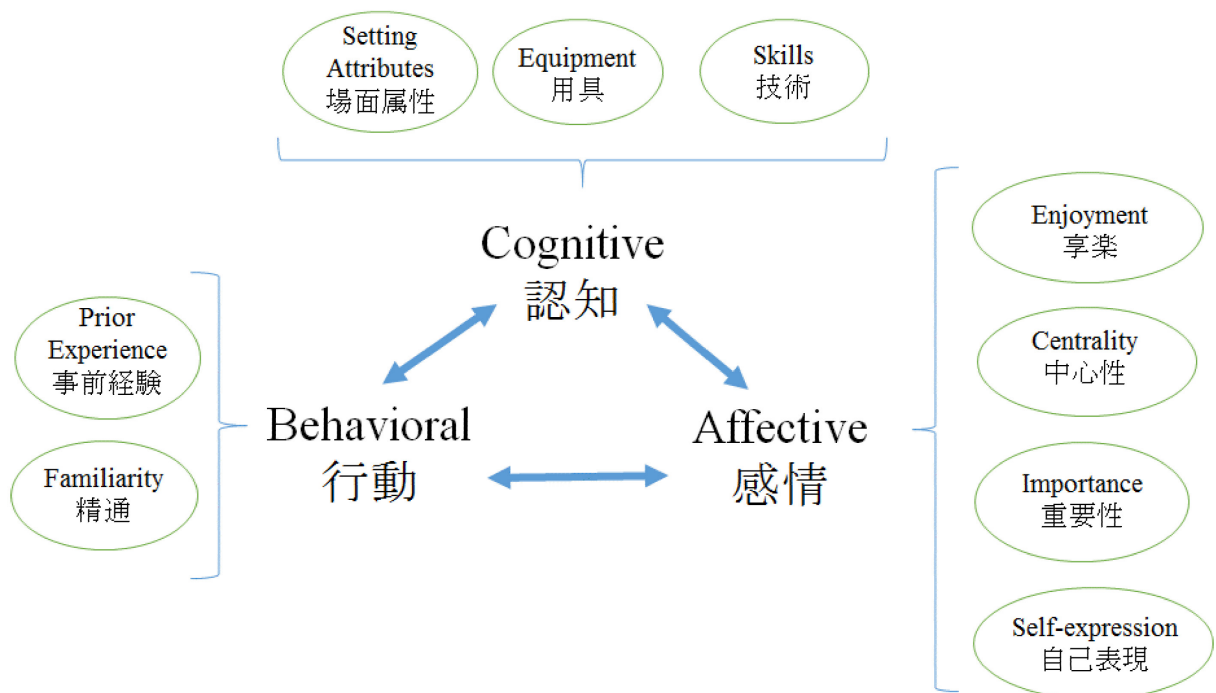


図 2. レクリエーション専門志向化の多次元指標モデル
 †McIntyre & Pigram(1992, p6), 二宮 (2007, p25) を改変して作成

このモデルは 3 局面で構成され互いに影響し，感情局面には，Importance (重要性)，Centrality (中心性)，Enjoyment (享楽)，Self-expression (自己表現) の 4 次元，認知局面に

は、Skills (技術), Equipment (用具), Setting Attributes (場面属性) の3次元, 行動局面には、Prior Experience (事前経験), Familiarity (精通) の2次元からなる多次元指標モデルによって構成されている。そして、この多次元指標モデルは、多数の専門志向化研究において採用されている。しかし、行動局面の単次元によって測定する研究¹³⁾もあり、その選択は、対象となる活動や目的の概念によって異なる。

研究対象とされる概念としては、Flow Experience (フロー体験)¹⁴⁾, Identity (アイデンティティ)¹⁵⁾, Motivation and Site Preference (動機づけと場所の選好)¹⁶⁾, Serious Leisure (シリアスレジャー)¹⁷⁾, Place Attachment (場所への愛着)¹⁸⁾, Activity Substitutability (活動代替性)¹⁹⁾, Environmental Attitude (環境への態度)²⁰⁾などがあり、レクリエーション専門志向化の類型化の指標として用いられている。また、多種多様な余暇活動を対象として研究が実施され、フィッシング, ダイビング, ハンティング, セーリング, サーフィン, ハイキング, バードウォッチング, ATV (全天候型車) ドライビング, スキー, スノーボードなどのアウトドアでの活動に加え、カードゲームであるコントラクトブリッジ^{注3)}やオンラインゲームを対象とした研究^{14,21)}も存在し、レクリエーション専門志向化は、レジャー研究において重要な役割を担っている。また、このように行われてきた専門志向化研究について Needham ら²²⁾は、2013年の *Leisure Science* の特集号で、Bryan の先駆的研究から30年以上が経過し、関連する概念との関係について様々な研究が行われているが、専門志向化は複雑であり、まだ重要な課題が残っていると述べ、研究の更なる発展を期待している。

しかし、海外で研究が数多く行われているレクリエーション専門志向化研究は、日本においてほとんど行われていない。特に海洋スポーツ・レクリエーションに関しては、前述の二宮らがウインドサーフィンを対象に行った一連の研究以外見当たらない²³⁻²⁵⁾。この二宮らの研究は、ウインドサーフィン参加者の専門志向化について、九州のクラブにおける参与観察とインタビュー調査から、専門志向化のレベルが高いほど、参加頻度が多く、活動期間も長いことから、活動への関与を高めていく傾向や、不定期参加者と社会的参加者が、気候が温暖な時期に活動を限定していることを明らかにしている^{23,24)}。また、4次元による専門志向化変数による分析から、4タイプのウインドサーフィン参加者を類型化している²⁵⁾。そして、我が国においてもウインドサーフィン以外の活動にも専門志向化の適

用範囲を広げていくことの必要性を指摘している。

これらのことから、日本においても他の海洋スポーツ・レクリエーション種目の専門志向化研究を行うことは意義あるものである。また、世界中のフィールドで行われている海洋スポーツ・レクリエーションを対象とした国際比較を行った研究も見当たらないことから、専門志向化に関する国際比較研究を行うことも同様に意義あるものと考えられる。

2) レジャー・レクリエーション活動と主観的幸福感・レジャー満足度

『レジャー白書 2014』²⁶⁾によれば、2013 年度に海水浴、釣り、スクーバダイビング・スキューバダイビング、サーフィン、ウインドサーフィン、ヨット、モーターボートといった海洋スポーツ・レクリエーションに参加した人は、1,940 万人であり、多くの人々が余暇活動として海洋スポーツ・レクリエーション活動を実施している（表 1）。

表 1. 海洋スポーツ・レクリエーションにおける余暇活動への参加・費用実態（2013）

	参加人口 (万人)	参加率	年間平均 活動回数	年間平均費用（千円）			1回当たり の費用 (円)	参加希望 率 (%)
				用具費	会費等	合計		
海水浴	910	9	2	6	12	19	8,090	16
釣り	770	8	10	19	16	36	3,610	12
スキューバダイビング・スキューバダイビング	150	2	5	34	46	80	17,780	7
サーフィン・ウインドサーフィン	50	1	9	13	11	23	2,740	3
ヨット・モーターボート	60	1	3	45	43	88	25,970	2
計	1,940	4	6	24	26	49	11,638	8

† 『レジャー白書2014』²⁶⁾ p14から抜粋して作成

これら余暇時間に行われるレクリエーション活動は、日常での様々なストレスを解消する活動として重要な位置づけを持っている^{27,28)}。また、このような主体的な余暇活動の実施に伴うレジャーの満足度は、人々の主観的幸福感や幸せに影響を与えていることが報告されている²⁹⁻³¹⁾。すなわち、レクリエーション活動の継続的な実施に伴うレジャー満足度の向上は、人を幸福にすることに繋がる可能性を示している。

人々の幸福感に関する研究は、ポジティブ心理学や経済学などをベースとして、主観的幸福感、生活満足度などを測定しながら活発に行われている^{32,33)}。Seligman と Csikszentmihalyi³⁴⁾は、それまでの心理学が人間の弱みや障害などに注目して研究が行われ

ていたことを指摘し、これからは、人間の良いところ、人の優れた機能 (human strength), 人徳 (virtue) などのポジティブな資質などを解明することが必要であり、人間の幸せを考える新たな心理学として、ポジティブ心理学の重要性を示している。また、ポジティブ心理学は、ポジティブな感情、ポジティブな人格、ポジティブな社会規範を取り上げ体系化され、具体的なポジティブ感情としての、幸せ、喜び、満足、興味、愛などは、それが瞬間だけであっても主観的幸福感に影響を及ぼすことを明らかにしている^{35,36)}。

経済学に関連した幸福感研究においては、国の豊かさの指標としての幸福感の研究が行われている。また、国の幸福度を測るという動きは、1976年、スリランカのコロンボで行われた会議において、ブータン国王が国民総生産 (GNP: Gross National Product) よりも国民総幸福量 (GNH: Gross National Happiness) が重要であると発表^{注4)}して以来多くの国々で起こり、各国が幸福度を測定している。*World Happiness Report 2015*³⁷⁾によると、日本は対象158カ国中46位、アメリカは15位である。また、Pew Researchの調査では2014年度の日本の幸福度は、先進7カ国においてワースト2位、アメリカは2位であった³⁸⁾。日本国内においては、日本人の幸福度に関して、内閣府の「国民生活に関する世論調査」^{注5)}や「国民生活選好度調査」^{注6)}が行われているが、日本における経済学分野において、幸福に関する研究は2000年代に入るまでほとんど行われていない³⁹⁾。FreyとStutzer⁴⁰⁾は、日本人の幸福度は高度経済成長期においてGDPが向上しても幸福度は横ばいであることを指摘しており、筒井ら³⁹⁾は、所得の高い人の幸福度は高いが、一定以上の所得を超えると幸福度が低下し飽和点があることを指摘している。また、DienerとSeligman⁴¹⁾は、所得が幸福の増大に大きな役割を果たすのは、経済発展度の低い段階だけであると説明している。このような一連の幸福感研究の中で、余暇活動はポジティブな感情を高め、ネガティブな感情を低下させることが知られ⁴²⁾、余暇活動とレジャー満足度、幸福感に関係があることが報告されている²⁹⁻³¹⁾。

では、国際的な余暇活動の研究はどのように行われているのであろうか。山口は⁴³⁾、余暇活動の国際動向について*Free Time and Leisure Participation: International Perspectives*⁴⁴⁾が世界15カ国におけるデータを紹介し余暇活動の重要性を強調しているが、各国の具体的な比較がなされていないことを指摘している。そして、比較可能なデータから日米の余暇活動の比較を行っている。この結果、レジャー時間は、平日、土日ともに概ね同じか日

本の方が長く、レジャー参加率は、主要なアウトドア活動の比較において、参加率の平均はアメリカが30.6%に対して日本は13.1%であることを報告していることから、日本人のレジャー参加率は、アメリカに比べて低いことがうかがえる。しかし、各国で調査の範囲や手法が異なるなどの問題点を認め、統一的な国際比較調査の必要性を示している。

このようにレジャー活動を対象に国際比較を行った研究は、活発に行われているとは言えず、レジャー活動に関する国際比較研究や幸福感の国際比較を行うことにより、幸福感に関する学術的知識の蓄積および、レジャー・レクリエーション活動と幸福感との関係を明らかにすることが可能であり意義があると考えられる。

3) 海洋スポーツ・レクリエーションの専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度に与える影響

長期にわたって海洋スポーツ・レクリエーションを実践している人々は、その活動を継続する過程において、ポジティブな感情を持ち、活動に飽きることなくその活動を継続し、レクリエーション専門志向化を行っていることが考えられる。これは、レクリエーション専門志向化した人々が、先行研究により主観的幸福感との関係が示唆されているレジャー活動を、専門志向化の発達過程において継続して行っている可能性があるということである。従って、レクリエーション専門志向化の概念によって専門志向化のレベルを類型化し、主観的幸福感・レジャー満足度への影響を検証することが可能であると考えられる。しかし、横断的研究においては、専門志向化の影響に関する因果関係に言及することは困難である。Chiashi と Tomago⁴⁵⁾は、海洋スポーツ・レクリエーションの心理的効果や教育的効果に関する研究の多くが、比較対照群を持たないなどの問題を指摘し、研究デザインの再考や継続的な活動を対象とした縦断的研究、著名な指導者や愛好者からの聞き取りなど質的研究の必要性を示している。

従って、本論文においては、海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度は、その関係を横断的研究によって量的に検討し、さらに、その影響といった因果関係は、専門志向化した愛好者からのインタビューによる質的な方法によって検討する。

2. 本論文の目的

以上の背景から本論文は、以下の研究を総合的に考察することにより、海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向化と参加者の主観的幸福感・レジャー満足度との関係について追究することを目的とする。

第2章では、アウトドアにおける余暇活動が活発に行われているアメリカにおいて、3,300万人の愛好者⁴⁶⁾を持つ最大のレジャーであるフィッシングを対象として、レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性について考察を行う。

第3章では、国際的に共通の講習課程^{注7)}を持ち、日米での活動形態の違いが少ないと考えられるスクーバダイビングを対象に、レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性について国際比較による考察を行う。

第4章では、スクーバダイバーを対象に、レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度について、インタビュー調査を実施することにより、レクリエーション専門志向化の形成過程に焦点をあてた質的分析を行い、レクリエーション専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度に与える影響について考察を行う。

第5章では、各章において明らかとなった結果から、海洋スポーツ・レクリエーションの専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性についての総合的な考察を行い、本論文における結果の新規性および価値に言及する。また、本論文における研究の限界と今後の課題と展開についてまとめる。

なお、本論文における調査対象種目とする海洋スポーツ・レクリエーションについては、以下の理由により、フィッシング（第2章）とスクーバダイビング（第3章・第4章）とした。前述のように幸福感に関する経済学の先行研究からは、主観的幸福感に所得などの人口統計的特性が影響を与えていることが指摘されている。ゆえに、本論文においても、所得の影響の可能性を考慮する必要があるとあり、対象種目の詳細な人口統計的特性のデータが存在し、入手可能であることが望ましいと考えられる。アウトドアにおける活動のデータは、U.S. Fish and Wildlife Serviceが、1955年から約5年おきにフィッシング、ハンティング、自然観察者の人口統計的なデータを蓄積し、2011年に最新の調査⁴⁶⁾が実施されている。フィッシング人口は、アメリカの人口約3億人の11%にあたる3,300万人と最大であ

るが詳細な人口統計的特性の統計データが存在することから、第2章においては、アメリカ在住の釣り人を対象とした。

第3章においては、国際比較を行うことが目的であり、日米で比較が可能な種目を対象とすることが重要である。スクーバダイビングは、タンクの圧縮空気を呼吸して潜ることから、潜水時に人体に与える生理的な影響や水中での物理学などの知識と、スクーバ器材の取扱いに関する技能を修得する必要がある。その講習課程が体系的に構築され、各種マニュアルの整備とインストラクターの養成が民間のスクーバダイビング指導団体によって行われている。この指導団体の多くは、アメリカやヨーロッパに本部をおき、ダイビング協議会などを通じて講習基準の確認を相互に行うことによってクオリティを保持し、世界各地で指導を展開している。従って、日米でスクーバダイビングの講習形態が異ならず、種目による特性や実施場所の要因による影響が国際間で少ないと考えられる。また、レジャーダイビングの楽しみ方が、国内外のダイビングポイントにおいて、基本的にダイビングガイドとともに潜るなど、その楽しみ方も形態が国際的に共通であり、国際比較研究を行う種目として最適であると考えられる。以上のことから第3章の国際比較においては、スクーバダイビングを対象とした。

第4章は、専門志向化した愛好者に対する仮説検証型のインタビューから、レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の因果関係を明らかにするものである。従って、第2章・第3章で調査を実施した、フィッシング、ダイビングを対象とすることが望ましい。仮説検証型のインタビューを行うことから、調査者がその種目に精通している必要がある。半構造化インタビューにおいて適時、柔軟に対応することが求められる。従って、調査者が指導員資格を有し、ダイビング、および指導経験が20年を超えていることから、専門志向化したダイバーの半構造化インタビューに対応が可能であると判断し、スクーバダイビングを対象とした。

第1章 注記および引用文献

注記

注1) 国土交通省は、「海洋性レクリエーション」を用いているが、本論文では、スポーツの名称を含む柳と谷⁴⁾の定義に基づき、「海洋スポーツ・レクリエーション」を用いることとした。

注2) 二宮ら⁸⁾が日本におけるレクリエーション専門志向化の先駆的研究を行い、非常に詳細な研究レビューを行っていることから、関連した用語の日本語訳は、原則それに準じて用いた。

注3) コントラクトブリッジは、トランプゲームの中で唯一、国際共通ルールが確立しているゲームであり、「地域によってルールが違う」ということがない。従って、世界中どこへ行っても、初めて会う人とでも、楽しむことができる（公益社団法人日本コントラクトブリッジ連盟（<http://www.jcbl.or.jp/>；参照 2015-5-21））。

注4) 1976年12月「第5回非同盟諸国会議」がスリランカで開催され、ジグメ・シンゲ・ワンチュク（Jigme Singye Wangchuck）第4代国王が記者会見で“Gross National Happiness is more important than Gross National Product”と発言し注目された。

注5) 「国民生活に関する世論調査」は、1958年からほぼ毎年、内閣府によって実施されている。

注6) 「国民生活選好度調査」は、1995年度から行われて、「豊かな社会の国民意識」（1996年）、「国民の意識とニーズ」（1997年）などについて報告されている。

注7) 国際的指導団体、PADI、CMASなど、スクーバダイビングの講習方法を確立し、各種のマニュアルを整備し講習の修了時に認定証（Certificate Card）を発行している。また、マニュアルは各国語に翻訳され共通のシステムが運用されている。

引用文献

- 1) 小口千明: 日本における海水浴の受容と明治期の海水浴. 人文地理, 37(3): 23-37, 1985.
- 2) 國木孝治: 江戸時代後期における海水浴概念の伝播に関する研究－西洋医学書および医学教育の内容にみられる「海水浴」に着目して－. スポーツ史研究, 25: 57-64, 2012.
- 3) 小口千明: 療養から行楽型海水浴への変容と各地の海水浴場. 地方史研究, 48(5): 9-14,

1998.

4) 柳敏晴, 谷健二: 海洋スポーツ・レクリエーションの用語の定義と分類. 鹿屋体育大学学術研究紀要, 19: 118-131, 1998.

5) 二宮浩彰: レクリエーションの行動科学. 東京, 不昧堂出版, 2007.

6) 原田宗彦: 北米における余暇行動研究の動向. レクリエーション研究, 9: 35-44, 1982.

7) Bryan H: Leisure value system and recreation specialization: The case of Trout Fishermen. *Journal of Leisure Research*, 9(3): 174-187, 1977.

8) 二宮浩彰, 菊地秀夫, 守能信次: レクリエーションの専門志向化: その研究動向と方法論. *体育学研究*, 47(4): 319-331, 2002.

9) ホーマンズ GC, 橋本茂訳: 社会行動 その基本形態. 東京, 誠信書房, 1978.

10) Kelly JR: Socialization toward leisure: A developmental approach. *Journal of Leisure Research*, 6(3): 181-193, 1974.

11) Buchanan T: Commitment and leisure behavior: A theoretical perspective. *Leisure Sciences*, 7(4): 401-420, 1985.

12) McIntyre N and Pigram JJ: Recreation specialization Reexamined: The case of Vehicle-Based campers. *Leisure Sciences*, 14(1): 3-15, 1992.

13) Choi S, Loomis DK, Ditton RB: Effect of social group, activity, and specialization on recreation substitution decisions. *Leisure Sciences*, 16(3): 143-159, 1994.

14) Wu T-C (Emily), Scott D, Yang C-C: Advanced or Addicted? Exploring the Relationship of Recreation Specialization to Flow Experiences and Online Game Addiction. *Leisure Sciences*, 35(3): 203-217, 2013.

15) Schroeder SA, Fulton DC, Lawrence JS, Cordts SD: Identity and Specialization as a Waterfowl Hunter. *Leisure Sciences*, 35(3): 218-234, 2013.

16) Galloway S: Recreation Specialization Among New Zealand River Recreation Users: A Multiactivity Study of Motivation and Site Preference. *Leisure Sciences*, 34(3): 256-271, 2012.

17) Lee S and Scott D: Empirical Linkages Between Serious Leisure and Recreational Specialization. *Human Dimensions of Wildlife*, 18(6): 450-462, 2013.

18) Kelly S and Bricker DLK: Level of Specialization and Place Attachment: An Exploratory Study

of Whitewater Recreationists. *Leisure Sciences*, 22(4): 233-257, 2000.

19) Needham MD and Vaske JJ: Activity Substitutability and Degree of Specialization Among Deer and Elk Hunters in Multiple States. *Leisure Sciences*, 35(3): 235-255, 2013.

20) Thapa B: The Mediation Effect of Outdoor Recreation Participation on Environmental Attitude-Behavior Correspondence. *The Journal of Environmental Education*, 41(3): 133-150, 2010.

21) Scott D and Godbey G: Recreation specialization in the social world of contract bridge. *Journal of Leisure Research*, 26(3): 275-295, 1994.

22) Needham MD, Scott D, Vaske JJ: Recreation Specialization and Related Concepts in Leisure Research. *Leisure Sciences*, 35(3): 199-202, 2013.

23) Ninomiya H and Kikuchi H: Recreation Specialization and Participant Preferences among Windsurfers: An Application of Conjoint Analysis. *International Journal of Sport and Health Science*, 2: 1-7, 2004.

24) 二宮浩彰, 菊地秀夫, 守能信次: レクリエーションの専門志向化からみたウインドサーファーの行動—レジャーの社会的世界におけるフィールドワークを通じて—. *レジャー・レクリエーション研究*, 54: 1-10, 2005.

25) 二宮浩彰, 菊地秀夫, 守能信次: 専門志向化の概念枠組みによるウインドサーファ어의類型化とその測定指標. *レジャー・レクリエーション研究*, 56: 1-10, 2006.

26) 日本生産性本部: レジャー白書 2014—マイ・レジャー時代の余暇満足度—. 東京, 生産性出版, 2004.

27) Iwasaki Y, MacKay K, Mactavish J: Gender-Based Analyses of Coping with Stress among Professional Manager: Leisure Coping and Non-Leisure Coping. *Journal of Leisure Research*, 37(1): 1-28, 2005.

28) Iwasaki Y and Mannell RC: Hierarchical Dimensions of Leisure Stress Coping. *Leisure Sciences*, 22(3): 163-181, 2000.

29) Brow A, Frankel B, Fennell M: Happiness through leisure: the impact of type of leisure activity, age, gender and leisure satisfaction on psychological well-being. *Journal of Applied Recreation Research*, 16(4): 368-392, 1991.

30) Lu L and Hu CH: Personality, leisure experiences and happiness. *Journal of Happiness Studies*,

6(3): 325-342, 2005.

31) Ateca-Amestoy V, Serrano-del-Rosal R, Vera-Toscano E. The leisure experience. *Journal of Socio-Economics*, 37(1): 64-78, 2008.

32) Mannell RC: Leisure, Health and Well-Being. *World Leisure Journal*, 49(3): 114-128, 2007.

33) Frey BS, Stutzer A: The economics of happiness. *World Economics*, 3(1): 1-17, 2002.

34) Seligman MEP and Csikszentmihalyi M: Positive psychology - An introduction. *American Psychologist*, 55(1): 5-14, 2000.

35) Diener ED: Subjective well-being: The science of happiness and a proposal for a national index. *American Psychologist*, 55(1): 34-43, 2000.

36) Diener ED, Colvin CR, Pavot WG, Allman A: The psychic costs of intense positive affect. *Journal of personality and social psychology*, 61(3): 492-503, 1991.

37) Helliwell JF, Layard R, Sachs J, Eds.: *World Happiness Report 2015*, New York, Sustainable Development Solutions Network, 2015.

38) Simon K, Wike R, Oates R: People in Emerging Markets Catch Up to Advanced Economies in Life Satisfaction: Asians Most Optimistic about Future, Middle Easterners the Least. *Pew Research Center* (<http://www.pewresearch.org>), 2014.

39) 筒井義郎, 大竹文雄, 池田新介: なぜあなたは不幸なのか. *大阪経済学*, 58(4): 20-57, 2009.

40) Frey BS and Stutzer A: *Happiness and Economics: How the Economy and Institutions Affect Human Well*. Princeton University Press, NJ, 2002.

41) Diener ED and Seligman MEP: Beyond Money: Toward an Economy of Well-Being. *Psychological Science in the Public Interest*, 5: 1-31, 2004.

42) Kleiber DA, Walker GJ, Mannell RC: *A Social Psychology of Leisure*. (2nd edition.) State College, PA, Venture Publishing, 2011.

43) 山口有次: コラム 日米レジャーデータ比較. *レジャー白書 2014—マイ・レジャー時代の余暇満足度—*, 東京, pp.107-111, 生産性出版, 2015.

44) Chushman G, Veal AJ, Zuzanek J: *Free Time and Leisure Participation: International Perspectives*. Wallingford, UK, Cambridge, MA: CABI Pub, 2008.

45) Chiashi K and Tomago H: Educational Benefits of Waterside Nature Experiences and Ocean Education. Japanese Journal of Maritime Activity, 3(1): 6-16, 2014.

46) U.S. Fish and Wildlife Service and U.S. Census Bureau: 2011 National survey of Fishing, Hunting, and Wildlife-Associated Recreation. U.S. Department of the Interior, U.S. Fish and Wildlife Service, U.S. Department of Commerce, U.S. Census Bureau, 2012.

**第2章 レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性：
アメリカ在住の釣り人を対象として**

1. 目的

本章は、アメリカ在住の釣り人を対象に、レクリエーション専門志向化指標と主観的幸福感尺度を用いて、レクリエーション専門志向化と主観的幸福感 (Subjective Happiness, 以下 SH と示す)・レジャー満足度 (Leisure Satisfaction, 以下 LS と示す) の関係性を明らかにすることを目的とした。また、緒論にて述べたように主観的幸福感に所得が影響を与える可能性があることから、所得を独立変数に加えた研究モデルとした (図1)。

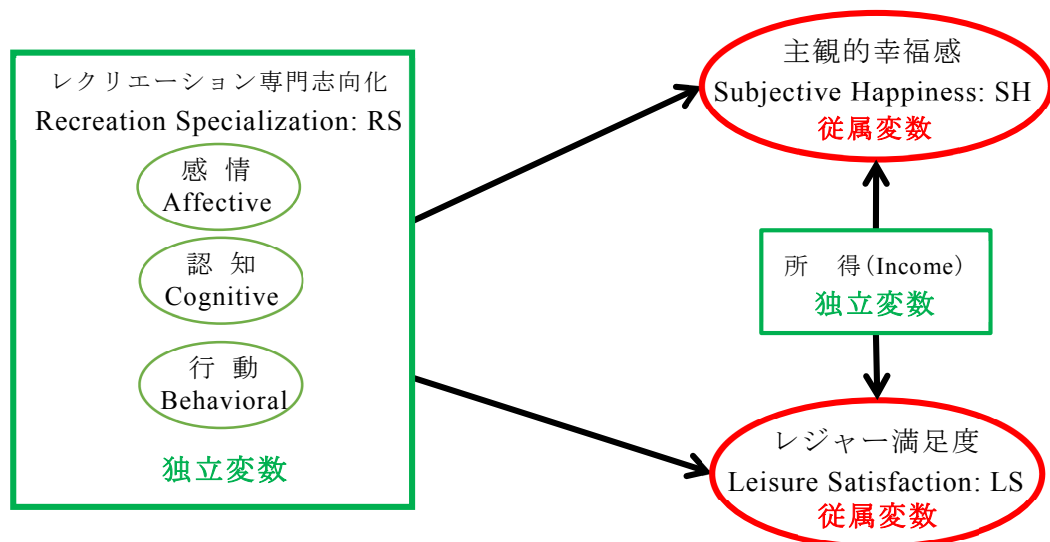


図1. 研究モデル
Figure1. Research model

2. 方法

1) 研究セッティングおよびデータの収集

本章の研究は、前述の目的を検証するためにアメリカ在住の釣り人を対象とした。調査はF大学のウェブサイトにおいて利用できるオンライン調査作成ツールによって調査票を作成し、オンライン調査で実施した。データ収集は、2014年5月に Amazon Mechanical Turk^{注1)}のクラウドソーシングによる調査パネルを利用して実施した。回答者は、Amazon

Mechanical Turk のサイトに記載された参加条件^{注2)}「最も好きなレジャー活動が釣りでない場合は、参加資格がない」ことを確認し、趣旨目的および調査同意についての説明に関する Informed Consent (章末資料 1) に同意のチェックをしてから調査項目に回答した。回答者には謝礼として Amazon Mechanical Turk を通じて回答の正確性を問わず全参加者に 80 セントを支払った。この結果 435 名が本調査に参加し、すべての質問項目に回答した 365 名 (83.9%) の有効回答がデータ分析に使われた。

2) 測定項目

先行研究においてレクリエーション専門志向化は、感情・認知・行動の 3 局面による多次元指標によって測定されることが多い^{2,3)}。本研究では、Schroeder ら⁴⁾および Beardmore ら⁵⁾の研究をもとに感情局面 (Attraction : 愛着, Self-expression : 自己表現, Centrality : 中心性), 認知局面 (Knowledge : 知識, Skill : 技術, Equipment : 用具), 行動局面 (Resistance to change : 種目変更への抵抗, Experience : フィッシング経験) の 3 局面を 8 因子 (次元) 21 項目により測定した。

主観的幸福感は、Lyubomirsky と Lepper¹⁾が作成した主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale, 以下 SHS と示す) を用いた。この尺度は一般的にどれほど幸福であるかを示す 4 項目で構成されている (章末資料 2)。レジャー満足度はフィッシングに対する満足度に関して 1 項目で回答を求めた (How would you rate your fishing satisfaction?)。レクリエーション専門志向化指標は、1 = 「全く同意しない (Strongly Disagree)」から 7 = 「非常に同意する (Strongly Agree)」の 7 段階のリッカートタイプにて評定させた。また、LS は、1 = 「全く満足していない (Very Dissatisfied)」から 7 = 「非常に満足している (Very Satisfied)」の 7 段階のリッカートタイプによって評定させた。SHS は、7 段階により評定させた。人口統計的特性は、年齢、性別、人種、所得、最終学歴について回答を求めた。

3) 分析

分析に関しては、まず 8 因子で構成されたレクリエーション専門志向化指標の因子構造の妥当性を検証するため確認的因子分析を行った。確認的因子分析は、観測した変数の潜在因子の構造を想定してモデルの評価・解釈を行うことが可能である。しかし、共分散構

造解析である確認的因子分析は、サンプルサイズや観測変数の数に影響を受けることから、因子構造の妥当性の判断には、複数の適合度指標を用いた。具体的には、自由度の影響を考慮し χ^2 を自由度で除した値である Chi-square to degree of freedom ratio (以下 χ^2/df と示す)、サンプルサイズに依存しないモデルの評価が可能な Goodness of fit index (以下 GFI と示す)、GFI のパラメーター数の影響を考慮した Adjusted goodness of fit index (以下 AGFI と示す)、独立モデルとの比較で適合度がどれほど改善されたかを評価する Comparative fit index (以下 CFI と示す)、モデルの複雑さによる見かけの適合度上昇を調整する Root mean square error of approximation (以下 RMSEA と示す) を用いて判断した⁶⁾。さらに各因子の内的整合性を確認するために Cronbach の α 係数を算出し、また、収束妥当性を確認するため平均分散抽出 (Average variance extracted: 以下 AVE と示す) を算出した。そして、レクリエーション専門志向化指標の信頼性および妥当性を確認した後に、各因子の項目得点を用いて 2 段階クラスター分析 (Two step cluster analysis) を行い、回答者を専門志向化のレベルによって類型化した。

SHS については、1 項目の逆転項目 (項目 4) を反転させ平均得点を算出した。また、人口統計的特性については、各クラスターと χ^2 検定および Fisher の正確検定を行った。最後に、専門志向化レベルのクラスターおよび所得を独立変数とした対応のない 2 要因分散分析を行い、SH・LS の関係性を検証し、主効果が認められた要因に対して Scheffe 法による多重比較検定を行った (有意水準 5%)。これらの解析は IBM SPSS Statistics 22, AMOS 22 (日本アイ・ビー・エム株式会社) を用いて行った。

3. 結果

1) レクリエーション専門志向化指標の検証

レクリエーション専門志向化指標の 3 局面 8 因子に対する確認的因子分析によって構成概念の妥当性を検討した。適合度指標である χ^2/df は、2.41 と基準の 3.00 を下回った⁷⁾。また、GFI=.92, AGFI=.87, CFI=.96 は、AGFI 以外は、基準値の .90 以上を示し、RMSEA=.062 は許容範囲内 ($\leq .080$) であった⁸⁾。AGFI は基準値をやや下回ったが、それ以外の適合度指標がすべて許容値を示し、また、AGFI も近似値であることから、データの適合度は良好であると考えられる (表 1)。さらに、内的整合性を示す Cronbach の α 係数と収束妥当性

を示す平均分散抽出(AVE)を算出し検証を行った。 α 係数はEquipment因子が.64, Experience因子が.55 と内的整合性が高いとされる.70~.90 以上を満たしていないが、小塩⁹⁾は、.50以下を検討の判断基準としていることから許容範囲と考え、すべての因子において内的整合性が認められたと判断した。収束妥当性を示す AVE はすべての因子において基準値 ($\geq .50$) を上回った¹⁰⁾。

表 1. 確認的因子分析結果

Table 1. Confirmatory Factor Analysis of Dimensions and Items

Dimensions and Factor items	λ	Mean	SD
Affective Dimension			
Attraction ($\alpha=.88$, AVE=.75)		6.03	0.93
Fishing is one of the most enjoyable things to do.	.90	6.11	0.96
Fishing is interesting to me.	.79	6.24	0.82
Fishing is important to me.	.90	5.75	1.28
Self-expression ($\alpha=.77$, AVE=.54)		5.22	1.04
When I am fishing, others see me the way I want them to see me.	.74	4.95	1.28
You can tell a lot about a person when you see them fishing.	.71	4.96	1.37
When I am fishing I am really myself.	.78	5.76	1.04
Centrality($\alpha=.87$, AVE=.61)		4.79	1.31
I find a lot of my life is organized around fishing.	.73	4.35	1.52
Fishing plays a central role in my life.	.81	4.54	1.52
Fishing is an annual tradition that has become important to me.	.80	5.47	1.38
Cognitive Dimension			
Knowledge ($\alpha=.94$, AVE=.84)		5.30	1.15
I am knowledgeable about fishing.	.93	5.39	1.13
I really know much about fishing.	.94	5.27	1.23
I consider myself an educated consumer regarding fishing.	.88	5.24	1.28
Skill ($\alpha=.70$, AVE=.53)		4.82	1.09
Given the fishing skills I have developed, it is important I continue fishing.	.80	5.43	1.05
Improving my fishing skills is more important to me.	.79	5.32	1.25
I would describe my skill level in fishing as advance or expert.	.58	3.72	1.75
Equipment($\alpha=.64$, AVE=.52)		5.25	1.09
I have acquired equipment that I can only use for fishing.	.69	5.88	1.11
Compared to other angler, I own good fishing equipment.	.75	4.61	1.42
Behavioral Dimension			
Resistance to change ($\alpha=.88$, AVE=.79)		5.42	1.24
I have a preference for fishing over other leisure activities.	.91	5.57	1.28
Even if close friends recommend other recreational activities, I prefer fishing.	.88	5.28	1.33
Experience ($\alpha=.55$ AVE=.59)			
Fishing experience (Year / month)	.74	16.24	12.85
Fishing trip holiday in last 12 months	.80	2.21	3.50

† $\chi^2(df) = 377.94(157); \chi^2/df = 2.41; GFI = .92; AGFI = .87; CFI = .96; RMSEA = .062$

†† λ = Standardized factor loading; AVE = Average variance extracted

††† 7 point Likert scale(1=Strongly Disagree,2=Disagree,3=Somewhat Disagree,4=Neither Agree nor Disagree 5=Somewhat Agree, 6=Agree, 7=Strongly Agree).

2) レクリエーション専門志向化のクラスタリング

レクリエーション専門志向化の各因子による 2 段階クラスター分析を行った (表 2)。

この結果、適合度指標である BIC および AIC の推移と解釈の可能性を総合しレクリエーション専門志向化のレベル（図 2・3 では RS と示す）を 3 クラスターに類型化した。第 1 クラスター（ $n=56, 15.3\%$ ）は、各因子の平均得点がいずれも高く専門志向化が進んでいることから高専門志向化群（以下 High と示す）と命名した。第 2 クラスター（ $n=186, 51.0\%$ ）は、因子によって平均値が第 1 クラスターに近い場合と第 3 クラスターに近い場合があるが中程度の専門志向化であることから中専門志向化群（以下 Middle と示す）とした。第 3 クラスター（ $n=123, 33.7\%$ ）は、いずれの因子の平均値も低いことから低専門志向化群（以下 Low と示す）と命名した。

表 2. レクリエーション専門志向レベルのクラスター重心および SHS 得点, LS 得点
Table 2. Cluster weight of Recreation Specialization Factors, SHS and Leisure Satisfaction

	Number of Items	Cluster1		Cluster2		Cluster3		Total	
		High specialization ($n=56$)		Middle specialization ($n=186$)		Low specialization ($n=123$)		($n=365$)	
Factors		<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>
Attraction	3	6.80	0.36	6.42	0.51	5.10	0.87	6.03	0.93
Self-expression	3	6.10	0.75	5.48	0.77	4.43	0.98	5.22	1.04
Centrality	3	6.02	0.82	5.24	0.83	3.54	1.09	4.79	1.31
Knowledge	3	6.31	0.93	5.68	0.67	4.26	1.04	5.30	1.15
Skill	3	6.04	0.69	5.18	0.66	3.73	0.76	4.82	1.09
Equipment	2	6.34	0.59	5.55	0.67	4.29	1.06	5.25	1.09
Resistance to change	2	6.54	0.67	5.88	0.68	4.23	1.16	5.42	1.24
Experience(year)	1	22.30	12.80	16.58	12.92	12.95	11.74	16.24	12.85
Fishing trip Holiday(last 12 months)	1	7.18	5.85	1.61	1.86	0.85	1.45	2.21	3.50
Subjective Happiness Scale(SHS)	4	6.65	0.47	6.19	0.60	5.36	0.90	5.98	0.85
Leisure Satisfaction	1	5.46	1.25	5.01	1.10	4.76	1.20	4.99	1.18

3) 人口統計的特性

表 3 にクラスター別の人口統計的特性（年齢、性別、人種、所得、最終学歴）を示した。 χ^2 検定、Fisher の正確検定の結果、所得に有意な差が認められた ($p=.038$)。その他の人口統計的特性に有意な差は見られなかった。U.S. Fish and Wildlife Service が 2011 年に行ったアメリカ在住の釣り人に対する調査¹¹⁾と本調査の結果を比べると、本調査の性別は、男性 (69.3%)、女性 (30.7%)、Wildlife Service の調査は、男性 (73%)、女性 (27%) であった。年齢は、本調査 19-24 歳 (21.4%)、25-34 歳 (50.1%)、35-44 歳 (14.8%)、45-54 歳 (7.4%)、55 歳以上 (6.0%) であった。Wildlife Service の調査は 16-24 歳 (11%)、25-34 歳 (19%)、

35-44 歳 (18%), 45-54 歳 (22%), 55 歳以上 (30%) であった。所得は, 本調査 \$25,000 未満 (27.4%), \$25,000-59,999 (49.3%), \$60,000-99,999 (17.5%), over \$100,000 (5.8%) であった。Wildlife Service の調査は, \$25,000 未満 (15%), \$25,000-49,999 (21%), \$50,000-99,999 (33%), \$100,000 以上 (20%), Not reported (11%) であった。人種は, 本調査 White (77.5%), African American (6.6%), Asian (8.5%), Hispanic (5.8%), Other (1.1%) であった。Wildlife Service の調査は, White (86%), African American (7%), Asian American (2%), All others (5%) であった。最終学歴は, 本調査 High school graduate or less (12.3%), Some college (37.8%), College graduate only (41.4%), Post graduate (8.5%) であった。Wildlife Service の調査は, 11 years or less (11%), 12 years (32%), 1 to 3 years of college (26%), 4 years of college (19%), 5 years or more college (12%) であった。

表 3. クラスター別の人口統計的特性

Table 3. Recreation Specialization Cluster Profiles of Demographics

	Cluster1		Cluster2		Cluster3		Total	
	High specialization		Middle specialization		Low specialization			
Segment size	<i>n</i> =56		<i>n</i> =186		<i>n</i> =123		<i>n</i> =365	
Segment (% of total)	15.3%		51.0%		33.7%		100%	
Age Fisher's Exact test=7.43 <i>n.s.</i>	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%
19-24	8	14.3%	42	22.6%	28	22.8%	78	21.4%
25-34	25	44.6%	94	50.5%	64	52.0%	183	50.1%
35-44	13	23.2%	25	13.4%	16	13.0%	54	14.8%
45-54	7	12.5%	13	7.0%	7	5.7%	27	7.4%
55+	3	5.4%	12	6.5%	8	6.5%	22	6.0%
Gender $\chi^2(2)=0.50$ <i>n.s.</i>								
Male	41	73.2%	127	68.3%	85	69.1%	253	69.3%
Female	15	26.8%	59	31.7%	38	30.9%	112	30.7%
Race Fisher's Exact test=18.03 <i>n.s.</i>								
White/Caucasian	45	80.4%	146	78.5%	92	74.8%	283	77.5%
African American	6	10.7%	11	5.9%	7	5.7%	24	6.6%
Hispanic	3	5.4%	12	6.5%	6	4.9%	21	5.8%
Asian	1	1.8%	13	7.0%	17	13.8%	31	8.5%
Native American	0	0.0%	0	0.0%	1	0.8%	1	0.3%
Pacific Islander	1	1.8%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.3%
Other	0	0.0%	4	2.2%	0	0.0%	4	1.1%
Income Fisher's Exact test=13.06 <i>p</i> =.038								
Less than \$25,000	7	12.5%	58	31.2%	35	28.5%	100	27.4%
\$25,000-59,999	32	57.1%	90	48.4%	58	47.2%	180	49.3%
\$60,000-99,999	13	23.2%	32	17.2%	19	15.4%	64	17.5%
over \$100,000	4	7.1%	6	3.2%	11	8.9%	21	5.8%
Education Background Fisher's Exact test=6.67 <i>n.s.</i>								
High School graduate or less	10	17.9%	25	13.4%	36	29.3%	45	12.3%
Some college	20	35.7%	66	35.5%	57	46.3%	138	37.8%
College graduate only	19	33.9%	80	43.0%	19	15.4%	151	41.4%
Post graduate	7	12.5%	15	8.1%	11	8.9%	31	8.5%

4) レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度

SH・LS と、専門志向化レベルおよび従属変数に影響を及ぼしている可能性がある所得の関係を検討するために対応のない2要因分散分析を行った。SHS 得点においては専門志向化レベル ($F(2,353)=4.76, p=.009, \eta^2_p=.026$), および所得 ($F(3,353)=3.43, p=.017, \eta^2_p=.028$) に有意な主効果が見られたが交互作用は認められなかった ($F(6,353)=.064, p=.999, \eta^2_p<.001$)。多重比較検定を行ったところ、SHS の得点は、専門志向化レベルの High が Middle・Low より有意に高く (Low・Middle < High), 所得\$25,000 未満 (250 万円未満) の人は、それ以上の所得の人より有意に低かった ($p<.05$) (図 2)。

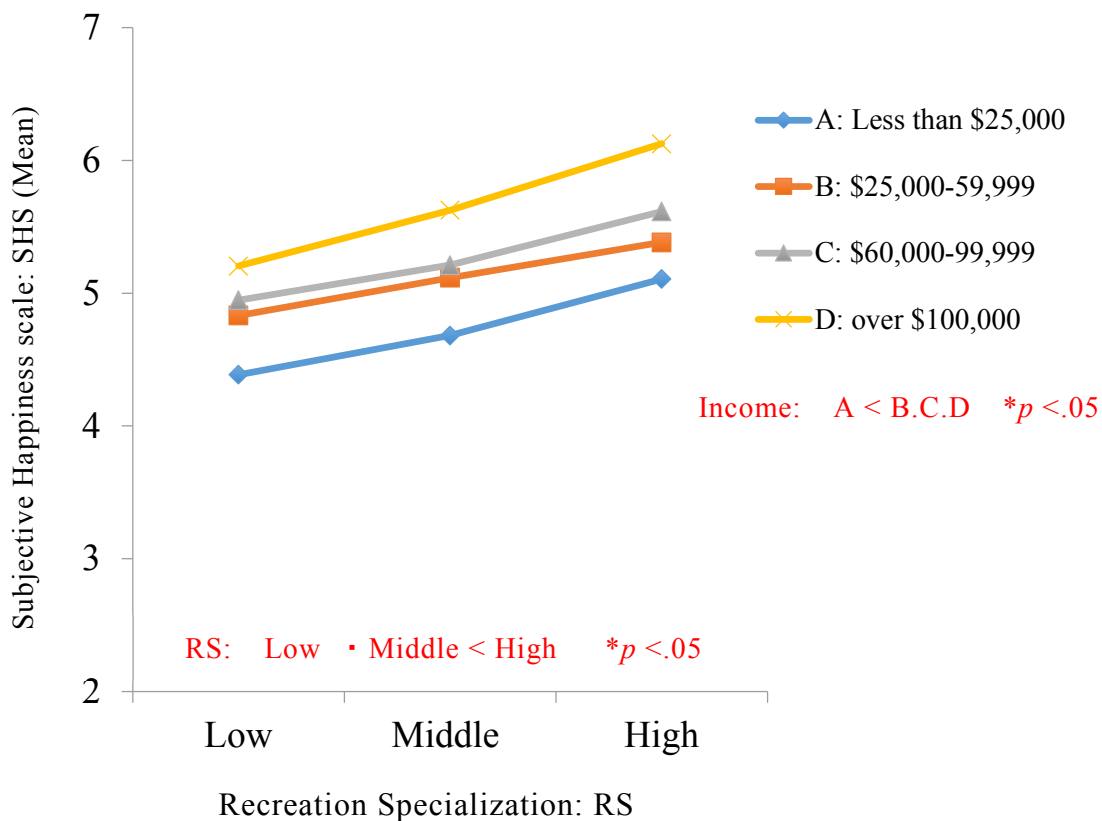


図 2. 対応のない2要因分散分析および多重比較 (主観的幸福感)
Figure 2. Two-way ANOVA and Post-hoc of Subjective Happiness

また、LS 得点においては専門志向化レベル ($F(2,353)=43.82, p<.001, \eta^2_p=.199$) に有意な主効果が認められた。所得の主効果 ($F(3,353)=.83, p=.476, \eta^2_p=.007$) および交互作用 ($F(6,353)=.58, p=.743, \eta^2_p<.001$) は認められなかった。多重比較検定を行ったところ、LS の得点は専門志向化レベルの High が Middle・Low より有意に高く、Middle が Low より有意に高かった (Low < Middle < High) ($p<.05$) (図 3)。

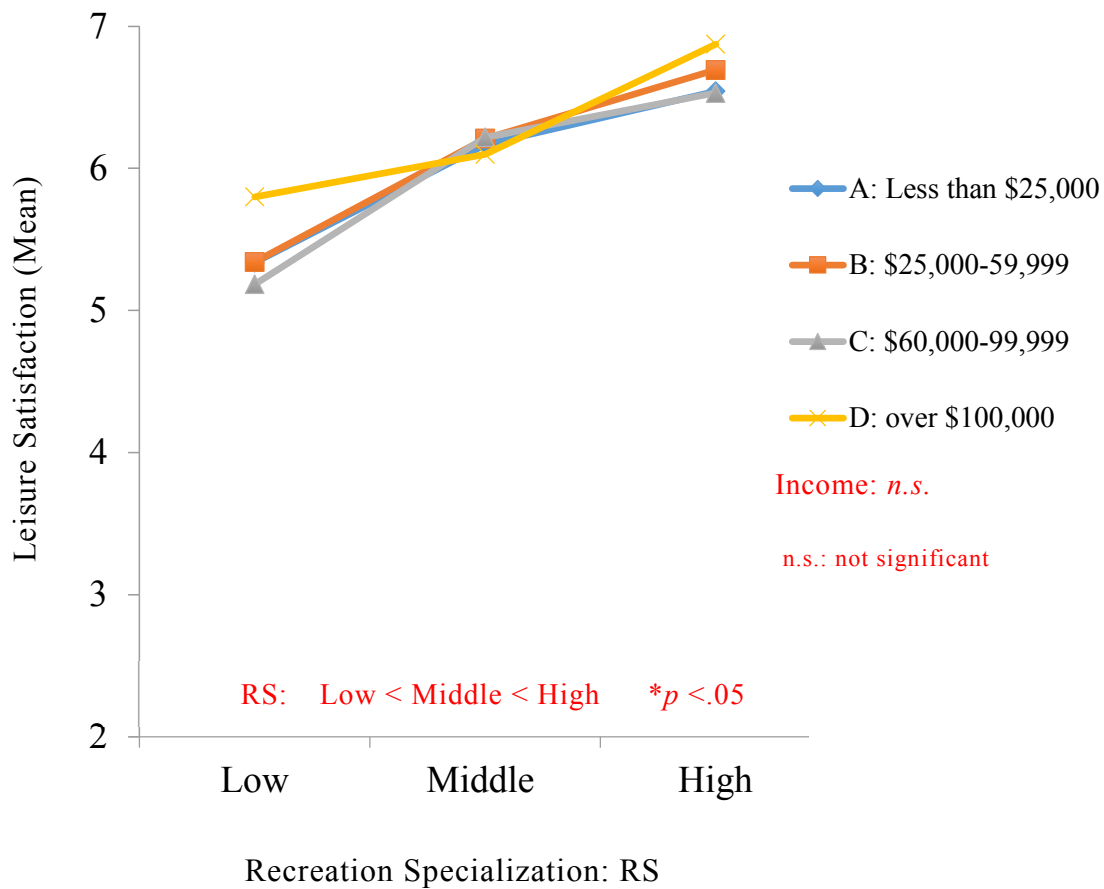


図 3. 対応のない 2 要因分散分析および多重比較 (レジャー満足度)
Figure 3. Two-way ANOVA and Post-hoc of Leisure Satisfaction

4. 考察

本章の目的は、レクリエーション専門志向化指標、主観的幸福感尺度を用いて、アメリカ在住の釣り人を対象にレクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性を明らかにすることであった。

人口統計的特性においては、2011年のU.S. Fish and Wildlife Serviceの調査結果と比較して、高年齢者がやや少なく、高所得者も少ない結果であった。この結果は、インターネットのクラウドソーシングを用いたオンライン調査であることから、インターネットの利用頻度が多い低年齢者にデータがやや偏ったと考えられる。ゆえに所得も全体的に低いものであった。しかし、男女比、年齢構成、所得、人種、最終学歴に関して、概ねアメリカ在住の釣り人の構成を反映していると考えられる。また、釣り人を対象としたいくつかの研究^{12,13)}は、フィッシングクラブや協会に所属している人、各種の釣り許可証を購入している人を対象としていることから、フィッシング活動の頻度が一定以上の人が対象となることが推測される。しかし、本調査は、アメリカ在住の釣り人の構成をほぼ反映し、レクリエーション専門志向化が高まっていない、もしくは、レクリエーション専門志向化をしようとしていない愛好者を含むデータとして価値があると考えられる。

レクリエーション専門志向化指標は、先行研究を参考に作成され、確認的因子分析およびCronbachの α 係数、AVEの結果から信頼性と妥当性が確認されたことから、本調査における釣り人のレクリエーション専門志向化指標は妥当であったと考えられる。また、2段階クラスター分析から、釣り人をレクリエーション専門志向化レベルによって3つのクラスターに分類することができた。抽出された3つのクラスターは、High・Middle・Lowのレベルでレクリエーション専門志向化した釣り人を十分に説明できたと考えられる。

個人のライフスタイルにおける余暇活動の実施に関しては、状況に応じて、休止、中断、再開などが十分考えられ、行動局面である経験が、レクリエーション専門志向化に影響を与えていないとする研究もある¹⁴⁾。しかし、本調査の結果は、クラスター重心から見て、行動、感情、認知の各局面からバランスよくクラスタリングが行われたと考えられる。

クラスタリングされたレクリエーション専門志向化と所得を独立変数、SHS得点とLS得点を従属変数とした対応のない2要因分散分析を行った(図4)。

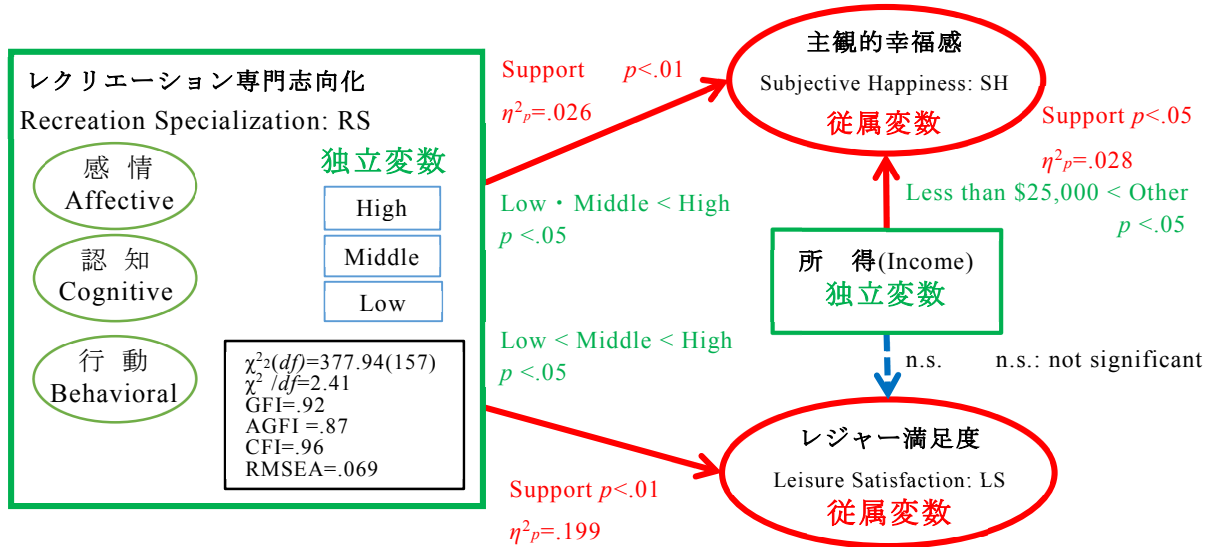


図 4. 研究モデルの検証
Figure 4. Results of Research Model

この結果、レクリエーション専門志向化の主効果が認められ、多重比較検定の結果、High が Middle · Low より高い SH を示した (Low · Middle < High)。これは、High の SH がそれ以外の専門志向化群よりも高いということであり、継続的にフィッシング活動を実施し専門志向化したことと SH に関連性が認められたことを示唆している。フィッシング活動に対するレクリエーション専門志向化のレベルが上がることで、SH の高さに関係があることが推察される。所得の関係が認められた点については、Blanchflower と Oswald¹⁵⁾が個人の所得増加に伴って幸福度を引き上げると指摘したことを支持したものであった。しかし、Diener と Biswas-Diener¹⁶⁾は、ドイツのパネルデータから、幸福度と所得が同調しないことを報告し、筒井ら¹⁷⁾は、所得の高い人の幸福度は高いが、一定以上の所得を超えると幸福度が低下し飽和点があることを指摘している。本章のサンプルは、U.S. Fish and Wildlife Service の調査に比べて、低年齢、低所得者の分布が多かったことも本調査結果に影響したと考えられる。また、専門志向化レベルと所得の Fisher の正確検定の結果から、High に低所得の割合が少なかったことの影響が考えられる。

LS に関しても、レクリエーション専門志向化の主効果が認められた。多重比較検定の結果から、Low よりも Middle の得点が有意に高く、Middle よりも High の得点が有意に高かった (Low < Middle < High)。これは、レクリエーション専門志向化のレベルが高いほど LS

が高いことを意味し、フィッシング活動の継続的な実施に伴うレクリエーション専門志向化とLSに関係があることが示唆された。Iso-AholaとWeissinger¹⁸⁾は、レジャーにおける退屈感が多いほど、LSが低くなることを指摘していることから、継続的なレジャー活動によるレクリエーション専門志向化が高い人は、退屈感を感じるものが少なく、LSが高い人ほど経験が継続されたことが推察される。LSが高いことから、次回の活動への期待が高く、動機づけも高まることによって、レジャー活動の継続が行われ、レクリエーション専門志向化が高くなる可能性を示唆している。

これらレクリエーション専門志向化とSH・LSとの関係全体を見ると、レジャー活動の実施に伴うLSの増加と専門志向化の関係が認められ、よりレクリエーション専門志向化した人のSHが高いということから、レクリエーション専門志向化やLSが高まることによって、SHも高まる可能性を示唆していると考えられる。

5. 結論

本章の研究目的は、アメリカ在住の釣り人を対象に、レクリエーション専門志向化指標と主観的幸福感尺度を用いて、レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性を明らかにすることであった。

調査の結果、レクリエーション専門志向化指標は、確認的因子分析およびCronbachの α 係数、AVEによって感情、認知、行動の3局面による専門志向化モデルの妥当性、信頼性が確認された。また、2段階クラスター分析によって、専門志向化レベルをHigh・Middle・Lowの3段階にバランスよく類型化することができた。

そして、レクリエーション専門志向化とSHの関係については、HighがMiddle・Lowより高い幸福感を示し(Low・Middle < High)、レクリエーション専門志向化とLSの関係では、LowよりもMiddleが高く、MiddleよりもHighが高かった(Low < Middle < High)。従って、レクリエーション専門志向化の高まりによって、SH・LSが高まる可能性が考えられた。

しかし、SHの高い人がレジャー活動に参加し、LSが高くなる。もしくは、よりSHの高い人がレクリエーション専門志向化している可能性も考えられる。レクリエーション専門志向化の発達や進行に伴う、SH・LSの変化に関する検証を横断的研究において行うこ

とは困難であり、長期間のレジャー活動によるレクリエーション専門志向化に伴う SH・LS の変化を縦断的研究によって調査することも難しい。

本章の課題は、レクリエーション専門志向化の形成過程における、レクリエーション専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度に与える影響について、インタビュー調査による質的分析の検証を行うことであると考えられる。

第2章 注記および引用文献

注記

注 1) Amazon Mechanical Turk は, US Amazon.com (<https://www.mturk.com/mturk/welcome>: 参照 2015-2-1) のクラウドソーシングを利用し安価で大量の実験・調査データを収集するものであり, 近年英語圏で多数の研究が行われ信頼性が検討されている. Buhrmester ら¹⁹⁾は, Amazon Mechanical Turk のサンプルが学生サンプルと比較して幅広い人口統計的背景を持つデータを収集できることを指摘している. さらに, その他のインターネット調査の参加者と比較しても, 幅広い人口統計的背景のサンプルデータを取得できるとしている. 信頼性に関しても, その他のインターネット調査, 伝統的な留め置き法などの調査手法と比較しても尺度の信頼性が変わらないとしている. また, Behrend ら²⁰⁾も, インターネット調査において検証をしていることから Amazon Mechanical Turk の信頼性は担保できると考えられる. 日本でもクラウドワークス (<http://crowdworks.jp/>: 参照 2015-5-9), lancers (<http://www.lancers.jp/>: 参照 2015-5-9) やヤフークラウドソーシング (<http://crowdsourcing.yahoo.co.jp/>: 参照 2015-2-1) が存在している.

注 2) Amazon Mechanical Turk において回答者は, 調査の説明に書かれた内容やキーワードから調査に参加するかを決定する. 今回の調査では, 「Let me understand your psychological behavioral characteristics as an Angler! You are NOT qualified if your most favorite leisure activity is NOT fishing. Please carefully read questionnaire items and answer them.」と記載され, キーワード (Key word) は, 「short survey, Fishing, Leisure, Hobbies, Recreation」である.

引用文献

- 1) Lyubomirsky S and Lepper HS: A measure of subjective happiness: Preliminary reliability and construct validation. *Social Indicators Research*, 46(2): 137-155, 1999.
- 2) McIntyre N and Pigram JJ: Recreation specialization Reexamined: The case of Vehicle-Based campers. *Leisure Sciences*, 14(1): 3-15, 1992.
- 3) Oh C-O, Sorice MG, Ditton RB: Exploring Progression along the Recreation Specialization Continuum Using a Latent Growth Approach. *Leisure Sciences*, 33(1): 15-31, 2010.
- 4) Schroeder SA, Fulton DC, Lawrence JS, Cordts SD: Identity and Specialization as a Waterfowl

Hunter. *Leisure Sciences*, 35(3): 218-234, 2013.

5) Beardmore B, Haider W, Hunt LM, Arlinghaus R: Evaluating the Ability of Specialization Indicators to Explain Fishing Preferences. *Leisure Sciences*, 35(3): 273-292, 2013.

6) 出村慎一, 西島尚彦, 長澤吉則, 佐藤進: 健康・スポーツのための SPSS による多変量解析. 東京, 杏林書院, 2004.

7) Hair F, Black C, Anderson R, Tatham RL: *Multivariate data analysis* (5th ed.). Prentice Hall: Upper Saddle River, NJ, USA, 2006.

8) Hu L and Bentler PM: Cutoff criteria for fit indexes in covariance structure analysis: Conventional criteria versus new alternatives. *Structural Equation Modeling: A Multidisciplinary Journal*, 6(1): 1-55, 1999.

9) 小塩真司: SPSS と AMOS による心理・調査データ解析. 東京, 東京図書, 2005.

10) Fornell C and Larcker DF: Evaluation Structural Equation Models with Unobservable Variables and Measurement Error. *Journal of Marketing Research*, 18(1): 39-50, 1981.

11) U.S. Fish and Wildlife Service and U.S. Census Bureau: 2011 National survey of Fishing, Hunting, and Wildlife-Associated Recreation. U.S. Department of the Interior, U.S. Fish and Wildlife Service, U.S. Department of Commerce, U.S. Census Bureau, 2012.

12) Oh C-O, Sutton SG, Sorice MG: Assessing the Role of Recreation Specialization in Fishing Site Substitution. *Leisure Sciences*, 35(3): 256-272, 2013.

13) Stephens MH and Ditton RB: Fishing Trip Satisfaction: A Typology of Anglers. *North American Journal of Fisheries Management*, 12(1): 28-33, 1992.

14) Scott D and Godbey G: Recreation specialization in the social world of contract bridge. *Journal of Leisure Research*, 26(3): 275-295, 1994

15) Blanchflower DG and Oswald AJ: Well-being over time in Britain and the USA. *Journal of Public Economics*, 88(7-8): 1359-1386, 2004.

16) Diener ED and Biswas-Diener R: Will money increase subjective well-being? *Social Indicators Research*, 57(September 2001): 119-169, 2002

17) 筒井義郎, 大竹文雄, 池田新介: なぜあなたは不幸なのか. *大阪経済学*, 58: 20-57, 2009.

18) Iso-Ahola SE and Weissinger E: Leisure and Boredom. *Journal of Social and Clinical*

Psychology, 5(3): 356-364, 1987.

19) Buhrmester M, Kwang T, Gosling SD: Amazon's Mechanical Turk: A New Source of Inexpensive, Yet High-Quality, Data? Perspectives on Psychological Science, 6(1): 3-5, 2011.

20) Behrend TS, Sharek DJ, Meade AW, Wiebe EN: The viability of crowdsourcing for survey research. Behavior research methods, 43(3): 800-813, 2011.

資料 1 「Informed Consent : 同意書」

Informed Consent

My Name is Hideo Matsumoto, and I am a visiting scholar at the University of Florida. The purpose of this survey is to understand outdoor leisure participants' psychological as well as behavioral characteristics.

You will first be asked your socio-cultural characteristics, and your favorite outdoor leisure activity. Then you will be asked to answer specific questions with regard to the target leisure activity you choose. The entire process will take about 10 minutes.

Your participation is voluntary. There are no known physical or psychological risks involved with participation; however, you can ignore questions you do not want to answer. You can also withdraw from the process at any time without being penalized. Nevertheless, we will provide 1 dollar as a compensation for your participation through the Amazon Mechanical Turk if you successfully answer all the questions as well as screening questions. Screening questions are easy and straightforward. If you carefully read our survey instruction, you can definitely answer them with ease. With your permission, I would like to request your participation in this study.

Anonymity of your responses will be secured. Your identity will be kept confidential to the extent provided by law. Your identity will be unknown to researchers. If you have any questions concerning this study, please contact: Hideo Matsumoto, P.O. Box XXXX, University of Florida Gainesville, XXXXX-XXXX, Email: XXXX@XXXX. Prof. Dr. XXXX, P.O. Box XXXXX, University of Florida Gainesville, FL XXXX-XXXX, Email: XXXX@XXX.

If you have any questions with regard to your rights to participate in this study, you can also contact the UF Institutional Review Board: P. O. Box XXXX, University of Florida, Gainesville, FL XXXX-XXXX, Phone: (XXX) XXX-XXXX, Email: XXXX@XXXX

When you read the aforementioned statements, please click on one of the followings:

- I agree and participate in this study
- I disagree and do not participate in this study

資料 2 「Subjective Happiness Scale¹⁾: 主観的幸福感尺度」

Instructions to participants:

For each of the following statements and/or questions, please circle the point on the scale that you feel is most appropriate in describing you.

1. In general, I consider myself:

1	2	3	4	5	6	7
not						a very
a very						happy
happy						person
person						

2. Compared to most of my peers, I consider myself:

1	2	3	4	5	6	7
less						more
happy						happy

3. Some people are generally very happy. They enjoy life regardless of what is going on, getting the most out of everything. To what extent does this characterization describe you?

1	2	3	4	5	6	7
not at						a great
all						deal

4. Some people are generally not very happy. Although they are not depressed, they never seem as happy as they might be. To what extent does this characterization describe you?

1	2	3	4	5	6	7
not at						a great
all						deal

第3章 レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性に関する

国際比較：日米のスクーバダイバーを対象として

1. 目的

第2章では、レクリエーション専門志向化と主観的幸福感（Subjective Happiness: SH, 以下 SH と示す）・レジャー満足度（Leisure Satisfaction: LS, 以下 LS と示す）の関係性についてアメリカ在住の釣り人を対象としてその関係を明らかにした。緒言でも述べたように、主要なアウトドア活動における日米の余暇活動参加率の平均は、アメリカ 30.6%、日本 13.1% である¹⁾。また、幸福感においては、*World Happiness Report 2015*²⁾の順位をみると、日本は対象 158 カ国中 46 位、アメリカは 15 位である。このように日米において、レジャー参加率や幸福感は異なりレクリエーション専門志向化と SH・LS の関係も異なることが考えられる。また、日本における海洋スポーツ・レクリエーションの専門志向化に関する研究は、二宮が行った一連のウインドサーフィンを対象としたものが主であり、他の種目や日本と他国を比べた国際比較研究は見当たらない。そして、二宮³⁾は、日本においてもウインドサーフィン以外の活動に専門志向化の適用を広げていくことの必要性を指摘していることから、他の海洋スポーツ・レクリエーション種目を対象とすることには意義があると考えられる。

本章では、緒論でも述べたように、国際的に共通の講習システム^{注1)}を有するスクーバダイビングを対象とし、レクリエーション専門志向化指標と主観的幸福感尺度⁴⁾を用いて、レクリエーション専門志向化と SH・LS の関係性について、日米の国際比較を行うことを目的とした（図 1）。

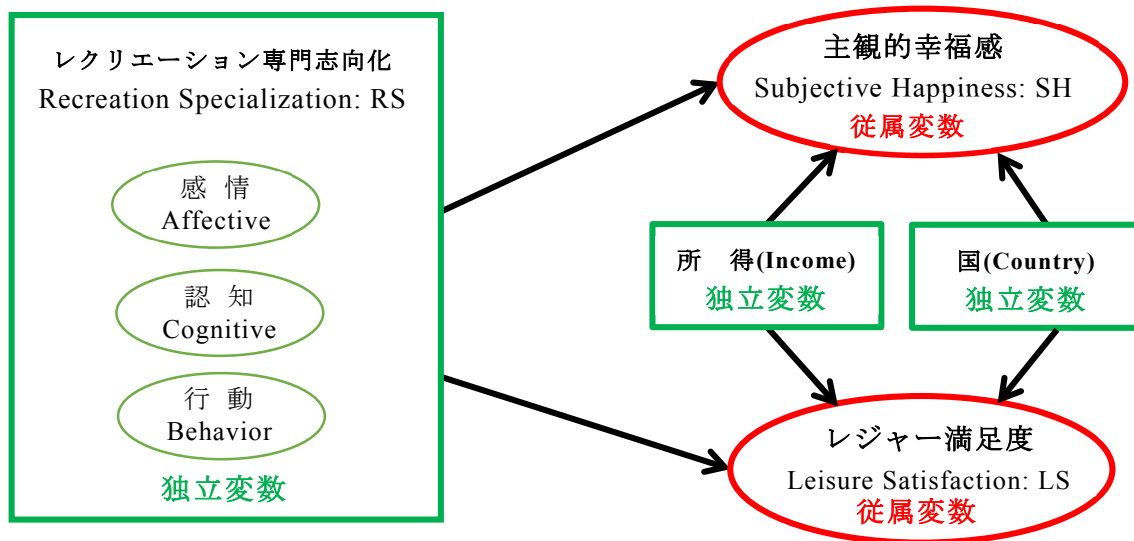


図 1. 研究モデル
Figure 1. Research Model

2. 方法

1) 研究セッティングおよびデータの収集

本章の研究は、前述の目的を検証するために日本およびアメリカ在住のスクーバダイバー（以下、ダイバーと示す）を対象とした。

アメリカにおける調査は、F大学のウェブサイトにおいて利用できるオンライン調査作成ツールによって調査票を作成し実施した。データ収集は、2015年3月に Amazon Mechanical Turk^{注2)}のクラウドソーシングによる調査パネルを利用して実施した。回答者は、Amazon Mechanical Turkのサイトに記載された参加条件を読み^{注3)}趣旨目的および調査同意についての説明に関する Informed Consent（章末資料1）に同意のチェックをしてから調査項目に回答した。回答者には謝礼として Amazon Mechanical Turk を通じて回答の正確性を問わず全参加者に 60 セントを支払った。この結果 564 名が本調査に参加した。外れ値および欠損値の多いデータのクリーニング^{注4)}後、505 名（有効回答率 90.8%）の回答がデータ分析に使われた。

日本における調査は、Survey Monkey^{注5)}のウェブサイトの調査票作成ツールを用いて作成し、オンライン調査によって実施された。データ収集は、2015年3月～6月に行った。対象者は、レクリエーション専門志向化のレベルを幅広く対象とするために、民間調査会社^{注6)}の調査パネルおよび関東、東海エリアのダイビングショップ経営者から Facebook お

よび口頭にて対象者を募り回答を依頼した。対象のサンプリングについては、幅広い経験を持つ愛好者を対象とすることに配慮を行った。なぜなら、アメリカにおける Amazon Mechanical Turk は、第2章の釣り人のサンプルからも明らかなように、アメリカ全土を対象としていることから初級レベルから上級レベルまでをカバーし、そしてアクティブな愛好者からあまりアクティブでない愛好者までのサンプルを得ることが可能である。しかし、日本のダイビングショップの顧客やダイビングエリアにおける調査では、あまりアクティブでない愛好者や初級レベルの愛好者のデータを多数取得することは困難でありアクティブな愛好者に偏る可能性が考えられる。従って、民間調査会社の調査パネルを利用し、「スクーバダイビングを趣味としているか」、「調査の研究発表に同意するか」の2項目をスクリーニング項目として設定し、あまりアクティブでない愛好者のデータを収集することとした。

この結果、調査パネル 5,280 名から、スクリーニング項目によって 390 名がスクーバダイビングを趣味していると答え、調査の研究発表に同意した 333 名のデータが対象となった。また、ダイビングショップの関係で 340 名が回答し、計 673 名が本調査に回答し、外れ値および欠損値の多いデータのクリーニング^{注4)}後、512 名（有効回答率 92.1%）の回答がデータ分析に使われた。なお、民間調査会社の調査パネルは、回答することによってポイントを受け取るシステムであった。

2)測定項目

第2章において用いたレクリエーション専門志向化指標は、Schroeder ら⁵⁾と Beardmore ら⁶⁾の研究を参考に感情・認知・行動の3局面の多次元において作成された。本章では、質問項目の修正を行い、感情局面（Attraction：愛着，Self-expression：自己表現，Centrality：中心性）、認知局面（Knowledge：知識，Skill：技術，Equipment：用具）、行動局面（Resistance to change：種目変更への抵抗，Diving Experience：ダイビング経験）の3局面8因子（次元）25項目により測定した。また、ダイビング経験は、総潜水本数、過去12カ月の潜水本数、経験年数、過去12カ月のダイビング旅行日数の4項目とした。

このレクリエーション専門志向化指標の質問文は、英語圏の文献が基になっていることから、レクリエーション専門志向化指標の日本語版の作成については、英語で開発された

尺度や質問文を日本語に翻訳した際の信頼性を得るために用いられるバックトランスレーションの手法を用いた。手順としては、アメリカ在住で英語が堪能な日本人研究者2名のうち1名が英語版の専門志向化指標を和訳し、別の1名がその和訳を英訳した。その後、日本語がネイティブレベルのアメリカ人と著者、および英訳と和訳を実施した2名の日本人研究者によって文章の差を確認した。修正にあたっては、英文の質問が第2章および英語圏の先行研究にて使われていることから、原則として、既存の英語質問文を優先し日本語の質問文を修正する形とした。この結果、質問文の意味、ニュアンス、概念に違いはないと判断した。

SHは、第2章と同様に Lyubomirsky と Leeper⁴⁾が作成した主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale : 以下 SHS と示す) を用いた。この尺度は一般的にどれほど幸福であることを示す4項目で構成されている (章末資料3)。日本での調査には、島井ら⁷⁾がバックトランスレーションの手法によって作成した「日本語版主観的幸福感尺度」を用いた (章末資料4)。この尺度は、再テスト信頼性、収束妥当性、弁別妥当性が高く、国際比較を行うことが可能である。また、レジャー満足度は、第2章と同様にダイビングに対する満足に関して1項目で回答を求めた (How would you rate your scuba diving satisfaction? : あなたはどの程度スクーバダイビングに満足していますか?)。段階評定については、レクリエーション専門志向化は、1=「全く同意しない (Strongly Disagree)」から7=「非常に同意する (Strongly Agree)」の7段階のリッカートタイプにて評定させた。LSは、1=「全く満足していない (Very Dissatisfied)」から7=「非常に満足している (Very Satisfied)」の7段階のリッカートタイプによって評定させた。SHSは、7段階により評定させた。人口統計的特性は、性別、年齢、所得、人種 (アメリカのみ)、最終学歴について回答を求めた。

3) 分析方法

分析は、まず、人口統計的特性については、各属性と国について χ^2 検定を行った。次に3局面8因子 (次元) によるレクリエーション専門志向化指標の構成概念の妥当性を検証するために確認的因子分析を行った。第2章でも述べたように、共分散構造解析である確認的因子分析は、サンプルサイズや観測変数の数に影響を受けることから、因子構造の妥当性の判断には、複数の適合度指標を用いることとした。特に、本調査においては、サン

プルサイズが 1,000 を超えていることから確認的因子分析における適合度指標においては、 χ^2 値に基づく指標は参考程度とし、サンプルサイズに依存しないでモデルの評価が可能な GFI, AGFI, CFI, RMSEA によりモデルの適合度を検証した。さらに各因子の内的整合性を確認するため Cronbach の α 係数を算出し、また、収束妥当性を確認するために平均分散抽出 (Average variance extracted: AVE) を算出した。

レクリエーション専門志向化指標の信頼性および妥当性を確認した後、国際比較を行うために、日米の両母集団に多母集団同時分析を実施した。多母集団同時分析は、複数の母集団からサンプリングされた標本に異質性が疑われる場合、サンプルサイズを保ちながら同時に分析できる方法である⁸⁾。また、多母集団における分析では、推定すべきパラメーターが複数の集団で同等であると仮定した等値制約を課し、課さないモデルとの差を明らかにし、どの程度まで同等であるかを確認する必要がある⁹⁾。特に比較文化研究においては、同じ項目、同じ尺度で測定可能であるかの計量的等価性に留意する必要がある¹⁰⁾。従って、本章では、日米においてレクリエーション専門志向化指標の確認的因子分析モデルが同等であるかを検討するために、日米で各構成因子が等価である配置不変モデルと、各因子から観測変数への影響が等価である制約を課した測定不変モデルの検証を行った。

多母集団同時分析における測定不変の検証は、通常 χ^2 の差 ($\Delta\chi^2$) と自由度の差 (Δdf) による χ^2 検定によってモデルが棄却されないことによって認められる。しかし、本章のサンプルサイズが日米各国 500 以上で総計 1,000 を超えていることから、 $\Delta\chi^2$ よる検定もサンプルサイズに敏感なために実用性に欠けるとの指摘¹¹⁾から、CFI や RMSEA などを参考にし実用的な視点を加味するべきだと主張する研究もある¹²⁾。従って、Chen¹³⁾や Cheung と Rensvold¹⁴⁾による CFI と RMSEA の変化による基準 ($-\Delta CFI \leq .01$, $\Delta RMSEA \leq .015$) を併用することとした。

その後、各因子の項目の平均得点を算出し、2 段階クラスター分析 (Two step cluster analysis) によって回答者の専門志向化レベルを類型化した。SHS については、1 項目の逆転項目 (項目 4) を反転させ平均得点を算出した。また、日米のスクーバダイビング経験の違いは Welch の検定を行った。最後に、専門志向化レベル、国、所得を独立変数とした対応のない 3 要因分散分析を行い、SH・LS との関係性を検証し、効果量は η^2_p を算出した。また、主効果が見られた要因に対しての多重比較検定は、Bonferroni 法を用い、交互作用

が見られた場合は、単純主効果の検定を行った。いずれも有意水準は5%とした。これらの統計解析は IBM SPSS Statistics 22, AMOS 22 (日本アイ・ビー・エム株式会社) を用いて行った。

3. 結果

1) 人口統計的特性およびスクーバダイビング経験

表1に日米の人口統計的特性(年齢, 性別, 所得, 最終学歴)を示した。

表1. 国別人口統計的特性
Table 1. Demographics of Country

	日本		アメリカ		合計	
Segment size	n=512		n=505		n=1,017	
Segment (% of total)	50.3%		49.7%		100%	
Age (年齢) $\chi^2(4)=263.6 p<.001$	<i>n</i>	<i>%</i>	<i>n</i>	<i>%</i>	<i>n</i>	<i>%</i>
19-24	67	13.1%	137	27.1%	204	20.1%
25-34	76	14.8%	251	49.7%	327	32.2%
35-44	138	27.0%	71	14.1%	209	20.6%
45-54	158	30.9%	36	7.1%	194	19.1%
55+	73	14.3%	10	2.0%	83	8.2%
Gender(性別) $\chi^2(1)=15.5 p<.001$				0.0%		
Male(男性)	265	51.8%	323	64.0%	588	57.8%
Female(女性)	247	48.2%	182	36.0%	429	42.2%
Income(所得) $\chi^2(7)=82.9 p<.001$				0.0%		
Less than \$25,000 : 250万円未満	45	8.8%	58	11.5%	103	10.1%
\$25,000-39,999 : 250万円~399万円	60	11.7%	109	21.6%	169	16.6%
\$40,000-59,999 : 400万円~599万円	99	19.3%	127	25.1%	226	22.2%
\$60,000-79,999 : 600万円~799万円	81	15.8%	80	15.8%	161	15.8%
\$80,000-149,999 : 800万円~1,499万円	123	24.0%	29	5.7%	152	14.9%
over \$150,000:1,500万円以上	31	6.1%	47	9.3%	78	7.7%
Rather not say (答えたくない)	73	14.3%	55	10.9%	128	12.6%
Education Background (最終学歴) $\chi^2(4)=96.5 p<.001$						
High School graduate or less (高校卒業以下)	134	26.2%	34	6.7%	168	16.5%
Some college (短期大学卒業)	80	15.6%	166	32.9%	246	24.2%
College graduate only (4年生大学卒業)	227	44.3%	249	49.3%	476	46.8%
Post graduate (大学院修了)	55	10.7%	51	10.1%	106	10.4%
Rather not say (答えたくない)	16	3.1%	5	1.0%	21	2.1%

χ^2 検定の結果、年齢、性別、所得、最終学歴のすべてに有意差が認められた。アメリカの人種においては、White 79.2% (400 人)、African American 5.9% (30 人)、Hispanic 4.8% (24 人)、Asian 7.1% (36 人)、Native American 1.0% (5 人)、Pacific Islander 0.4% (2 人)、Other 2.0% (10 人) であった。また、スクーバダイビングの経験を表 2 に示した。Welch の検定により、経験年数、総潜水本数、過去 12 カ月の潜水本数、過去 12 カ月のダイビング旅行日数において、すべて日本が有意に高かった。また、スクーバダイビング経験は、標準偏差が大きく、ばらつきが大きいことから 7 段階にカテゴリー化を行った。

表 2. 国別人口統計的特性の比較

Table 2. Compare between Japan and USA for diving experience

	日本		アメリカ		Welchの検定
	Mean	SD	Mean	SD	
ダイビング経験					
総潜水本数	312.0	657.6	59.4	122.0	$p < .001$
過去12カ月の潜水本数	24.7	36.6	7.7	13.4	$p < .001$
経験年数	10.1	8.6	7.1	6.8	$p < .001$
過去12カ月のダイビング旅行日数	5.4	9.5	2.3	3.1	$p < .001$

2) レクリエーション専門志向化指標の信頼性および妥当性

本章においては、対象種目が異なることと、第 2 章で用いた指標の修正を行っていることから、再度確認的因子分析を行い指標の信頼性および妥当性を検討した。また、国際比較研究において重要である、等価性について検証を行うために多母集団同時分析を行った。

レクリエーション専門志向化指標の 3 局面 8 因子 25 項目の確認的因子分析によるモデルの適合度は、 $\chi^2/df=10.13$, $GFI=.82$, $AGFI=.76$, $CFI=.86$, $RMSEA=.095$ であった。適合度指標はすべて、基準値¹⁵⁾ ($\chi^2/df: 2.00 \sim 3.00$, $GFI \cdot AGFI \cdot CFI: \geq .90$, $RMSEA \leq .08$) をクリアできないことから確認的因子分析モデルの適合が良いとは判断できなかった。

ゆえに、レクリエーション専門志向化指標の各項目について天井効果、フロア効果を確認するために平均値±標準偏差の値を算出した (表 3)。

表 3. レクリエーション専門志向化の質問項目の天井効果・フロア効果
Table 3. Ceiling and floor effect of Recreation Specialization Items

No Items	日本		アメリカ		計				
	Mean	SD	Mean±SD	Mean	SD	Mean±SD			
A1 Scuba diving is one of the most enjoyable things to do. スクューバダイビングは、最も楽しいことの1つである。	5.66	1.32	6.98	5.83	0.87	6.70	5.74	1.12	6.86
A2 Scuba diving is interesting to me. スクューバダイビングは、私にとって興味深い。	5.36	1.37	6.73	6.31	0.74	<u>7.05</u>	5.83	1.20	<u>7.03</u>
A3 Scuba diving is important to me. スクューバダイビングは、私にとって重要である。	5.84	1.15	6.99	5.63	0.99	6.62	5.74	1.08	6.82
C1 I find a lot of my life organized around scuba diving. 私の人生の多くは、スクューバダイビングに関連している。	4.08	1.52	5.60	4.37	1.47	5.84	4.22	1.50	5.72
C2 Scuba diving plays a central role in my life. スクューバダイビングは、私の人生の重要な役割を担っている。	4.73	1.46	6.19	4.40	1.47	5.87	4.57	1.47	6.04
C3 I enjoy discussing scuba diving with others (e.g. friends, family, co-workers). スクューバダイビングは、私にとって重要な役割の活動になっている。	5.03	1.53	6.56	5.91	0.92	6.83	5.47	1.33	6.80
SE1 When I am scuba diving, others see me the way I want them to see me. 私がスクューバダイビングをしているときに、周囲の人々は、私を私が望むような見方で見ている。	4.44	1.17	5.61	5.02	1.20	6.22	4.72	1.22	5.94
SE2 You can tell a lot about a person when you see them scuba diving. 私は、誰かがスクューバダイビングをしているときに、その人の多くを理解することができる。	4.76	1.27	6.03	4.70	1.44	6.14	4.73	1.36	6.09
SE3 When I am scuba diving I am really myself. 私は、スクューバダイビングをしているときに本当の自分になれる。	4.89	1.29	6.18	5.55	1.07	6.62	5.22	1.23	6.45
K1 I am knowledgeable about scuba diving. 私は、スクューバダイビングについて知識が豊富である。	4.29	1.34	5.63	5.65	0.95	6.60	4.96	1.35	6.31
K2 I know much about scuba diving. 私は、スクューバダイビングについて多くを知っている。	4.24	1.31	5.55	5.56	0.98	6.54	4.90	1.33	6.23
K3 I know better about scuba diving compared to people around me. 私は、周囲の人よりもスクューバダイビングに関してより多くを知っている。	4.50	1.29	5.79	5.60	1.11	6.71	5.05	1.32	6.37
SK1 Given the scuba diving skills I have developed, it is important that I continue to scuba dive. これまでスクューバダイビングの技術を得たのだから、スクューバダイビングを続けることは重要である。	5.08	1.25	6.33	5.72	0.94	6.66	5.40	1.15	6.55
SK2 Improving my scuba diving skills is important to me. スクューバダイビングの技術を向上させることは、私にとって重要である。	5.08	1.30	6.38	5.79	0.97	6.76	5.43	1.20	6.63
SK3 I would describe my skill level in scuba diving as advanced or expert. 私のスクューバダイビング技術は、専門的なレベルにあると思う。	3.69	1.55	5.24	4.62	1.51	6.13	4.15	1.60	5.75
EQ1 I have acquired equipment that I can only use for scuba diving. 私は、スクューバダイビング専用の器材を持っている。	4.84	2.13	6.97	5.82	1.16	6.98	5.33	1.79	<u>7.12</u>
EQ2 Compared to other divers, I own good scuba diving equipment. 他のスクューバダイバーと比べて、私はよい器材を所有している。	3.60	1.72	5.32	5.03	1.39	6.42	4.31	1.72	6.03
EQ3 I renew my scuba diving equipment regularly. 私は、定期的にスクューバダイビング器材に買い替えをしている。	2.87	1.67	4.54	4.96	1.45	6.41	3.91	1.88	5.79
RC1 I have a preference for scuba diving over other leisure activities. 私は、他のレジャー活動よりもスクューバダイビングが好きである。	5.07	1.48	6.55	5.53	1.05	6.58	5.30	1.30	6.60
RC2 Even if my close friends recommend other recreational activities, I prefer scuba diving. 親しい友人が他のレジャー活動を勧めたとしても、私はスクューバダイビングを選ぶ。	4.72	1.49	6.21	5.13	1.28	6.41	4.93	1.40	6.33
RC3 I sometimes think about scuba diving even when I am in other leisure activities. 他のレジャー活動をしているときでも、スクューバダイビングのことを考えることがある。	4.14	1.59	5.73	5.14	1.29	6.43	4.64	1.53	6.17
B1 How many dives have you done in your entire life? スクューバダイビングの総潜水本数をお答え下さい。	4.09	1.84	5.93	2.73	1.32	1.41	3.41	1.74	5.15
B2 How long have you been scuba diving? スクューバダイビングの経験年数をお答え下さい。	3.34	2.05	1.29	2.56	1.67	<u>0.89</u>	2.95	1.91	4.86
B3 Have you had a scuba diving trip holiday in last 12 months? 過去12カ月で、スクューバダイビングの旅に行きましたか。	2.48	1.70	<u>0.79</u>	1.90	1.01	<u>0.89</u>	2.19	1.43	<u>0.77</u>
B4 How many times did you go scuba diving in last 12 months? 過去12カ月で、スクューバダイビングに行った日数をお答え下さい。	4.11	2.22	6.33	3.42	1.51	4.93	3.77	1.93	5.70

各項目の天井効果およびフロア効果を確認した結果、A2「Scuba diving is interesting to me : スクーバダイビングは、私にとって興味深い」、EQ1「I have acquired equipment that I can only use for scuba diving : 私は、スクーバダイビング専門の器材を持っている」の2項目に天井効果が認められ、B3「Have you had a scuba diving trip holiday in last 12 months? : 過去12カ月で、スクーバダイビングの旅行に行きましたか」の1項目にフロア効果が認められた(表4)。同様に、収束妥当性であるAVEにおいて、Self-expression 因子は.49と基準値(≦.50)を下回った。また、各因子の因子負荷量(λ)において.70を下回る項目が6項目存在し(C3, SE1, SE2, SK3, B1, B2)、EQ2「Compared to other divers, I own good scuba diving equipment. : 他のダイバーと比べて、私はよい器材を所有している」は、日米の平均値の差が2.09であった。これらの項目を因子における意味づけと外れ値から探索的に検討した結果、天井効果(EQ1)と平均値の差が2.0を超えた(EQ3)のEquipment 因子の3項目、および因子負荷量が.70を下回った2項目(C3, B2)、収束妥当性が基準値を下回ったSelf-expression 因子の3項目を削除してモデルの修正を行った。この結果、 $\chi^2/df=5.20$, GFI=.96, AGFI=.92, CFI=.97, RMSEA=.064と、モデルの適合度は上昇した。適合度指標のGFI, AGFI, CFIは基準値≧.90をクリアし、 $\chi^2/df=5.20$ は、基準値(2.00~3.00)を上回ったが、サンプルサイズが1000を超えていることから χ^2/df の値は許容される範囲と考えられる¹⁴⁾。また、Cronbachの α 係数は、すべて.70以上、AVEは、すべて.50以上であり各因子の内的整合性、収束妥当性が認められた。

表 4. 専門志向化の確認的因子分析結果
Table 4. Results of Confirmatory Factor Analysis of Specialization Items and Dimension for research model

No.	質問項目 (Items)	初期モデル		修正モデル		Mean	SD	Mean±SD		
		λ	AVE	λ	AVE					
A1	Scuba diving is one of the most enjoyable things to do. スクューバダイビングは、最も楽しいことの1つである。	.81	.61	.82	.79	.65	.79	5.74	1.12	6.86
A2	Scuba diving is interesting to me. スクューバダイビングは、私にとって興味深い。	.79						5.83	1.20	7.03
A3	Scuba diving is important to me. スクューバダイビングは、私にとって重要である。	.74			.83			5.74	1.08	6.82
C1	I find a lot of my life organized around scuba diving. 私の人生の多くは、スクューバダイビングに関連している。	.82	.60	.80	.83	.66	.85	4.22	1.50	5.72
C2	Scuba diving plays a central role in my life. スクューバダイビングは、私の人生の重要な役割を担っている。	.82			.83			4.57	1.47	6.04
C3	I enjoy discussing scuba diving with others (e.g., friends, family, co-workers). スクューバダイビングは、私にとって重要な種類の活動になっている。	.67						5.47	1.33	6.80
SE1	When I am scuba diving, others see me the way I want them to see me. 私がスクューバダイビングをしているときに、周囲の人々は、私のことが私が望むような見方で見ている。	.62	.49	.75				4.72	1.22	5.94
SE2	You can tell a lot about a person when you see them scuba diving. 私は、誰かがスクューバダイビングをしているときに、その人の多くを理解することができる。	.63						4.73	1.36	6.09
SE3	When I am scuba diving I am really myself. 私は、スクューバダイビングをしているときに本当の自分になれる。	.83						5.22	1.23	6.45
K1	I am knowledgeable about scuba diving. 私は、スクューバダイビングについて知識が豊富である。	.95	.78	.90	.95	.78	.90	4.96	1.35	6.31
K2	I know much about scuba diving. 私は、スクューバダイビングについて多くを知っている。	.96			.96			4.90	1.33	6.23
K3	I know better about scuba diving compared to people around me. 私は、周囲の人よりもスクューバダイビングに関してより多くを知っている。	.71			.71			5.05	1.32	6.37
SK1	Given the scuba diving skills I have developed, it is important that I continue to scuba dive. これまでスクューバダイビングの技術を待たのだから、スクューバダイビングを続けることは重要である。	.75	.52	.73	.82	.66	.80	5.40	1.15	6.55
SK2	Improving my scuba diving skills is important to me. スクューバダイビングの技術を向上させることは、私にとって重要である。	.76			.81			5.43	1.20	6.63
SK3	I would describe my skill level in scuba diving as advanced or expert. 私のスクューバダイビング技術は、専門的なレベルにあると思う。	.65						4.15	1.60	5.75
EQ1	I have acquired equipment that I can only use for scuba diving. 私は、スクューバダイビング専用の器材を持っている。	.76	.71	.86				5.33	1.79	7.12
EQ2	Compared to other divers, I own good scuba diving equipment. 他のスクューバダイバーと比べて、私はよい器材を所有している。	.93						4.31	1.72	6.03
EQ3	I renew my scuba diving equipment regularly. 私は、定期的に新しいスクューバダイビング器材に買い替えている。	.81						3.91	1.88	5.79
RC1	I have a preference for scuba diving over other leisure activities. 私は、他のレジャー活動よりもスクューバダイビングが好きである。	.84	.65	.83	.84	.65	.86	5.30	1.30	6.60
RC2	Even if my close friends recommend other recreational activities, I prefer scuba diving. 親しい友人が他のレジャー活動を勧めたとしても、私はスクューバダイビングを選ぶ。	.86			.86			4.93	1.40	6.33
RC3	Sometimes think about scuba diving even when I am in other leisure activities. 他のレジャー活動をしているときでも、スクューバダイビングのことを考えることがある。	.71			.70			4.64	1.53	6.17
B1	How many dives have you done in your entire life? スクューバダイビングの総潜水本数をお答え下さい。	.59	.48	.74	.64	.56	.77	3.41	1.74	5.15
B2	How long have you been scuba diving? スクューバダイビングの経験年数をお答え下さい	.24						2.95	1.91	4.86
B3	Have you had a scuba diving trip holiday in last 12 months? 過去12カ月で、スクューバダイビングの旅行に行きましたか。	.66						2.19	1.43	0.77
B4	How many times did you go scuba diving in last 12 months? 過去12カ月で、スクューバダイビングに行った回数をお答え下さい	.92			.85			3.77	1.93	5.70

† B1～B4の項目平均値、SDは、7段階評価の結果である
†† λ = standardized factor loading, AVE = average variance extracted ; 平均分散抽出
††† 7 point Likert scale(1=Strongly Disagree, 2=Disagree, 3=Somewhat Disagree, 4=Neither Agree nor Disagree 5=Somewhat Agree, 6=Agree, 7=Strongly Agree)

次に、日米の各集団に確認的因子分析を行った結果、日本は、 $\chi^2/df=3.24$ 、GFI=.95、AGFI=.91、CFI=.97、RMSEA=.066であった。アメリカは、 $\chi^2/df=1.95$ 、GFI=.97、AGFI=.95、CFI=.98、RMSEA=.043であった。日本の χ^2/df は基準値を満たしていないが、前述と同様の理由から許容範囲と考えられる。従って、日米両集団のモデルが適合したと判断した。

続いて、レクリエーション専門志向化指標の妥当性、信頼性が認められたことから、多母集団同時分析によって両母集団の配置不変性と測定不変性の検証を行った（表5）。

配置不変モデルは、 $\chi^2/df=2.59$ 、GFI=.96、AGFI=.93、CFI=.98、RMSEA=.040であり、すべての適合度指標が基準値をクリアしたことから配置不変性が認められた。次に、各因子へのパスに制約を加えた測定不変モデルは、 $\chi^2/df=2.95$ 、GFI=.95、AGFI=.92、CFI=.97、RMSEA=.044であった。配置不変モデルと測定不変モデルを比較するために $\Delta\chi^2$ による検定を行った。この結果、 χ^2 値と df の差（ $\Delta\chi^2=68.0$ 、 $\Delta df=8$ 、 $p<.001$ ）は棄却された。しかし、 $\Delta\chi^2$ の検定も前述の通り、サンプルサイズの影響を受けることから実用性に欠けるとの指摘からCFIとRMSEAの変化量を算出したところ、 $\Delta CFI=-.007$ 、 $\Delta RMSEA=.003$ であり、基準値（ $-\Delta CFI \leq .01$ 、 $\Delta RMSEA \leq .015$ ）^{13,14}をクリアし測定不変性が認められると判断した。これらの結果から、日米両母集団の因子構造が等しく、観測変数に対する影響も同一であり、本章で用いたレクリエーション専門志向化指標で日米の国際比較を行うことが可能であると判断した。

表5. レクリエーション専門志向化モデルの確認的因子分析による適合度指標
Table 5. Summary of Fit Statistics for Testing Measurement Invariance of Second-order Factor Model

モデル	χ^2	df	χ^2/df	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC	$\Delta\chi^2$	Δdf	p -value	ΔCFI	$\Delta RMSEA$
初期モデル	2932.84	247	10.13	.82	.76	.86	.095	2657.41					
修正モデル	714.32	142	5.20	.96	.92	.97	.064	408.39					
日本	429.93	142	3.24	.95	.91	.97	.066	286.64					
アメリカ	327.10	142	1.95	.97	.95	.98	.043	206.66					
配置不変モデル（制約なし）	321.30	124	2.59	.96	.93	.98	.040	1029.03	-	-	-	-	-
測定不変モデル（制約あり）	389.30	132	2.95	.95	.92	.97	.044	1137.91	68.00	8	<.001	-.007	.003

3) レクリエーション専門志向化のクラスタリング

レクリエーション専門志向化指標の6因子による2段階クラスター分析を行った。この結果、適合度指標であるBICおよびAICの推移と解釈の可能性を総合し3クラスター解を

採用した。第1クラスター ($n=153$, 15.6%) は、各因子の平均得点がいずれも高く専門志向化が進んでいることから高専門志向化群 (以下 High と示す) と命名した。第2クラスター ($n=459$, 39.85%) は、因子によって平均値が第1クラスターに近い場合と第3クラスターに近い場合があるが中程度の専門志向化であることから中専門志向化群 (以下 Middle と示す) と命名した。第3クラスター ($n=404$, 29.6%) は、いずれの因子の平均値も低いことから低専門志向化群 (以下 Low と示す) と命名した。

次に表6には、各因子別の専門志向化レベルのクラスター重心および、SH・LSの平均値および標準偏差を示した。

表6. レクリエーション専門志向化のクラスター重心
Table 6. Cluster weight of Recreation Specialization Factors

Dimensions and Items	Number of Items	Cluster1		Cluster2		Cluster3		Total	
		High specialization		Middle specialization		Low specialization			
		$(n=153)$		$(n=459)$		$(n=404)$		$(n=1,016)$	
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
Attraction	2	6.75	0.39	6.10	0.58	4.95	0.96	5.74	1.00
Centrality	2	6.12	0.65	4.71	1.02	3.39	0.58	4.40	1.38
Knowledge	3	6.09	0.83	5.31	0.94	4.71	1.02	4.97	1.21
Skill	2	6.57	0.83	5.78	0.70	4.58	0.92	5.42	1.07
Resistance to change	3	6.29	0.64	5.36	0.81	4.00	1.04	4.96	1.22
Diving Experience	2	4.40	1.52	3.99	1.56	3.62	4.96	3.59	1.66
Diving participate of your entire in your life	1	460.21	829.58	194.44	337.78	73.59	418.95	186.41	490.54
Diving participate last 12 months	1	11.69	9.04	9.13	7.62	6.80	7.21	8.59	7.87
Experience(year)	1	6.12	7.86	4.96	7.93	1.67	5.42	3.82	7.24
Diving trips last 12 months	1	33.59	37.59	19.44	31.41	6.09	14.99	16.26	28.93
Subjective Happiness Scale(SHS)	4	5.71	0.95	5.13	1.13	4.86	1.12	5.11	1.14
Leisure Satisfaction(LS)	1	6.29	1.05	5.78	1.07	4.83	1.24	5.48	1.27

また、表7の通り、専門志向化レベルのクラスターと国（日米）の χ^2 検定を行った結果、Middleにおいて、有意にアメリカが多く、Lowにおいては、有意に日本が多かった。

表7. レクリエーション専門志向化レベルの日米比較
Table 7. Compare between JAPAN and USA for RS level

		日本	アメリカ	計
High	<i>n</i>	71	82	153
	%	46.4	53.6	100
Middle	<i>n</i>	201	258	459
	%	43.8 *	56.2 *	100
Low	<i>n</i>	239	165	404
		59.2 *	40.8 *	100
計		511	505	1,016
†	$\chi^2(2)=21.39$			* $p<.05$

4) レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度

SH・LS と、専門志向化レベル、国および従属変数に影響を及ぼしている可能性がある所得の関係性を検討するために、SHS・LSの得点を従属変数、専門志向化レベル、国、所得を独立変数とした対応のない3要因分散分析を行った（表8）。

表8. 3要因分散分析表（SHS・LS）
Table 8. Analysis of SHS and LS level by three-way ANOVA

Variables	Subjective Happiness Scale: SHS				Leisure Satisfaction: LS			
	<i>F</i>	<i>df</i>	<i>p</i> -value	$\eta^2\rho$	<i>F</i>	<i>df</i>	<i>p</i> -value	$\eta^2\rho$
RS(level)	22.83	2	<u><.001</u>	.051	77.26	2	<u><.001</u>	.153
Income	2.78	5	<u>.017</u>	.016	0.20	5	.962	<.001
Country	0.10	1	.749	<.001	98.04	1	<u><.001</u>	.103
RS×Income	1.19	10	.294	.014	1.17	10	.308	.014
RS×Country	0.95	2	.387	.002	3.28	2	<u>.038</u>	.008
Income×Country	1.04	5	.391	.006	2.29	5	<u>.044</u>	.013
RS×Income×Country	0.79	10	.640	.009	1.53	10	.123	.018

SHS 得点においては専門志向化レベル ($F(2,853)=22.83, p<.001, \eta^2_p=.051$) および所得 ($F(5,853)=2.78, p=.017, \eta^2_p=.016$) に有意な主効果が見られたが、国の主効果は認められなかった ($F(1,853)=.10, p=.749, \eta^2_p<.001$)。なお、交互作用は認められなかった。

Bonferroni の多重比較検定の結果、SHS の得点は、専門志向化レベルの High が、Middle・Low より有意に高く、Middle が Low より有意に高かった (Low < Middle < High)。所得では、⑥\$150,000 以上 (1,500 万円以上) が②\$25,000~39,999 (250~399 万円) と④\$60,000~79,999 (600~799 万円) より高かった ($p<.05$) (図 2)。

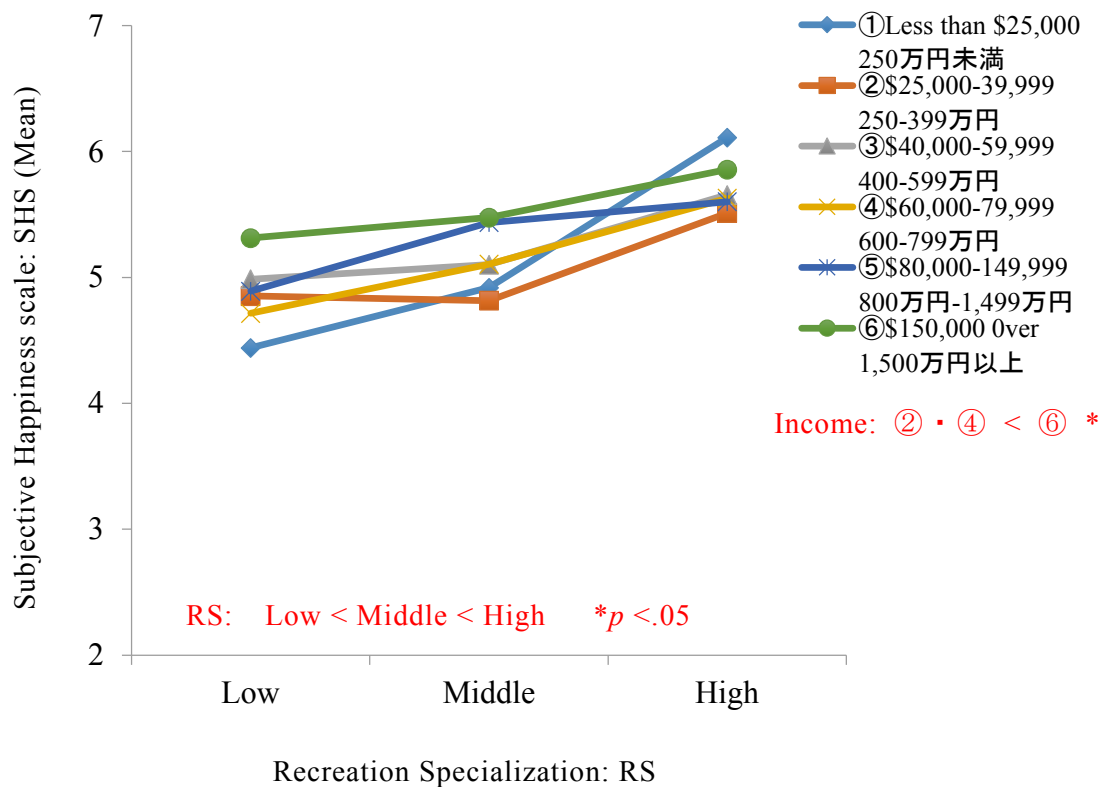


図 2. 主観的幸福感の 3 要因分散分析における多重比較検定 (RS・所得)
Figure 2. Three-way ANOVA of SHS and Post-hoc (RS・Income)

LS 得点においては専門志向化レベル ($F(2,853) = 77.26, p < .001, \eta^2_p = .153$) と国の主効果 ($F(1,853) = 98.04, p < .001, \eta^2_p = .103$) が認められた。所得 ($F(5,853) = .20, p = .962, \eta^2_p < .001$) には認められなかった。また、専門志向化レベルと国 ($F(2,853) = 3.28, p = .038, \eta^2_p = .008$)、所得と国 ($F(5,853) = 2.29, p = .044, \eta^2_p = .013$) に交互作用が認められた。このように交互作用が認められたことから、Bonferroni の単純主効果検定の結果を行った。この結果、日本は専門志向化レベルの High が、Middle・Low より有意に高く、Middle が Low より有意に高かった ($Low < Middle < High$)。アメリカは、Middle・High が Low よりも有意に高かった ($Low < Middle \cdot High$)。 ($p < .05$) (図 3)。

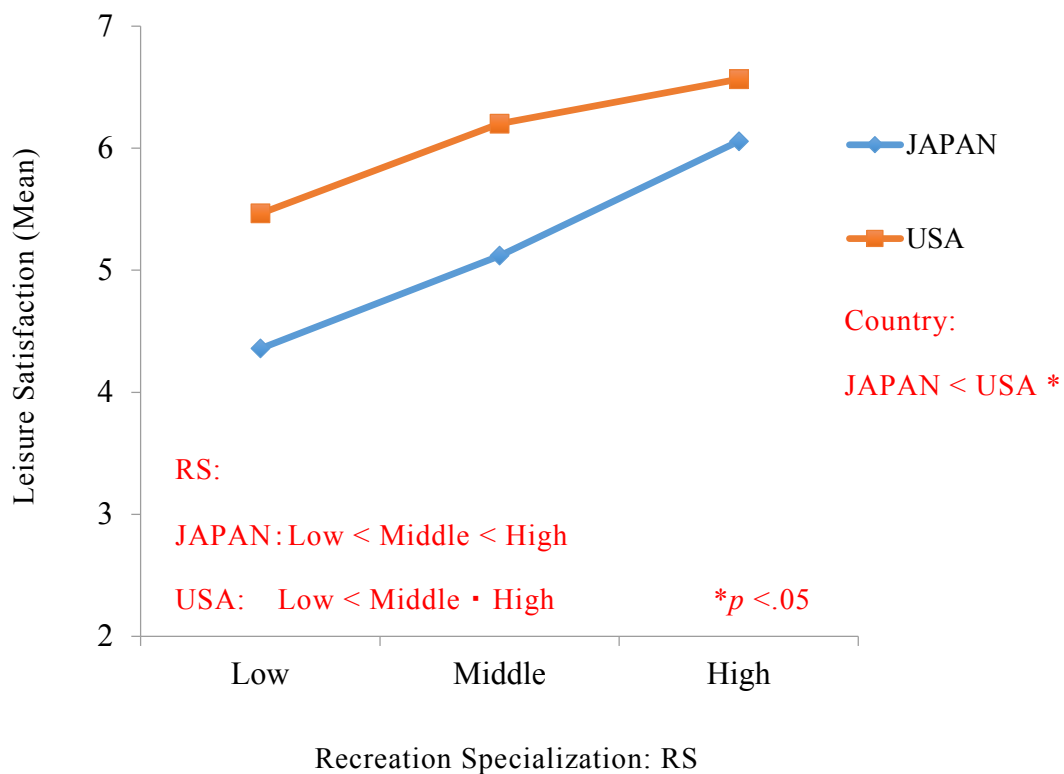


図 3. レジャー満足度の 3 要因分散分析における単純主効果 (国×RS)
Figure 3. Three-way ANOVA of LS and Simple effect (Country×RS)

LSにおける国と所得の関係は、所得が⑥\$150,000以上（1500万円以上）において有意な違いは認められなかったが、それ以外は、有意にアメリカの方が日本より高かった。また、国の違いによる所得とLSの有意な違いは認められなかった（図4）。

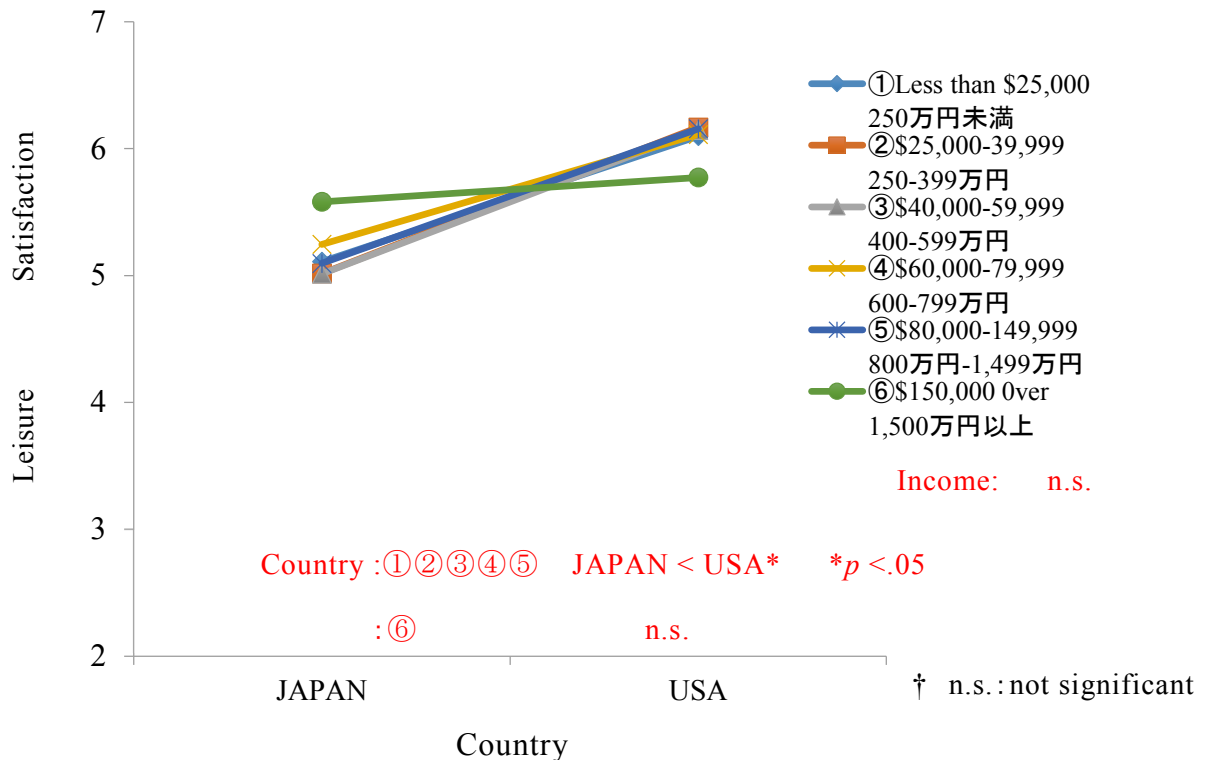


図4. レジャー満足度の3要因分散分析における単純主効果（国×所得）
Figure 4. Three- way ANOVA of LS and Simple effect (Country×Income)

4. 考察

本章は、日米のダイバーを対象として、スクーバダイビングにおけるレクリエーション専門志向化とSH・LSの関係について、国際比較を行うことを目的とした。

人口統計的特性は、年齢、性別、所得、最終学歴のすべてにおいて日米で有意な差が認められた。性別の男女比を見ると、国際的指導団体であるPADI (Professional Association of Diving Instructors 注7) 16)の認定者データの男女比は、男性65%、女性35%である。また、『レジャー白書2014』¹⁾における日本のダイビング参加者の男女比は、男性59%、女性49%であったことから、本調査データにおける、アメリカの比率はほぼ等しく、日本は女性がやや多かったと考えられる。

年齢、所得に関しては、アメリカは、34歳以下が76.8%と多く、所得は600万ドル未満

が50%を超えていた。日本は、35歳から54歳が63.7%であり、600万円以上が44.3%であった。この結果は、アメリカの調査データが、第2章の結果と同様に、インターネットのオンライン調査であることから、インターネットの利用頻度が多い低年齢者にデータが偏り、所得も全体的に低いものであったと考えられる。また、日本のデータは、ダイビングショップ関係から収集されたサンプルのダイビング経験が長く、年齢も高いことから600万円以上の比率が高かったことが推察される。

最終学歴に関しては、日本において高校卒業以下がアメリカより多かったことは、アメリカより年齢層が高いことなどが考えられるが、本調査データから言及することは難しい。

ダイビング経験は、総潜水本数、経験年数、過去12カ月のダイビング旅行日数、過去12カ月の潜水本数のすべてにおいて、日本がアメリカより有意に高かったことから、行動局面のダイビング経験は、日本がアメリカを上回っていた。これは、日本の調査がダイビングショップを通じてのサンプリングと民間調査会社のパネルによるサンプルで行われていることが一因として考えられる。特に、本調査データにおけるダイビングショップの顧客層の影響が大きく、総潜水本数は 312 ± 657.6 、過去12カ月において 24.7 ± 36.6 本、経験年数も 10.1 ± 8.6 年であり、ダイビングを長期にわたってアクティブに行っている愛好者が多かったことが考えられる。しかし、アメリカは、総潜水本数は 59.4 ± 122.0 、過去12カ月において 7.7 ± 13.4 本、経験年数は 7.1 ± 6.8 年であり、Amazon Mechanical Turkのサンプルの影響もあり、経験年数に比べて、潜水本数が日本より少ない傾向があり、活動がアクティブでないダイバーの回答が日本より多かったことが推察される。

本章の調査においては、このような人口統計的特性とスクーバダイビング経験を持つ日米のダイバーを対象に確認的因子分析を実施した。そして、レクリエーション専門志向化指標は、確認的因子分析によって、6因子14項目に修正された。また、多母集団同時分析によって、配置不変モデル、測定不変モデルが認められ、同じ因子で同じ概念を測定することが可能であることから、本指標でレクリエーション専門志向化の国際比較を行うことが可能であった。これは、感情、認知、行動の3局面による多次元指標によるレクリエーション専門志向化モデルによってダイバーの専門志向化に関する国際比較を行うことが可能であり3局面によるモデルの安定性が支持されたと言える。修正によって削除された、経験年数、Equipment（用具）因子、Self-expression（自己表現）因子については、ダイビン

グ経験などが影響したことが考えられるが、その原因に本調査結果から言及することは難しいと考えられる。しかし、国際比較研究の多くが重視している等価性¹⁷⁾の視点から、修正はされたが3局面による多次元指標による比較が可能であったことは価値があると考えられる。

また、2段階クラスター分析から、ダイバーのレクリエーション専門志向化レベルによって3つのクラスターに分類することができた。日米の専門志向化レベルの割合は、Highの比率は等しく、Middleはアメリカが多く、Lowは日本が多かった。しかし、全体として3つのクラスターでバランスよく、3つのレベルで日米ダイバーのレクリエーション専門志向化を説明できると考えられる。第2章においても引用したが個人のライフスタイルにおける余暇活動の実施に関しては、状況に応じて、休止、中断、再開などが十分考えられ、行動局面である過去経験が、レクリエーション専門志向化に影響を与えていないとする研究もある¹⁸⁾。本章の結果は、第2章同様に、クラスター重心から見て、行動、感情、認知の各局面からバランスよくクラスタリングが行われたと考えられる。

次に、クラスタリングされたレクリエーション専門志向化と所得、国を独立変数、SHS得点とLS得点を従属変数とした対応のない3要因分散分析を行った(図5)。

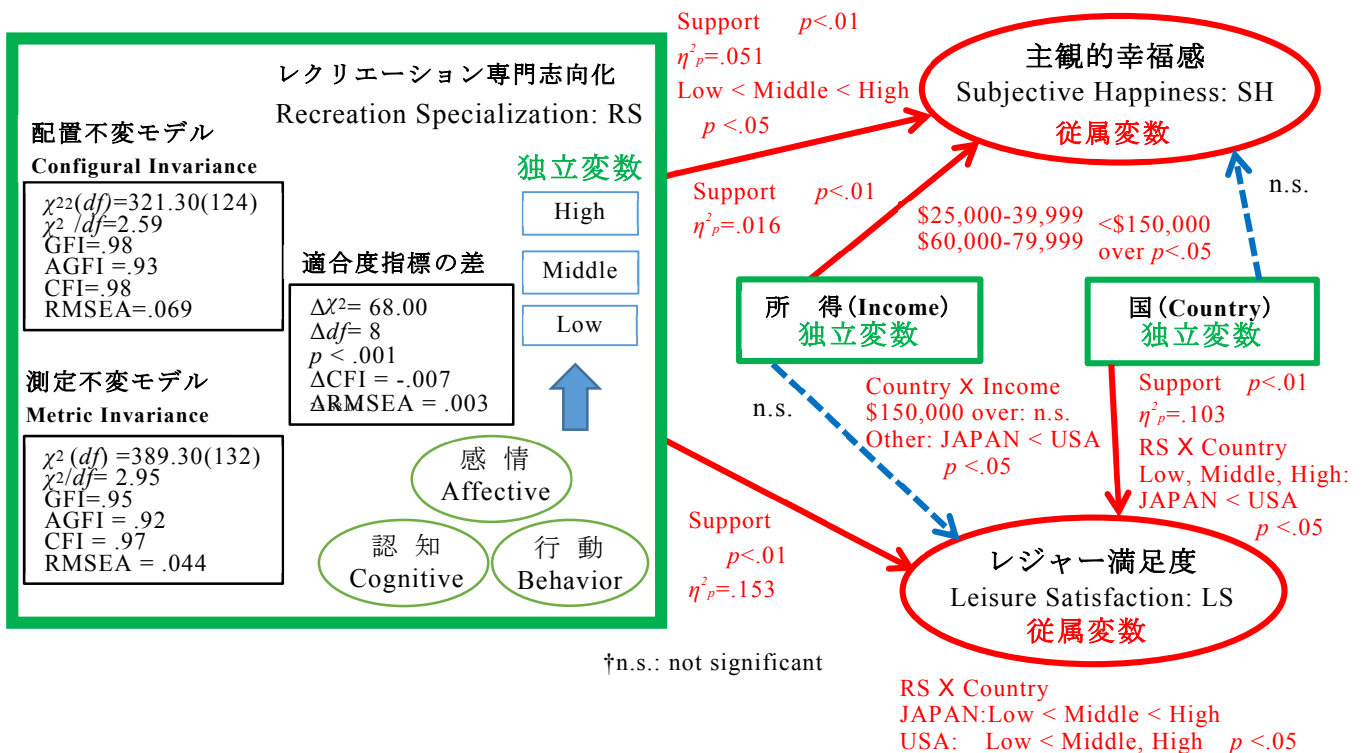


図5. 研究モデルの検証
 Figure 5. Results of Research Model

この結果、SHS 得点においては、レクリエーション専門志向化と所得の主効果が認められた。多重比較検定の結果、High が Middle・Low より高い SH を示し、Middle は、Low よりも高い SH を示した (Low < Middle < High)。これは、専門志向化のレベルが高いと SH も高く、レベルが低いと SH も低いということであり、継続的にスクーバダイビング活動を実施し専門志向化したことと SH に関連が認められたことを示唆している。第2章のフィッシングにおいては、Middle と Low で違いが見られなかったが (Low・Middle < High)、スクーバダイビングを対象とした本章においては、専門志向化の段階的なレベルの高まりと SH に関係があることが示唆されたと言える。日米ともに余暇活動としてのダイビングを実施している愛好者の SH が高く、レジャー活動と SH に関係があることを支持するものである¹⁹⁻²¹⁾。また、SH と所得の関係については、⑥\$150,000 以上 (1500 万円以上) が ②\$25,000~39,999 (250~399 万円) と ④\$60,000~79,999 (600~799 万円) より高く部分的に所得が高いほど、SH が高い結果となった。これは、第2章と同様に Blanchflower と Oswald¹⁹⁾が指摘するように個人の所得増加に伴って幸福度を引き上げることが支持される。所得層 (①③⑤) において部分的に SH が異なる結果は、Diener と Biswas-Diener²⁰⁾のドイツのパネルデータによる幸福度と所得が同調しないことの報告で説明ができるが、他の要因が作用していることも考えられる。実際、本章で対象としたスクーバダイビングを実施するには、毎回のダイビングに必ず費用が発生し、ダイビングの旅行などでは、さらに多額の費用が発生することから、スクーバダイビングを実施するには、ある程度の所得が必要であることが関係していることも考えられ、スクーバダイビング愛好者の所得と SH の関係については慎重な考察が必要であろう。

また、SH と国の関係が認められず、SH は日米で異なる結果であった。これは、*World Happiness report 2015*²⁾の参加 158 カ国中、日本が 46 位、アメリカは 15 位の結果とは異なるものである。島井ら⁷⁾の作成した日本語版主観的幸福感尺度の平均値が 4.68 であることを考えると、本結果の SH 得点の平均値 5.04 は、やや高いことが考えられる。また、Lyubomirsky ら⁶⁾の報告によるとアメリカの平均値は 4.63 から 5.07 であることから、本章のアメリカのデータ 5.18 もやや高く、全体として SH が高いことがうかがえる。これは、日米ともに余暇活動としてのダイビングを実施している愛好者の幸福感が高いことを示しており、レジャー活動と SH に関係があることを支持するものである²¹⁻²³⁾。

LS においては、専門志向化と国に交互作用が見られた。日本は LS が High より Middle が低く、Middle より Low が低かった ($Low < Middle < High$)。アメリカにおいては Low より Middle・High が高く ($Low < Middle \cdot High$)、Middle と High の群間に違いは見られなかった。これは、専門志向化と日米のクロス集計の χ^2 検定結果から、有意に Middle においてアメリカが多く、Low は日本が多い結果が影響したことが考えられる。

また、所得と国に交互作用が認められ、所得が⑥\$150,000 以上 (1500 万円以上) において、日米の LS に違いは認められず、それ以外は、有意にアメリカの方が日本より高かった。これは、\$150,000 以上 (1500 万円以上) の高所得者以外は、各所得層で日本よりアメリカの LS が高かった。この結果は、回答者のダイビング経験において日本がアメリカよりも高い傾向が影響していると考えられる。Iso-Ahola と Weissinger²⁴⁾が、レジャーにおける退屈感が多いほど、LS が低くなることを指摘していることから、本来、継続的なレジャー活動によるレクリエーション専門志向化が高い人は、退屈感を感じるものが少なく、LS が高い経験が継続されたことが推察される。しかし、本章の日米の国際比較においては、ダイビング経験の少ないアメリカの参加者の方が、より退屈感が少なく、LS が高かったと考えられる。また、高所得者のみ日米で LS が異ならなかったことは、日米の所得層が異なることが影響し、本章の結果から解釈をすることは困難であると考えられる。

5. 結論

本章は、日米のダイバーを対象に、レクリエーション専門志向化指標と主観的幸福感尺度を用いて、レクリエーション専門志向化と SH・LS の関係性について、国際比較を行うことを目的とした。

この結果、確認的因子分析によってレクリエーション専門志向化指標は 6 因子 14 項目に修正され、さらに多母集団同時分析において配置不変モデル、測定不変モデルが認められ国際比較をすることが可能であった。また、第 2 章同様に、専門志向化レベルを High・Middle・Low の 3 段階に類型化することができた。

そして、SH と専門志向化との関係においては、High が Middle・Low より高い幸福感を示し、Middle は、Low よりも高い SH を示した ($Low < Middle < High$)。また、SH は、日米で異なる結果となった。

LS と専門志向化の関係は、国と専門志向化、国と所得に交互作用がみられ、日本は LS が High より Middle が低く、Middle より Low が低かった (Low < Middle < High)。アメリカは Low より Middle・High が高く (Low < Middle・High)、Middle と High の群間に違いは見られなかった。また、所得が\$150,000 以上 (1500 万円以上) において、日米の LS に違いは認められず、それ以外は、有意にアメリカの方が日本より高かった。

このように、日米によって違いはあるものの、第2章と同様レクリエーション専門志向化と SH・LS の関係性が示唆され、レクリエーション専門志向化の高まりによって、SH・LS が高まる可能性が考えられた。しかし、第2章同様に SH の高い人がレジャー活動に参加し、LS が高くなる、もしくは、より SH の高い人がレクリエーション専門志向化している可能性を否定することはできない。

本章での課題も、次章のインタビュー調査による質的分析において、レクリエーション専門志向化の形成過程に焦点をあて、レクリエーション専門志向化が SH・LS に与える影響の検証を行うことである。

第3章 注記および引用文献

注記

注1) スクーバダイビングは、水中においてスクーバタンクから供給される空気で呼吸をして潜ることから、水深の影響による水中の物理や水中環境が人体に与える影響に関して様々な知識が必要とされる。また、水中での呼吸に必要なレギュレーター (Regulator) や浮力調整を行う BCD (Buoyancy Control Device) などの専用器材の使用方法などの潜水技術を修得するために講習を受ける必要がある。これらの講習システムの多くは、アメリカやヨーロッパに本拠地をおく PADI^{注7)}、CMAS^{注8)}などの潜水指導団体が開発し実際の運営を行っている。

注2) Amazon Mechanical Turk は、US Amazon.com (<https://www.mturk.com/mturk/welcome>: 参照 2015-2-1) のクラウドソーシングを利用し安価で大量の実験・調査データを収集するものであり、近年英語圏で多数の研究が行われ信頼性が検討され、Buhrmester ら²⁵⁾は、Amazon Mechanical Turk のサンプルが学生サンプルと比較して幅広い人口統計的背景を持つデータを収集できることを指摘している。さらに、その他のインターネット調査の参加者と比較しても、幅広い人口統計的背景のサンプルデータを取得できるとしている。信頼性に関しても、その他のインターネット調査、伝統的な留め置き法などの調査手法と比較しても尺度の信頼性が変わらないとしている。また、Behrend ら²⁶⁾も、インターネット調査において検証をしていることから Amazon Mechanical Turk の信頼性は担保できると考えられる。日本でもクラウドワークス (<http://crowdworks.jp/>: 参照 2015-5-9)、lancers (<http://www.lancers.jp/>: 参照 2015-5-9) やヤフークラウドソーシング (<http://crowdsourcing.yahoo.co.jp/>: 参照 2015-2-1) が存在している。

注3) 参加条件である「The purpose of this survey is to understand scuba diving participants' psychological as well as behavioral characteristics.」を読み、調査票の最初のスクリーニング項目の「スクーバダイバーでないと参加資格がない」ことにチェックをしてから、回答を行った。

注4) 日米データの分布を確認したところ、ダイビングを職業としている、職業者ダイバーが日本 69 名、アメリカ 8 名であった。潜水本数においても日本の職業者ダイバーの経験本数が非常に多いことから本研究の対象から職業者ダイバーを除外することとした。ま

た、日本の民間調査会社のパネルの対象者において、スクーバダイビングの潜水本数を 0 本と答えた未経験者 48 名を対象外とした。これは、調査パネルのスクリーニング項目が「スクーバダイビングを趣味にしている」というものであり、「ダイビング経験があるか」、「スクーバダイビングで潜ったことがあるか」ではなかったからである。従って、潜水本数の欄に、「未経験」、「まだ、潜っていない」などの回答が記入された。

注 5) Survey Monkey は、Web アンケートツール、オンライン調査のプラットフォームとして普及している。有料サイトでありプランによって利用できる項目や分析などが異なる。

注 6) 民間調査会社は、GMO リサーチ株式会社 (<http://www.gmo-research.jp/>) であり、InforQ を運営する大手リサーチ会社である。調査パネルは、Survey Monkey との連結が可能であり、「スクーバダイビングを趣味としているか」、「研究参加の同意」をスクリーニング項目として、スクリーニング項目に該当した人が調査に参加し、GMO リサーチ社からポイントを受け取るシステムとなっている。

注 7) PADI (Professional Association of Diving Instructors) は、本部をアメリカ・カリフォルニアに置き、日本をはじめ世界に 7 カ所のエリアオフィスを配し、世界 180 カ国以上で 13 万 5 千人以上のインストラクターを含むプロフェッショナルメンバーと約 5,800 以上のダイブセンター／ダイブリゾートからなる組織である (<http://www.padi.co.jp/> 参照 2015-7-20)。

注 8) CMAS : 世界水中連盟 (クマスまたはシーマス) は、フランス語の CONFEDERATION MONDIALE DES ACTIVITES SUBAQUATIQUES の略称であり、世界 160 の国々が加盟する国際機関である、(<http://www.cmas-japan.com/> 参照 2015-7-20) 。

引用文献

- 1) 山口有次: コラム 日米レジャーデータ比較. レジャー白書 2014—マイ・レジャー時代の余暇満足度—, 東京, pp107-111, 生産性出版, 2015.
- 2) Helliwell JF, Layard R, Sachs J, Eds.: World Happiness Report 2015, New York, Sustainable Development Solutions Network, 2015.
- 3) 二宮浩彰:レクリエーションの行動科学. 東京, 不昧堂出版, 2007.
- 4) Lyubomirsky S and Lepper HS: A measure of subjective happiness: Preliminary reliability and construct validation. Social Indicators Research, 46(2): 137-155, 1999.

- 5) Schroeder SA, Fulton DC, Lawrence JS, Cordts SD: Identity and Specialization as a Waterfowl Hunter. *Leisure Sciences*, 35(3): 218-234, 2013.
- 6) Beardmore B, Haider W, Hunt LM, Arlinghaus R: Evaluating the Ability of Specialization Indicators to Explain Fishing Preferences. *Leisure Sciences*, 35(3): 273-292, 2013.
- 7) 島井哲志, 大竹恵子, 宇津木成介, 池見陽, Sonja Lyubomirsky: 日本版主観的幸福感尺度の信頼性と妥当性の検討. *日本公衛誌*, 51(3): 845-853, 2004.
- 8) 豊田秀樹: 共分散構造分析 [実践編] —構造方程式モデリング—. 東京, 朝倉書店, 2007.
- 9) 狩野裕: グラフィカル多変量解析. 東京, 現代数学社, 2007.
- 10) 岩脇三良: 異文化間研究の方法論に関する考察. *社会心理学研究*, 10(3): 180-189, 1994.
- 11) Bryne BM: *Structure equation modeling with EQS*. NJ, Lawrence Erlbaum, 2006.
- 12) Farruggia SP, Chen C, Greenberger E, Dmiteieva J, Macek P: Adolescent Self-Esteem in Cross-Cultural Perspective: Testing Measurement Equivalence and a Mediation Model. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 35(6): 719-733, 2004.
- 13) Chen FF: Sensitivity of Goodness of Fit Indexes to Lack of Measurement Invariance. *Structural Equation Modeling: A Multidisciplinary Journal*, 14(3): 464-504, 2007.
- 14) Cheung GW and Rensvold RB: Evaluating Goodness-of-Fit Indexes for Testing Measurement Invariance. *Structural Equation Modeling: A Multidisciplinary Journal*, 9(2): 233-255, 2002.
- 15) Hair F, Black C, Anderson R, Tatham RL: *Multivariate data analysis (5th ed.)*. Prentice Hall: Upper Saddle River, NJ, USA, 2006.
- 16) PADI Statistics: World Corporate Statistics 2015-Data for 2009-2014.
(<http://www.padi.com/scuba-diving/about-padi/statistics/>: 参照 2015-6-5)
- 17) 真鍋一史: 通文化比較調査および国際比較調査の方法論的課題—等価性確立のための方法の開発—. *関西学院大学社会学部紀要*, 96: 95-110, 2004.
- 18) Choi S, Loomis DK, Ditton RB: Effect of social group, activity, and specialization on recreation substitution decisions. *Leisure Sciences*, 16(3): 143-159, 1994.
- 19) Blanchflower DG and Oswald AJ: Well-being over time in Britain and the USA. *Journal of Public Economics*, 88(7-8): 1359-1386, 2004.
- 20) Diener ED and Biswas-Diener R: Will money increase subjective well-being? *Social Indicators*

Research, 57(September 2001): 119-169, 2002.

21) Ateca-Amestoy V, Serrano-del-Rosal R, Vera-Toscano E. The leisure experience. Journal of Socio-Economics, 37(1): 64-78, 2008.

22) Lloyd K and Little DE: Self-Determination Theory as a Framework for Understanding Women's Psychological Well-Being Outcomes from Leisure-Time Physical Activity. Leisure Sciences, 32(4): 369-385, 2010.

23) Stalker GJ: Leisure Diversity as an Indicator of Cultural Capital. Leisure Sciences, 33(2): 81-102, 2011.

24) Iso-Ahola SE, Weissinger E: Leisure and Boredom. Journal of Social and Clinical Psychology, 5(3): 356-364, 1987.

25) Buhrmester M, Kwang T, Gosling SD: Amazon's Mechanical Turk: A New Source of Inexpensive, Yet High-Quality, Data? Perspectives on Psychological Science, 6(1): 3-5, 2011.

26) Behrend TS, Sharek DJ, Meade AW, Wiebe EN: The viability of crowdsourcing for survey research. Behavior Research Methods, 43(3): 800-813, 2011.

資料1 「調査の同意について」

調査の同意について

本研究は、スクーパーダイビング愛好者のレジャー・レクリエーションに関する志向と幸福感の関係を明らかにすることを目的としています。調査内容は、スクーパーダイビングに対するあなたの気持ち・経験・満足感、性別や年齢などの属性、幸福感などをお尋ねします。回答は、任意であり、途中で回答を中止しても構いません。回答にかかる所要時間は、概ね5～8分程度です。

調査結果は、すべて統計的に処理され、個人が特定されるなど、ご迷惑がかかることは一切ありません。不明な点がありましたら、以下のメールアドレス (XXXX@XXXX) に連絡ください。

研究代表者

東海大学体育学部体育学科 教授 松本秀夫

調査の趣旨にご賛同頂き、ご回答頂ける場合は、下記の同意するにチェックをして、次ページからの質問にご回答ください。

同意する

同意しない

資料2 「Informed Consent:同意書」

Informed Consent

My Name is Hideo Matsumoto, and I am a professor at Tokai University in Japan. The purpose of this survey is to understand scuba diving participants' psychological as well as behavioral characteristics.

You will be asked your socio-cultural characteristics, and your scuba diving activity. The entire process will take about 5-8 minutes.

We will provide 80 ¥ as a compensation for your participation through the Amazon Mechanical Turk. There are no known physical or psychological risks involved with participation; however, you can ignore questions you do not want to answer. You can also withdraw from the process at any time without being penalized. With your permission, I would like to request your participation in this study.

Anonymity of your responses will be secured. Your identity will be kept confidential to the extent provided by law. Your identity will be unknown to researchers. If you have any questions concerning this study, please contact: Hideo Matsumoto, Tokai University in Japan,
Email: XXXX@XXXX.

When you read the aforementioned statements, please click on one of the followings:

I agree and participate in this study

I disagree and do not participate in this study

第4章 レクリエーション専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度に与える影響についての 質的分析:専門志向化したスクーバダイバーを対象として

1. 目的

第2章・第3章においてレクリエーション専門志向化と主観的幸福感（Subjective Happiness:以下 SH と示す）・レジャー満足度（Leisure Satisfaction: 以下 LS と示す）の関係が示唆され、レクリエーション専門志向化の高まりによって、SH・LS も高まる可能性が考えられた。

本章は、専門志向化したスクーバダイバーを対象に、専門志向化の形成過程とその過程における SH・LS に関するインタビューから、レクリエーション専門志向化が SH・LS に与える影響について、その因果関係を追究することを目的とした。

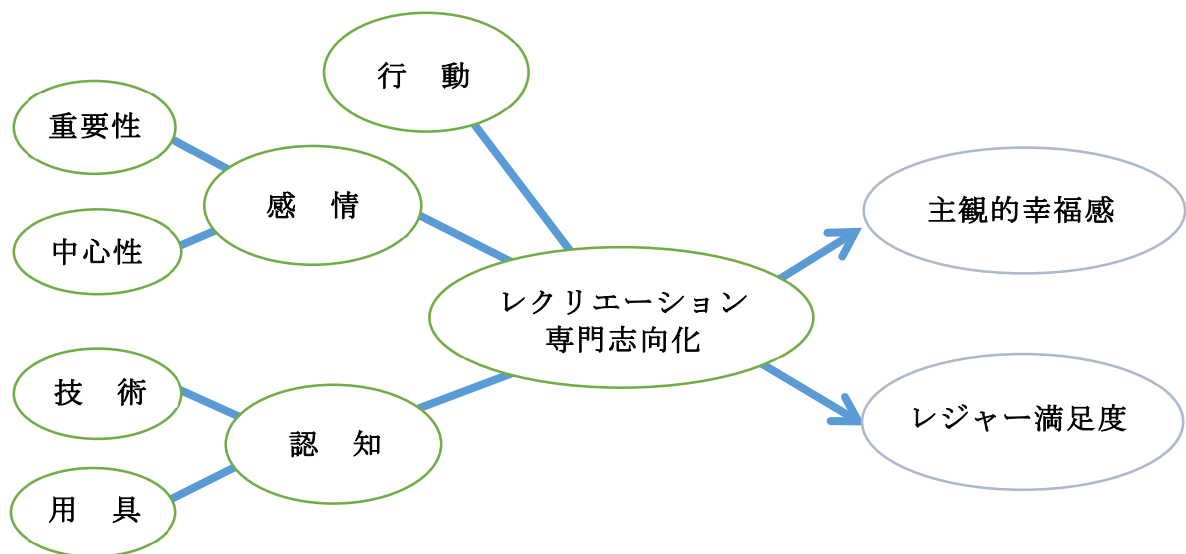


図1. 研究モデル

2. 方法

1) 調査方法

本調査は、レクリエーション専門志向化の形成過程と、その過程における専門志向化が SH・LS に与える影響を明らかにするために、仮説検証型のアプローチによる半構造化イ

インタビューを行った。調査内容は、レクリエーション専門志向化の3局面（感情・認知・行動）を中心とした。仮説検証型のインタビューは、調査者の先入観が影響¹⁾し、偏った回答を導く可能性があることから細心の注意を払い、質問と回答のテキストは、調査後、他の研究者による確認を行った。

2) 調査実施時期・場所、所要時間、インタビュー方法

調査は、2015年6月にS県の海水浴場の現地ダイビングサービス2カ所とダイビングショップ1カ所において行った。具体的なインタビューを実施する場所は、ダイビングサービスの休憩所などのオープンスペースを用いて、対象者の負担にならないように配慮した。調査対象者のインタビュー所要時間は約20分とした。本来、インタビュー者に対して対象者1名の1対1が好ましい。しかし、対象者の都合により1対1以外に、1対2のジョイントインタビュー法による実施が1組、1対3の集団インタビュー法による実施が1組行われた。なお、結果の分析、考察において、インタビュー実施上の要因として考慮を行った。また、ダイビングショップ・ダイビングサービス経営者に対するインタビューは、1対2のジョイントインタビュー法を用いて実施した。

3) 調査対象および対象抽出方法

調査対象者は、スクーバダイビングを長期間愛好し、専門志向化していると考えられる経験豊富なダイバーと専門志向化していたが現在休止している、もしくは、活動をやめた人を対象とし、ダイビングショップ・ダイビングサービスの経営者に、適任者を紹介してもらった。この結果、S県にある3つのダイビングサービス・ダイビングショップから20名（男性13名、女性7名）を選び調査の対象とした。このうち、専門志向化していたが、現在休止している人は、20名中1名の元常勤インストラクターであった。また、活動をやめたという対象者を選出することができなかったことから、ダイビングショップ・ダイビングサービスの経営者2名に対して、「ダイビングを休止している人、活動をやめた人」に関するインタビューを行った。休止者1名を除く対象者19名の属性を表1に示した^{注1)}。

表 1. 対象者の属性

対象者	性別	年齢	居住地	出身地	開始	本数	カードランク
1	男性	50歳～59歳	南関東	東海	1989	2,000	インストラクター
2	男性	50歳～59歳	南関東	甲信越	1989	3,400	インストラクター
3	男性	40歳～49歳	東海	東京	1990	450	アドバンス
4	女性	40歳～49歳	東京	東北	1990	1,600	アドバンス
5	† 男性	40歳～49歳	南関東	東海	1991	1,300	ダイブマスター
6	男性	40歳～49歳	南関東	東海	1993	1,200	ダイブマスター
7	男性	40歳～49歳	南関東	南関東	1993	2,400	ダイブマスター・潜水士
8	女性	30歳～39歳	南関東	南関東	1995	900	アドバンス
9	女性	40歳～49歳	南関東	東北	1996	1,200	アドバンス
10	女性	40歳～49歳	南関東	南関東	1999	1,000	アドバンス
11	男性	60歳以上	東京	東京	2000	1,300	インストラクター
12	男性	40歳～49歳	北関東	北関東	2000	1,000	インストラクター, TEC, ケイブ, トライミックス 他
13	† 男性	30歳～39歳	南関東	南関東	2003	250	レスキューダイバー
14	†† 女性	30歳～39歳	東京	東京	2003	550	レスキューダイバー, TEC, トライミックス, ケイブ
15	男性	30歳～39歳	南関東	南関東	2004	250	アドバンス
16	男性	30歳～39歳	南関東	南関東	2004	750	アドバンス
17	女性	30歳～39歳	南関東	東北	2004	750	アドバンス
18	†† 男性	30歳～39歳	東京	東京	2005	600	アシスタントインストラクター TEC
19	†† 男性	30歳～39歳	東京	大阪	2010	600	ダイブマスター, TEC, トライミックス

†ジョイントインタビュー法 ††集団インタビュー法

4) インタビュー手順および倫理的配慮

インタビューに際しては、研究者の捺印がされた「研究参加への説明書」（章末資料 1）および「研究参加についての同意書」（章末資料 2）を配布し、内容の説明を行った。同意書には、冒頭に“私は、研究計画「海洋レジャー・レクリエーション活動における専門志向化が幸福感・レジャー満足度に与えた影響」に関する以下の事項について、詳しく説明を受けました”と記載され、説明に沿って、研究に関しての 8 項目「参加が任意であること」、「この研究の目的」、「研究の方法」、「研究の実施場所」、「研究における不快な状況」、「情報およびデータ等の収集方法について」、「あなたに研究参加をお願いする理由」、「研究に対する問い合わせ・苦情等の連絡先」と、収集したデータ等についての個人情報の取

扱いについて2項目、「データ等の取扱いについて（保管期間等）」、「データ等の利用について」に説明を受けた確認のチェックを依頼した。そして「これらの事項を確認したうえで、自らの自由意思により本研究への参加に同意いたします」の最終の文章を確認し、日付、住所、参加者氏名に署名を求めた。住所については、個人情報であることから任意とした。また、追加の連絡先として調査者の名刺を配布した。

最後に、ICレコーダに録音およびフィールドノートをとることの同意を求め、全員が同意した。その後、信頼性のあるデータを収集するため、インタビューが誘導的にならないように、あらかじめ用意したインタビュー項目およびフィールドノート書き込み用紙に沿って半構造化インタビューを行った。質問の順番は、対象者が答えやすい、一般的な質問として過去の事実である開始場所、ダイビングの実施頻度、潜水経験から、具体的な認知局面、感情局面へと質問を展開した。しかし、対話の状況によって質問の順番を変え柔軟に対応した。また、答えが、「はい、いいえ」となることを避け、オープン・エンドの質問が主となるようにし、対象者の回答に対して、批判や評価をしないように努めた。

5) インタビュー項目

インタビュー項目は、レクリエーション専門志向化の類型化に用いられる「感情」、「認知」、「行動」の3局面に関して数個の下位次元によって構成された。

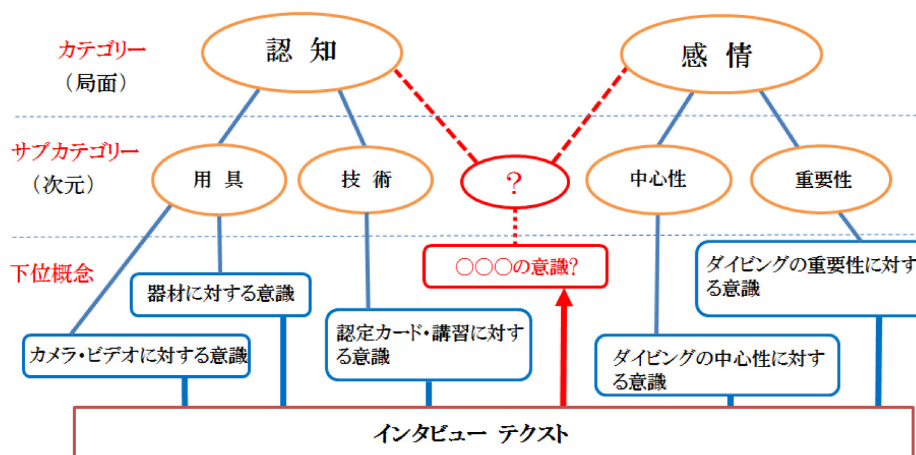
感情局面は「ダイビングの重要性に対する意識」と「ダイビングの中心性に対する意識」、認知局面は「用具（ダイビング器材）」、「用具（カメラ・ビデオ器材）」、「認定カード^{注2)}ランク・講習」、「活動場所（国内・海外）」、「活動費用」、行動局面は「潜水本数」、「活動頻度」、「経験年数」であり、ダイビング開始当初から時系列で話を聞いた。また、「ダイビングに対する満足度」、「仕事や生活の満足度・幸福感」、「ダイビング開始動機」、属性として「レジャー・スポーツ歴」、「居住地」、「出身地」、「年齢」、「家族構成」、「職業」、「家族のレジャー・スポーツ歴」を聞いた。なお、倫理的配慮から、年齢、配偶者の有無等の家族構成や、職業については、対象者の任意とした。また、ダイビングショップ・ダイビングサービス経営者に対しては、「ダイビングを休止している人、活動をやめた人」の事例を尋ねた。

6) 分析方法

(1) カテゴリー化と下位概念の生成

本調査は、レクリエーション専門志向化が SH・LS に与えた影響を明らかにすることを目的とした仮説検証型のインタビューである。従って、分析項目は、レクリエーション専門志向化の3局面と下位次元から構成される。しかし、必ずしも仮説に基づく想定した局面の下位次元には存在しない概念が生成される可能性がある。従って、一部グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach : GTA）の代替法である木下^{2,3)}の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified-Grounded Theory Approach : 以下、M-GTA と示す）を用いて探索的に新たな下位次元（サブカテゴリー）に関する分析を行った。この M-GTA は、GTA のように切片化されたテキストデータに対してコーディングするのではなく、文脈にコーディングすることが特徴でありインタビュー調査に適している⁴⁾。なお、本章では、M-GTA によるテキストデータ分析を行うために、M-GTA の手法にならって、これまで専門志向化において用いてきた局面をカテゴリー、次元をサブカテゴリーに置き換えて記述する。

具体的なインタビューの分析手順は、まず、IC レコーダに録音されたインタビュー内容を業者に委託^{注3)}しテキスト化した。次に、テキストデータを、レクリエーション専門志向化および主観的幸福感・満足度のカテゴリー、サブカテゴリー、下位概念に分けて、分析ワークシートに意味を損なわない程度に切り取り、貼り付けた。その分析ワークシートからキーワードを見つけ新たなサブカテゴリーとその下位概念を探った（図2）。



*通常の M-GTA インタビューテキストから下位概念⇒サブカテゴリー⇒カテゴリーを生成

図 2. サブカテゴリー・下位概念の生成

分析作業は、Microsoft Excel(マイクロソフト社)を用いて分析ワークシートを作成した。その際、質的データ分析ソフト NVivo 10 (QSR International) を用いて分析の補助とした。なお、本章の分析に関しては、M-GTA の分析方法を援用しているが、分析のテキストについては、できるかぎりテキストをそのまま使用し、文脈とキーワードから発話の意図を重視した。また、通常の M-GTA では、探索的に発話の具体例から下位概念、サブカテゴリー、カテゴリーが生成される。従って、下位概念に対象者の発話である具体例が必ずしも該当せず、対象者の発話と下位概念において分析が行われる。しかし、本章のインタビューは仮説検証型であり、想定された下位概念について具体的に質問を行っていることから、M-GTA によって探索的に生成された下位概念を除いて、発話が必ずテキスト化されている。従って、各下位概念に対する対象者の発話テキストおよびフィールドノーツを参考に反応を評価した。発話がポジティブな反応をプラス (+)、普通の場合を記号なし、ネガティブな反応をマイナス (-) によって示した。また、よりポジティブな発話をしている場合にダブルプラス (++) とし、よりネガティブな発話の場合にダブルマイナス (--) とした。例えば、下位概念「ダイビングの重要性に対する意識」の質問に対して、「仕事よりダイビング」、「仕事はダイビングのために」といった発話がされている場合は、ダイビングが仕事より優先との判断から、ダブルプラス (++) とした。下位概念「用具(ダイビング器材)」についての質問に、「潜ればいい、穴があいてなければいい、マスクは見えればいい」などの発話をした場合は、ダブルマイナス (--) とした。また、写真、ビデオ撮影をしない場合は、該当なしを▲とし、探索的に M-GTA から抽出された下位概念では、発話なしを◆とした。その他、特記される事項は他の記号により欄外に示した(図3)。

「仕事よりダイビング」、「仕事はダイビングのために」 (++)

対象者	性別	幸福感	満足度	感情	認知			志向	
		ダイビングの満足度	生活・仕事の満足度・幸福感	重要性・中心性	用具 (ダイビング器材)	用具 (カメラ・ビデオ)	技術		コミュニティ
F	女性	++	+	++	-		-	++	◆
M	男性	+	+	++	--	++		+	◆
N	女性	+	+	++		++		+	◆
G	女性	+	+	+	-				◆

「潜ればいい、穴があいてなければいい、マスクは見えればいい」 (--)

図3. 下位概念の発話に対する反応の評価例

(2) レクリエーション専門志向化の類型化および専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度に与える影響

発話によるサブカテゴリー、下位概念の分析および考察、専門志向化のカテゴリー、サブカテゴリー、下位概念から対象者を類型化した。そして、類型化されたタイプおよび対象者の各下位概念への反応から、専門志向化が SH・LS に与える影響について質的考察を行った。

(3) 第三者によるトライアングレーション

調査者の主観による分類にならないように、トライアングレーションとして、ダイビングインストラクター資格を有する研究者 1 名、およびダイビングインストラクター 2 名に発話、カテゴリー、サブカテゴリー、下位概念について意見を求めた。同様に、反応評価も、全対象者の発話を総合的に見た調査者の判断であり、明確な客観性を求めることは難しく、調査者の主観が混入される可能性を否定できないことから、トライアングレーションとして意見を求めた。

3. 結果および考察

1) カテゴリー・サブカテゴリー・下位概念

M-GTA の分析より、分析ワークシート上からキーワードを探し、サブカテゴリーと下位概念を探った。この結果、「コミュニティ」をキーワードとする発話が多くなされ、「ダイビングコミュニティに対する意識」の下位概念が生成された。また、ダイビング経験の過程で、「ダイビングの志向が変化していた」とする発話が多数なされ、「ダイビング志向の変化に対する意識」の下位概念が生成された。この抽出された下位概念をもとに、認知カテゴリーに、「コミュニティ」、「志向」の 2 サブカテゴリーを生成した。しかし、感情カテゴリーの「ダイビングの重要性に対する意識」と「ダイビングの中心性に対する意識」の下位概念においては、発話に関連し区別が難しいことから統合し、サブカテゴリー「重要性・中心性」の下位概念として「ダイビングの重要性・中心性に対する意識」とした（図 4）。以上の結果から、専門志向化と SH・LS の仮説と結果のカテゴリー、サブカテゴリー、下位概念を表 2 に示した。専門志向化の 2 カテゴリーと SH・LS のカテゴリーにサブカテ

ゴリーと下位概念が構成され、本章のインタビュー調査から、レクリエーション専門志向化が SH・LS に与える影響を質的に分析することが可能であると考えられる。しかし、行動カテゴリーである、潜水本数、経験年数、活動頻度に関しては、その多くが文脈のある発話ではないことと、対象者が専門志向化し経験豊富であることから、潜水本数、開始年のみを表1に記載した。また、活動場所、レジャー・スポーツ歴、家族のレジャー・スポーツ歴についても大きな特徴はなく、「活動費用」においては、交通費、旅行費用などの含め方が異なることから比較することが難しいと判断し分析から除外した。

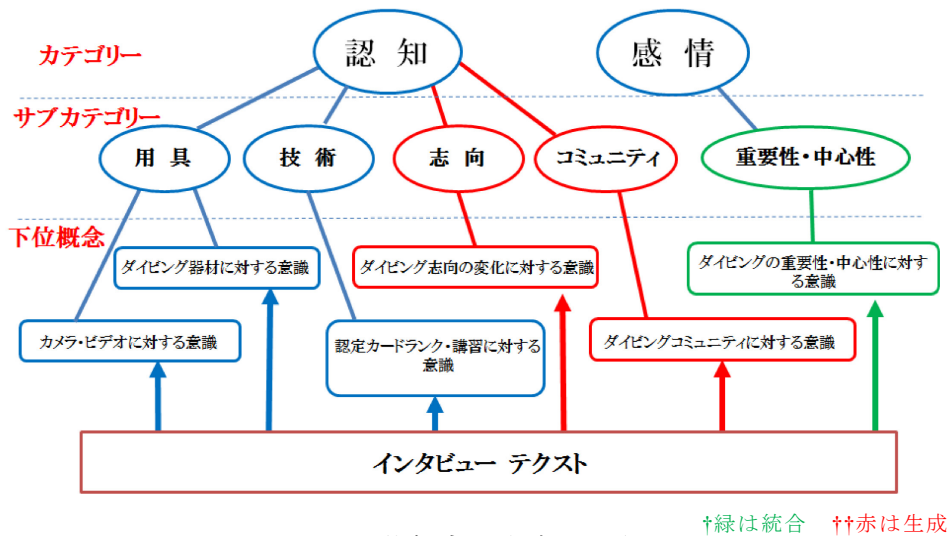


図4. 下位概念の生成と統合

表2. 分析カテゴリー・サブカテゴリー・下位概念

仮説			結果	
カテゴリー	サブカテゴリー	下位概念	サブカテゴリー	下位概念
感情	重要性	ダイビングの重要性に対する意識	重要性・中心性	ダイビングの重要性・中心性に対する意識
	中心性	ダイビングの中心性に対する意識		
認知	用具	ダイビング器材に対する意識	用具	ダイビング器材に対する意識
		カメラ・ビデオ器材に対する意識		カメラ・ビデオ器材に対する意識
	技術	認定カードランク・講習に対する意識	技術	認定カードランク・講習に対する意識
		志向	●ダイビング志向の変化に対する意識	
幸福感・満足度	ダイビング満足度	ダイビングに対する満足度の意識	ダイビング満足度	ダイビングに対する満足度の意識
	生活や仕事の満足度・幸福感	生活や仕事の満足度・幸福感に関する意識	生活や仕事の満足度・幸福感	生活や仕事の満足度・幸福感に関する意識

→ 統合されたもの ● 新たな下位概念

2) 感情カテゴリーの具体的な発話事例

「重要性」サブカテゴリー「ダイビングの重要性に対する意識」の下位概念と「中心性」サブカテゴリーの下位概念「ダイビングの中心性に対する意識」について、以下の内容を質問した。

「あなたの生活で、ダイビングは、どのくらい重要だと感じていますか？」

「あなたの生活で、ダイビングは、どのくらい中心的な物ですか？」

この結果、前述のように2つのサブカテゴリーが統合されたことから、サブカテゴリー「重要性・中心性」の下位概念「ダイビングの重要性・中心性に対する意識」に関する発話の具体例を表3に示した。

表3. 感情カテゴリーの具体例（重要性・中心性）

カテゴリー	サブカテゴリー	下位概念	具体例
感情	重要性・中心性	ダイビングの重要性・中心性に対する意識	<ul style="list-style-type: none"> ●仕事の谷ができた時のストレス発散みたいところが結構あって、仕事が一段落したら旅行とセットで行ってリフレッシュする、そのようなことなのでダイビングはそれなりにウエイトが大きいと思います。日常においてもダイビングが気になるといえば気になります。どんな所へ行きたいということは結構、常に考えていますので、ぼくにとってダイビングはそれなりに大きいと思います(1) ●わたしは一人暮らしなので、ダイビングのウエイトは非常に高いです。毎週来ていて、だから、ダイビングは6割ぐらいを占めていると思います(2) ●仕事はダイビングをするための、小遣い稼ぎです。ダイビングだけに限らず、プライベートを楽しむために仕事も頑張るっていう、というところだと思います(3) ●自然と体がそういうふうになっちゃって、飲み会は全部断りました。もともとつきあいのいい方ではないので、そのころはもう本当に、仕事以外の生活は……もちろん食べたり寝たりというのはあるんですけど、9割方ダイビングでしたから。今週潜ってあれを狙ってみようかと、それしか考えていませんでした。もう24時間、365日そういうふうを考えていました(4) ●生活の一部にはなっちゃってしまっていますね。普通に平日は仕事をして、ダイビングに行く日は2週間に2回ですけど、そういう生活の一部として行っている、そういう感覚です(5) ●10%程度、ないといやだけど、何カ月も潜っていないと…いやだし、始めた当初と変わっていない(6) ●ダイビングの重要性は、始めたときからあまり変わってない感じですね。始めたときに比べて、満足度的にも質が変わったというだけであって、それまでが、特に途中であまり良くなかったとかいうことはなく、ずっと同じような感じで継続してます(7)

下位概念の発話具体例を見ると、以下のようなものがある。

「●仕事の谷ができた時のストレス発散みたいところが結構あって、仕事が一段落したら旅行とセットで行ってリフレッシュする、そのようなことなのでダイビングはそれなりにウエイトが大きいと思います。日常においてもダイビングが気になるといえば気になります。どんな所へ行きたいということは結構、常に考えていますので、ぼくにとってダイ

ビングはそれなりに大きいと思います」(1)

「●わたしは一人暮らしなので、ダイビングのウエイトは非常に高いです。毎週来ていて、
(中略)だから、ダイビングは6割ぐらいを占めていると思います」(2)

「●仕事はダイビングをするための、小遣い稼ぎです。ダイビングだけに限らず、プライベートを楽しむために仕事も頑張るっていう、というところだと思います」(3)

「●自然と体がそういうふうになっちゃって、飲み会は全部断りました。もともとつきあいのいい方ではないので、そのころはもう本当に、仕事以外の生活は……。もちろん食べたり寝たりというのはあるんですけど、9割方ダイビングでしたから。今週潜ってあれを狙ってみようかと、それしか考えていませんでした。もう24時間、365日そういうふう
考えていました。」(4)

「●生活の一部にはなってしまうですね。普通に平日は仕事をして、ダイビングに行く日は2週間に2回ですけれど、そういう生活の一部として行っている、そういう感覚です」(5)

のように、個人によってその重要性や中心性の度合いは異なっている。また、重要度が高い意味づけも個々に違うと考えられる。また、以下の発話のように、

「●10%程度、ないといやだけど、何カ月も潜っていないと…いやだし、始めた当初と変わっていない」(6)

「●ダイビングの重要性は、始めたときからあまり変わってない感じですね。始めたときに比べて、満足度的にも質が変わったというだけであって、それまでが、特に途中であまり良くなかったとかいうことはなく、ずっと同じような感じで継続してます」(7)

過度な中心性、重要性はないが、なくてはならないという気持ちが伝わってくる。このように、専門志向化されたダイバーであっても、ダイビングに対する感情はそれぞれである。また、表現としての発話であり、その度合いを詳細に比較することは難しいことが考えられる。

3) 認知カテゴリーの具体的な発話事例

(1) 用具サブカテゴリー「ダイビング器材に対する意識」

用具サブカテゴリーの下位概念「ダイビング器材に対する意識」について、以下の内容を質問した。

「あなたは、ダイビング器材をどのように購入し、どのように買い換えたりしていますか？」

「また、こだわりはありますか？」

この結果、「ダイビング器材に対する意識」の具体例を表4に示した。

表4. 認知カテゴリーの具体例（ダイビング器材に対する意識）

カテゴリー	サブカテゴリー	下位概念	具体例
認知	用具	ダイビング器材に対する意識	<ul style="list-style-type: none"> ●器材は、使い慣れたものを壊れるまで使う。正直壊れない、ドライも、消耗品(1) ●なんでもいい、慣れたらなんでも同じ、カメラは違う、空気が入れればいいし、吸えればいいし、マスクなんか水が入ってこなければいいし(2) ●器材は比較的無頓着、昨年全部壊れて買った(3) ●25年使っていたBCを変えた・・・使えるからいいじゃないか？「すぐやめるならいいけど、これから10年ほどやるつもりなら、もう買った方がいいんじゃない？」と言われて、それがすごい説得力あったので、「そうか」と思いました(4) ●リブリーザーとか、一時期やっていたりしたことがありまして。そういう意味での、スクーバダイビングとはまったく異質の器材ということになると、ものすごく興味があるんですよ(5) ●すべて個人持ちで、レギュレーションが変わるとアップデートしていく、所持器材が多い（中略）タンクについても今は普通の11リットルが4本はあるし、その他、デコンプレッションに使う時の6リットルは7本ぐらいあるのかな？3年に1回は耐圧検査があって...(6)

ダイビング器材の発話は、器材に対して「気にしないタイプ」と、「気にするタイプ」に分かれる。「気にしないタイプ」の発話の事例は、

「●器材は、使い慣れたものを壊れるまで使う。正直壊れない、ドライも、消耗品」(1)

「●なんでもいい、慣れたらなんでも同じ、カメラは違う。空気が入れればいいし、吸えればいいし、マスクなんか水が入ってこなければいいし」(2)

「●器材は比較的無頓着、昨年全部壊れて買った」(3)

「●25年使っていたBCを変えた…使えるからいいじゃないか？“すぐやめるならいいけど、これから10年ほどやるつもりなら、もう買った方がいいんじゃない？”と言われて、それがすごい説得力あったので、“そうか”と思いました」(4)

など、「気にしない」とはいつでも、潜るために必要でありきちんとメンテナンスを行っている。予備を持っているという発話もされていることから、ダイビングをする行為自体に必要な機能が備わっていれば、特にこだわりを持たない人が多かった。第3章において、レクリエーション専門志向化指標の器材に関する因子にばらつきが大きいこととその関連が推察された。

しかし、テクニカルダイビング^{注4)}や、一般的なスクーバ器材以外のリブリーザー^{注5)}を使用する場合には、器材がその行為自体に占めるウェイトが非常に高いことから、以下の発話がされている。

「●リブリーザーとか、一時期やっていたりしたことがあります。そういう意味での、スクーバダイビングとはまったく異質の器材ということになると、ものすごく興味があるんですよ」(5)

「●すべて個人持ちで、レギュレーションが変わるとアップデートしていく、所持器材が多い(中略)タンクについても今は普通の11リットルが4本はあるし、その他、デコンプレッションに使う時の6リットルは7本ぐらいあるのかな?3年に1回は耐圧検査があって...」(6)

テクニカルダイビングを行うためには器材が重要な位置づけを持ち、その重要度が高いことが考えられる。また、テクニカルダイビングにおいては、器材を正確に使用するためのスキルが要求されることも一因であろう。

(2) 用具サブカテゴリー「カメラ・ビデオ器材に対する意識」

用具サブカテゴリーの下位概念「カメラ・ビデオ器材に対する意識」について、以下の内容を質問した。

「あなたは、カメラ・ビデオなどの器材をどのように購入し、どのように買い換えたりしていますか?」。 「また、こだわりはありますか?」

この結果、「カメラ・ビデオ器材に対する意識」の具体例を表5に示した。

表5. 認知カテゴリーの具体例（カメラ・ビデオ器材に対する意識）

カテゴリー	サブカテゴリー	下位概念	具体例
認知	用具	カメラ・ビデオ器材に対する意識	<ul style="list-style-type: none"> ●最初はずっとビデオでした。カメラ，デジタル一眼にしたのが3年ちよとしてからです。そこからは完全に写真を撮るために潜っています。カメラは好みがある(1) ●今，カメラにハマっている(2) ●初めはフィルムだったのがデジカメになって，人から安くゆずってもらったりして，今までで4セットほどになります。特にいろいろな物に目を配るというよりも，ある物で...(3) ●使い捨てカメラから，96年に，デジタルビデオとカメラ，ハウジングを10年ぐらい使いましたが，“もちよといいかな”と思って，今は，一式，コンデジとアーム，ストロボ，ライトのセットのみです，それ以上は，あまり感じていない(4)

カメラ・ビデオ器材に関しては，コンパクトデジタルカメラと水中ハウジング^{注6)}が安価で普及してから，水中で手軽に綺麗な写真が撮影できるようになり，フォト派ダイバーが増えていることも一因であると考えられる。また，カメラの投資額は大きいと考えられる。そして，以下の発話のように，写真を撮影することがダイビングの目的となっている人もいる。

「●最初はずっとビデオでした。カメラ，デジタル一眼にしたのが3年ちよとしてからです。そこからは完全に写真を撮るために潜っています。カメラは好みがある」(1)

「●今，カメラにハマっている」(2)

しかし，高価なカメラ器材というよりも，以下のように手軽になった水中写真の撮影を楽しむ発話も見られた。また，志向の変化から，カメラ器材をダウングレードしている人もいる。

「●初めはフィルムだったのがデジカメになって，人から安くゆずってもらったりして，今までで4セットほどになります。特にいろいろな物に目を配るというよりも，ある物で...」(3)

「●使い捨てカメラから，96年に，デジタルビデオとカメラ，ハウジングを10年ぐらい使いましたが，“もちよといいかな”と思って，今は，一式，コンデジとアーム，ストロボ，ライトのセットのみです，それ以上は，あまり感じていない」(4)

(3) 技術サブカテゴリ「認定カードランク・講習に対する意識」

技術サブカテゴリの下位概念「認定カードランク・講習に対する意識」について、以下の内容を質問した。

「あなたのカードランクは何ですか？」

「今後、次の講習を受けたいと思っっていますか？」

「認定カードのランク、講習について」の発話の具体例を表6に示した。

表6. 認知カテゴリーの具体例（認定カードランク・講習に対する意識）

カテゴリー	サブカテゴリ	下位概念	具体例
認知	技術	認定カードランク・講習に対する意識	<ul style="list-style-type: none"> ●インストラクター：一時はもう本当に、講習することも楽しかったですよ。非常勤スタッフをやったり、あと個人的に後輩を教えて、ダイビングをやってくれる人が増えたりって楽しかったです。いまは、もう人と潜ること自体が面倒くさいです。ほうっといてください、っていう感じになっちゃいました(1) ●インストラクター:非常勤イントラでガイドを15年はしていたのでは...今でも、頼まればしますが、頼まれないかな(笑)(2) ●ダイブマスター:Y市のサービスにお世話になって、そこで育てていただきましたし、スタッフ状態って言うんですか「ちょっとお店手伝ってよ」って言われまして。そうすると経験も積めていきますし、その当時は、そういう行為自体も楽しく思えました(3) ●アドバンス:もうとる気はないです(4) ●アドバンス:この後、トレーニングを受けたいという気持ちなし。興味がでたらRDでも(5) ●アドバンス:特にはない、写真のためにリブリーザーはしてみたい(6) ●テクニカル:深い所のターゲットは3桁、100メートルになります。その100メートル到達しました。オープンサーキットが1回目、次がCCR、そしてクローズドサーキットで今度また100メートル。それで一つの区切りがついて、今度はケープです(中略)未知のところを自分で探して、自分でラインをはって、自分で名前を書いてくる、そういう感じです(7)

ダイビングのランクや講習については、インストラクターやダイブマスターといったプロレベルのランクを有する人が約半数の9人であった。しかし、現役で非常勤スタッフをしている人はいなかった。インストラクターやダイブマスターを取得した時期も、比較的ダイビング開始後早く、開始後数年の人がほとんどであった。これらプロレベルの資格を持つ人の発話は、

「●インストラクター：一時はもう本当に、講習することも楽しかったですよ。非常勤スタッフをやったり、あと個人的に後輩を教えて、ダイビングをやってくれる人が増えたりって楽しかったです。いまは、もう人と潜ること自体が面倒くさいです。ほうっといてください、っていう感じになっちゃいました」(1)

「●インストラクター：非常勤イントラでガイドを15年はしていたのでは…今でも、頼まればしますが、頼まれないかな（笑）」(2)

「●ダイブマスター：Y市のサービスにお世話になって、そこで育ててもらいましたし、スタッフ状態って言うんですか“ちょっとお店手伝ってよ”って言われまして、そうすると経験も積めていきますし、その当時は、そういう行為自体も楽しく思えました」(3)

のように、ダイビング指導やガイド、スタッフレベルでの活動を経験して、その時は、その活動を楽しんでいたことがうかがえる。残りの半数の人は、アドバンスレベルのダイバーが多く、それも、積極的に取得したというよりは、必要に迫られて、なんとなく、という理由が多く、今後、講習を受ける希望について、積極的な発話は見られなかった。発話の内容としては、

「●アドバンス：もうとる気はないです」(4)

「●アドバンス：この後、トレーニングを受けたいという気持ちなし。興味がでたら RD (レスキューダイバー) でも」(5)

「●アドバンス：特にはない、写真のためにリブリーザーはしてみたい」(6)

など、講習に関しては、不確定であり、「興味があったら」、「写真のために…」という理由であった。しかし、テクニカルダイビングにおいては、究極の探検まで道が開けていることから、以下の発話を得られた。

「●テクニカル：深い所のターゲットは3桁、100メートルになります。その100メートル到達しました。オープンサーキットが1回目、次がCCR、そしてクローズドサーキットで今度また100メートル。それで一つの区切りがついて、今度はケープです（中略）未知のところを自分で探して、自分でラインをはって、自分で名前を書いてくる、そういう感じ」(7)

* オープンサーキット^{注7)}、CCR^{注8)}、クローズドサーキット^{注9)}、ケープ^{注10)}

のように、行き着く先やゴールが存在しない道のように対象者自身が感じているようであった。新たな目的に対しての新規講習があり、技術維持のトレーニングが必要であるという。

今回は、ダイビングに関する講習について質問を行ったが、水中写真セミナーなどについて質問していれば、その希望があったことも予想される。

(4) コミュニティサブカテゴリー「ダイビングコミュニティに対する意識」

コミュニティサブカテゴリーの下位概念「ダイビングコミュニティに対する意識」については、半構造化インタビューにおいて、関連する質問の中から、自然に発話が行われた。

「ダイビングコミュニティに対する意識」の発話の具体例を表7に示した。

表7. 認知カテゴリーの具体例（ダイビングコミュニティに対する意識）

カテゴリー	サブカテゴリー	下位概念	具体例
認知	コミュニティ	ダイビングコミュニティに対する意識	<ul style="list-style-type: none"> ●あと、申し上げていなくて、でもここ重要かなという点が1点ありまして。何でもそうだと思うんですけど、コミュニティって大事でしょう。伊豆がこれだけ続いている理由といいますのは、ここでお会いする方が、普段職場で会うわけでもありませんし、平日はみんなてんでバラバラだと思うんですけど、ここに皆さん集まって（笑）(1) ●やっぱりこの趣味を通して友人が多いということ、世界が広がって友人が増えていっているというのが事実としてあります。実際に、FacebookとかのSNSで、ダイバーの友達というのが、もう毎年毎年増えていっていますし(2) ●みんなで言っているのですが、「〇〇〇（お店の名前）」のときは、毎週来ていても、顔は知っていても名前も知らないのが普通だったのが、まあ、時代的にSNSがはやってFacebookなどもみんなやるようになってきているから、それで顔と名前が一致しだしているとか、日ごろでもみんな仲良くやり取りする時代になってきたということも理由としてあるかもしれません(3) ●セルフで潜る、人にいろいろ言われたくないから。ぼくは〇〇会（サークル）の人との人間関係がわりとうまくいかなくて、いまも〇〇会からちょっと離れちゃっているんです。やっぱり真面目な〇〇（職業）っていうのがぼくは合わなくて(4)

「ダイビングコミュニティに対する意識」の下位概念は、M-GAT分析によるキーワードから探索されたものであり、「ダイビングの中心性・重要性に対する意識」の発話の中に付随して発話されたものが多い。例えば、

「●あと、申し上げていなくて、でもここ重要かなという点が1点ありまして。何でもそうだと思うんですけど、コミュニティって大事でしょう。伊豆がこれだけ続いている理由といいますのは、ここでお会いする方が、普段職場で会うわけでもありませんし、平日はみんなてんでバラバラだと思うんですけど、ここに皆さん集まって（笑）」(1)

などは、この場に集うこと自体が、日常の人間関係外の重要な場所として認識されていることがうかがえる。これは、二宮⁵⁾がウインドサーフィンを対象に行った参与観察の結果にある、知人との交流目的で活動場所に行くことと同様の結果であると考えられる。

また、近年、普及している SNS に関する発話では、

「●やっぱりこの趣味を通して友人が多いというのと、世界が広がって友人が増えていっているというのが事実としてあります。実際に、Facebook とかの SNS で、ダイバーの友達というのが、もう毎年毎年増えていっていますし」(2)

「●みんなで言っているのですが、「〇〇〇〇 (ダイビングサービスの名前)」のときは、毎週来ていても、顔は知っていても名前も知らないのが普通だったのが、まあ、時代的に SNS がはやって Facebook などみんなやるようになっていいるから、それで顔と名前が一致しだしているとか、日ごろでもみんな仲良くやり取りする時代になってきたということも理由としてあるかもしれません」(3)

など、SNS などによって、これまでは、知りえなかったダイビングでの友人、知人の日常が共有され、より身近に感じられていることが推察される。その逆の発話では、

「●セルフで潜る、人にいろいろ言われたくないから。ぼくは〇〇会 (*同好会の名前)の人との人間関係がわりとうまくいなくて、いまも〇〇会からちょっと離れちゃっているんです。やっぱり真面目な〇〇 (職業) っていうのがぼくは合わなくて」(4)

のように、他者との関係を持たずに、単独 (セルフ)^{注11)}で潜るというのも一つのダイビングスタイルなのかもしれない。この対象者は、セルフで潜れるこの場所ともう一カ所でダイビングを楽しんでいる。

(5) 志向サブカテゴリー「ダイビング志向の変化に対する意識」

志向サブカテゴリーの下位概念「ダイビング志向の変化に対する意識」については、半構造化インタビューにおいて、関連する質問の中から、自然に発話が行われ M-GAT 分析

によるキーワードから探索されたものである。

「ダイビング志向の変化に対する意識」の発話の具体例を表8に示した。

表8. 認知カテゴリーの具体例（ダイビング志向の変化に対する意識）

カテゴリー	サブカテゴリー	下位概念	具体例
認知	志向	ダイビング志向の変化に対する意識	<p>●20代ぐらいは逆に言うと沖縄のあったかい海の魚、きれいな魚に興味を持っていたんですけど、逆にもう30代前半ぐらいになると、(中略)30代後半になってきますと、亜熱帯だったり、北の魚とか上がってきて、いまは40代になって、わたしが最近行っているのはほとんど日本海なんです(1)</p> <p>●何もかも面白かったです。深場に行ったり、浅場でも慣れてくると、何がめずらしいか、何がめずらしくないのかということが瞬時に分かるようになりますよね。そのころはめずらしいものが好きだったんですけど、いまはもうめずらしいものはあんまり好きじゃなくて。いまは普通種の産卵とかそういうのを見るのが大好きです(2)</p> <p>●ようするに、もともと生物に興味があったわけではないのに、生物に興味を持って、やっぱりカニとか、何かに擬態している物とかがものすごく愛おしくて愛おしくてっていう。早く探して、探してっていうダイビングですね(3)</p> <p>●ダイビングをやっているけど結構マイブームがあって、それにバーっといってるときはいつてますし。いま、カメラにすごく凝っています(4)</p> <p>●ついて行くだけだったのが自分で行かなければいけなくなって、それはそれで最初はストレスで、今でも水が濁(にご)っていたりするとストレスですが、ずい分そういう部分では良くなりました。今は、完全に写真を撮るために、潜っています(5)</p> <p>●経験の積み重ね、知識の積み重ねがどんどんどんどん増えていって、それが徐々にマンネリ化してくるんですね(中略)、同じことをずっと続けていると飽きてきます。じゃあ何を新しい要素として加えていくかといいますと...(6)</p> <p>●一時期ありました。というのも、やっぱ〇〇〇(ダイビングの地名)で手伝いをしてというのがあったんですけど、(中略)ただ、本当に情熱があって、いわゆる独立してやりたいとか改革してやりたいという欲望、野望があれば、かつ、年齢は関係ないかもしれないですけど、やっぱり体力を使いますので、もしあと10年早ければやっていたかもしれません、というのがいまの感想です(7)</p>

ダイビング経験や旅行先などの質問に対して、年代によって、ダイビングの目的や好み
が変化したという発話が行われた。例えば、

「●20代ぐらいは逆に言うと沖縄のあったかい海の魚、きれいな魚に興味を持っていたんですけど、逆にもう30代前半ぐらいになると、(中略)30代後半になってきますと、亜熱帯だったり、北の魚とか上がってきて、いまは40代になって、わたしが最近行っているのはほとんど日本海なんです」(1)

のように、年代によって興味の変化、場所の変化が起こっていることが感じられる。同様のケースでは、以下の発話にもある。

「●何もかも面白かったです。深場に行ったり、浅場でも慣れてくると、何がめずらしいか、何がめずらしくないのかということが瞬時に分かるようになりますよね。そのころは

めずらしいものが好きだったんですけど、いまはもうめずらしいものはあんまり好きじゃなくて。いまは普通種の産卵とかそういうのを見るのが大好きです」(2)

「●ようするに、もともと生物に興味があったわけではないのに、生物に興味を持って、やっぱりカニとか、何かに擬態している物とかがものすごく愛おしくて愛おしくてっていう。早く探して、探してっていうダイビングですね」(3)

同じ場所であっても、その時、その時で、ターゲットが違うということが飽きを感じさせていない。以下の発話は、そのものである。

「●ダイビングをやっても結構マイブームがあって、それにバーっといってるときは
いってますし。いま、カメラにすごく凝っています」(4)

「●ついて行くだけだったのが自分で行かなければいけなくなって、それはそれで最初は
ストレスで、今でも水が濁（にご）っていたりするとストレスですが、ずい分そういう部
分では良くなりました。今は、完全に写真を撮るために、潜っています」(5)

まさしく、「マイブーム」がそれぞれあるということであろう。これに関連した発話に、

「●経験の積み重ね、知識の積み重ねがどんどんどんどん増えていって、それが徐々にマ
ンネリ化してくるんですね (中略)、同じことをずっと続けていると飽きてきます。じゃあ
何を新しい要素として加えていくかといいますと…」(6)

のように、ダイビング活動に飽きがこないような工夫をしていることがうかがえる。これは、すなわち Iso-Ahola と Weissinger⁶⁾がレジャーにおける退屈感が多いほど、LSが低くなることを指摘していることの逆説であると考えられる。つまり、レクリエーション専門志向化している人は、飽きがこないように、長期間にわたって、その都度ダイビング志向を変化させているということである。また、専門志向化から仕事に発展する発話には、

「●一時期ありました。というのも、やっぱ〇〇〇 (ダイビングの地名) で手伝いをして

いるというのがあったんですけど、(中略)ただ、本当に情熱があつて、いわゆる独立してやりたいとか改革してやりたいという欲望、野望があれば、かつ、年齢は関係ないかもしれないですけど、やっぱり体力を使いますので、もしあと10年早ければやっていたかもしれない、というのがいまの感想です」(7)

のように、インストラクションやガイドなどを非常勤でなく専業で行うという道を考えていたことがうかがえる。時間経過に基づく経験が発達し専門志向化したことによって、趣味を仕事にしようとする考えが起きていたと言える。

4) 幸福感・満足度カテゴリーの具体的な発話事例

(1) ダイビング満足度サブカテゴリー「ダイビングに対する満足度の意識」

ダイビング満足度サブカテゴリーの下位概念「ダイビングに対する満足度の意識」について、始めた当初から現在にかけて以下の質問をした。また、「ダイビングに対する満足度の意識」は、誘導にならないように慎重に発話を求めた。

「あなたは、今のダイビングにどの程度満足していますか？」

「その満足度は、始めた頃に比べてどう変わりましたか？」

「ダイビングに対する満足度の意識」の具体例を表9に示した。

表9. 幸福感・満足度カテゴリーの具体例 (ダイビングに対する満足度の意識)

カテゴリー	サブカテゴリー	下位概念	具体例
幸福感・満足度	ダイビング満足度	ダイビングに対する満足度の意識	<ul style="list-style-type: none"> ● やっぱり、潜って帰って疲れるんですけど、その達成感とか疲労感が心地よいとか、ストレスが発散できているとか、日常のモヤモヤをここで吐き出して帰ってくるみたいな、そういう面でやっぱりプラスだと思います(1) ● 良い写真が撮れた時は、「よっしゃ」という感じですし、そうでない時は、「ああ……」という感じになりますが、結局、楽しいという感情は常にあります(2) ● そういう意味では、いまの方が満足度が高いと思います。昔は、たとえば天気で、「きょう晴れた、すごく楽しそう」「雨が降っている、なんかあんまり行きたくない」っていう気分のブレがあったんですけど、いまはあまりないです。全然晴れてても雨が降ってても、水の中に入れば同じじゃん、っていう感覚が持っています(3) ● まあでも、インドア派・アウトドア派とかだとアウトドア派で、べつにダイビングに限らず山とか登っても楽しいし、海に来たら来たで楽しいし、旅行に行ったら行ったで楽しいし。ダイビングに限ったことではないです(4) ● 「海がイマイチでも、陸が楽しかったしね」みたいなことを含めると、毎回あまり差はありません。海だけだと、やはり何もいなかったら寂(さみ)しい感じをすることもありますが、帰る際に、「ああ……」という感じになることはありません。結局は楽しかったと思って帰ることがほとんどです(5)

ダイビング満足度に関する発話の具体例としては、

「●やっぱり、潜って帰って疲れるんですけど、その達成感とか疲労感が心地よいか、
ストレスが発散できているとか、日常のモヤモヤをここで吐き出して帰ってくるみたいな、
そういう面でやっぱりプラスだと思います」(1)

「●良い写真が撮れた時は、“よっしゃ”という感じですし、そうでない時は、“ああ……”
という感じになりますが、結局、楽しいという感情は常にあります」(2)

のように、単純にダイビングでのストレス解消や、楽しさなど心理的効果の発話が多くみられる。これは、Iwasakiら^{7,8)}のレジャー活動がストレス解消に効果があることや、多くの海洋スポーツ・レクリエーションの心理的効果の研究^{9,10)}を支持するものであった。また、専門志向化する前との比較をした発話では、

「●そういう意味では、いまの方が満足度が高いと思います。昔は、たとえば天気で、“きょう晴れた、すごく楽しそう”“雨が降っている、なんかあんまり行きたくない”っていう気分のブレがあったんですけど、いまはあまりないです。全然晴れてても雨が降ってても、水の中に入れば同じじゃん、っていう感覚が持っています」(3)

のように、経験によって満足度の質が変化したことを述べている。しかし、特にダイビングに特化したことではないとの発話もある。

「●まあでも、インドア派・アウトドア派とかだとアウトドア派で、べつにダイビングに限らず山とか登っても楽しいし、海に来たら来たで楽しいし、旅行に行ったら行ったで楽しいし。ダイビングに限ったことではないです」(4)

この発話は、実際にレジャー全般が楽しく感じられるということであり、必ずしもその活動に特化したものでないと「楽しめない」、「満足できない」ということでないことを意味している。しかし、このケースは、一見否定的に見えるが余暇活動としての満足度は何

であっても楽しいということを意味し、アウトドアでの活動全般での専門志向化が図られていることも考えられる。

(2)生活や仕事の満足度・幸福感サブカテゴリ「仕事や生活の幸福感・満足度の意識」

「生活や仕事の満足度・幸福感についての意識」について、始めた当初から現在にかけて以下の質問をした。

「あなたは、現在、生活、仕事、家庭に満足していますか？」

「また、どのぐらい幸せだと感じていますか？」

「生活や仕事の満足度・幸福感の意識」に関する具体例を表10に示した。

表10. 幸福感・満足度カテゴリの具体例（生活や仕事の満足度・幸福感の意識）

カテゴリ	サブカテゴリ	下位概念	具体例
幸福感・満足度	生活や仕事の満足度・幸福感	生活や仕事の満足度・幸福感の意識	<ul style="list-style-type: none"> ●どちらかという仕事は、べつにそんなに収入があるわけじゃないですけど、安定的に入ってきて、それなりに人間関係に満足していればよくて。そしてダイビングをしているときに楽しければ、また気持ちが明るくなるから、職場の人間関係にも明るく接せられるみたいところがあります(1) ●ダイビングができていからこそ、というのは、やっぱり、仕事をする上で1回やっぱりリセットして、また新たにリスタートするための、充電のための良い活力になっていると思いますし。そうですね、仕事をするために潜っていたりしますし、潜るために仕事をしていることもあります(2) ●仕事で嫌なことがあってもダイビングで楽しいことをすれば、また仕事に戻れます。仕事とダイビングは、持ちつ持たれつの関係です(3) ●それこそ会社で本業がだめで、たとえば収入もままならなくて、それこそ今にもつぶれそうな……そういう状態で遊べるかといったら遊べないですよ。逆に言うともバランスといいますが、当然いきすぎもよくありませんし、いきすぎない程度で、かつ、本当にゆとりの部分がないと、これは続けられないと思っています(4) ●気がついたら幸せになっていたというか、少しあいまいな表現で申しわけないですが。たとえば、目的の魚が見られなかったとしても、ダイビングが終わった後、「ああ、幸せだよ」という感じ(5) ●家庭こわれちゃってるから、休みの日なんかもうやって、ぼくは全然勝手に……向こうは向こうで勝手に何かやってますし、こっちも勝手にやりますから(笑)(6) ●あと、あんまり家をあげすぎると、ちょっと良くないな、と。少しはちょっと……土曜日は海に行くけど、日曜日は相方と少し交流しないといけないな、というのもありまして(7) ●まあ、悪くはないのですが、家族サービスがおろそかにはなっています。同じ趣味なら良いのですが、わたし1人でこうやって来ていますし、その点はどうかと常に思っています(8)

「生活や仕事の幸福感・満足度の意識」に関しては、回答が難しい質問であり、誘導にならないように慎重に発話を求めた。発話の事例には、

「●どちらかという仕事は、べつにそんなに収入があるわけじゃないですけど、安定的に入ってきて、それなりに人間関係に満足していればよくて、そしてダイビングをしているときに楽しければ、また気持ちが明るくなるから、職場の人間関係にも明るく接せられるみたいところがあります」(1)

「●ダイビングができていからこそ、というのは、やっぱり、仕事をする上で1回やっ

ぱりリセットして、また新たにリスタートするための、充電のための良い活力になっていると思いますし、そうですね。仕事をするために潜っていたりしますし、潜るために仕事をしていることもあります」(2)

「●仕事で嫌なことがあってもダイビングで楽しいことをすれば、また仕事に戻れます。仕事とダイビングは、持ちつ持たれつの関係です」(3)

「●それこそ会社で本業がだめで、たとえば収入もままならなくて、それこそ今にもつぶれそうな……そういう状態で遊べるかといったら遊べないですよ。逆に言うとバランスとといいますか、当然いきすぎもよくありませんし、いきすぎない程度で、かつ、本当にゆとりの部分がないと、これは続けられないと思っています」(4)

「●気がついたら幸せになっていたというか、少しあいまいな表現で申しわけないですが、たとえば、目的の魚が見られなかったとしても、ダイビングが終わった後、“ああ、幸せだよね”という感じです」(5)

など、これらは、ダイビングの活動が仕事に対してプラスに働いている発話であり、仕事とダイビングがバランスよくできているということであろう。

また、以下の発話は、生活における幸福感、満足度としての判断は難しいが家庭とのバランスに関して相反する事例である。

「●家庭こわれちゃってるから (笑) …、休みの日なんかもこうやって、ぼくは全然勝手に……。向こうは向こうで勝手に何かやっていますし、こっちも勝手にやっていますから (笑)」(6)

「●あと、あんまり家をあげすぎると、ちょっと良くないな、と。少しはちょっと……。土曜日は海に行くけど、日曜日は相方と少し交流しないといけないな、というのもあります」(7)

「●まあ、悪くはないのですが、家族サービスがおろそかにはなっています。同じ趣味なら良いのですが、わたし1人でこうやって来ていますし、その点はどうかと常に思っています」(8)

趣味であるダイビングの時間と家族との時間のバランスや考え方も、それぞれ異なることがうかがえた。これは、Kuentzel と Heberlein¹¹⁾が、結婚や経済状況などの生活の変化が専門志向化の衰退や消耗の一因となることを指摘していることとも関係があると考えられる。また、今回の調査対象者における家族構成をみると、独身が11名であり、残りの配偶者やパートナーがいる対象者で子供がいる人は2名であったことから、家族や重要な他者との関係が専門志向化の形成過程に影響を与える一因となっていることが考えられる。

5) レクリエーション専門志向化の類型化

レクリエーション専門志向化の類型化を行うために、まず、分析サブカテゴリーごとの反応評価を表11に示した。また、表記については、個人が特定されないように配慮を行い、性別とアルファベットの記号のみとした。

表11. 対象者の分析カテゴリーごとの反応

対象者	性別	幸福感	満足度	感情	認知				
		ダイビングの満足度	生活・仕事の満足度、幸福感	重要性・中心性	用具 (ダイビング器材)	用具 (カメラ他)	技術	コミュニティ	志向
A	男性	+	■	+	-	▲	-	-	+
B	男性	+		+	-		++	++	++
C	男性	+	+	++	-	+	◆	+	+
D	男性	+		+		++	++	++	++
E	男性	+	+	+	-	+	◆	++	++
F	女性	++	+	++	-		-	++	◆
G	女性	+	+	+	-		◆	◆	◆
H	男性	+	+	+	-	+	◆	◆	◆
I	男性	+				+	-	◆	+
J	男性		■		++		++	◆	++
K	男性	++		+	-	+	-	◆	◆
L	男性			+		+	◆	◆	◆
M	男性	+	+	++	--	++	+	+	◆
N	女性	+	+	++		++	+	+	◆
O	女性	+				+	-	◆	◆
P	女性			-		+	+	◆	+
Q	男性	+		+	+	▲	+	◆	◆
R	男性	+		+	+	+	+	◆	+
S	女性	++		++	--	▲		++	+
++		3		4	2	3		5	4
+		13	7	10	2	9	6	2	6
普通(空欄)		3	10	5	5	4	9	0	
-					8		4	1	
--					2				
◆発話なし								◆11	◆9
■・▲			■2			▲3			

■:家族との時間を配慮していない

▲:カメラ・ビデオ撮影をしない

サブカテゴリー、下位概念から全体の特徴を検討した結果、「用具(カメラ・ビデオ器材)」は、全体で特徴がみられず、「ダイビングの重要性・中心性」も対象者の多くが反応し、特徴は見出せなかった。そして、特徴のある発話の多くが感情カテゴリーの「重要性・中心性」サブカテゴリーの質問からなされ、新たな下位概念として生成された認知カテゴリーの「コミュニティ」、「志向」と「技術」サブカテゴリーに特徴が見られ、類型化することが可能であった。この類型化は、新たに生成された2つの下位概念を中心に行われていることから、発話がされない対象者も存在し、すべての対象者に対して網羅的なサブカテゴリーではない。しかし、「コミュニティ」と「志向」に関する発話が自発的に数多くされたということは、重要な意味を持っていると考えられる。従って、この2つのサブカテゴリーを有効と考え、レクリエーション専門志向化を6つのタイプに類型化し、タイプ別に並べ替えを行った結果を表12に示した。

表 12. 対象者の分析カテゴリーごとの反応と類型化によるタイプ

対象者	性別	幸福 満足度		感情	認知					タイプ
		ダイビングの満足度	生活・仕事の満足度・幸福感	重要性・中心性	用具 (ダイビング器材)	用具 (カメラ・ビデオ)	技術	コミュニティ	志向	
F	女性	++	+	++	-	-	-	++	◆	①
M	男性	+	+	++	--	++	+	+	◆	①
N	女性	+	+	++		++	+	+	◆	①
G	女性	+	+	+	-			◆	◆	②
H	男性	+	+	+	-	+		◆	◆	②
K	男性	++		+	-	+	-	◆	◆	②
L	男性			+		+		◆	◆	②
O	女性	+				+	-	◆	◆	②
Q	男性	+		+	+	▲	+	◆	◆	③
B	男性	+		+	-			++	++	④
D	男性	+		+		++		++	++	④
S	女性	++		++	--	▲		++	+	④
A	男性	+	■	+	-	▲		-	+	⑤
C	男性	+	+	++	-	+		◆	+	⑤
E	男性	+	+	+	-	+		◆	++	⑤
I	男性	+				+	-	◆	+	⑤
J	男性		■		++		++	◆	++	⑥
P	女性			-		+	+	◆	+	⑥
R	男性	+		+	+	+	+	◆	+	⑥
++		3		4	2	3		5	4	①=3人
+		13	7	10	2	9	6	2	6	②=5人
普通(空欄)		3	10	5	5	4	9	0		③=1人
-					8		4	1		④=3人
--					2					⑤=4人
◆発話なし								◆11	◆9	⑥=3人
■・▲			■2			▲3				

■:家族との時間を配慮していない ▲:カメラ・ビデオ撮影をしない

このレクリエーション専門志向化の類型化は、サブカテゴリーの「コミュニティ」、「志向」、「技術」に着目し、コミュニティに対する発話の有無、志向の定着と変化、技術の重視度から6タイプに類型化することが可能であった。そして、「①志向定着コミュニティ重視型 F・M・N」、「②志向定着型 G・H・K・L・O」、「③志向定着技術重視型 Q」、「④志向変化コミュニティ重視型 B・D・S」、「⑤志向変化型 A・C・E・I」、「⑥志向変化技術重視型 J・P・R」のタイプを図5に示した。

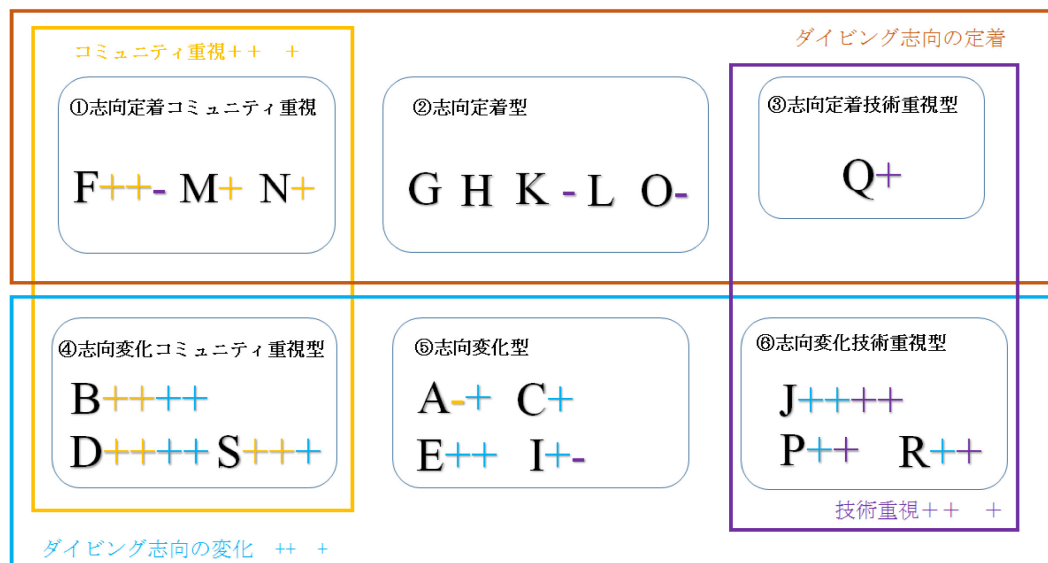


図5. 専門志向化のタイプ

この類型化による6タイプを、下位概念から考察すると、まず、発話から下位概念として生成された「ダイビング志向の変化に対する意識」に、その特徴を見出すことができる。すべての対象者は、開始数年のビギナー時にはダイビングショップやリゾートのガイドやインストラクターに依存し潜水を行っていることから自立していない。しかし、一定期間を経て単独潜水、もしくはバディ潜水^{注12)}ができるレベルに達して自立を図っていたことが推察される。その後、ダイビングスタイルやダイビングの志向が変化するパターンと定着しているパターンが存在すると考えられる。

志向が変化した対象者は、タイプ④～⑥の10名でP・Sさん以外は、すべてインストラクター、ダイブマスターであり、一時期は、ダイビングショップの手伝いや、インストラクターとしての活動を行い、全般として経験年数も比較的長いことから、ダイビング志向の変化が顕著であったことが考えられる。また、アドバンスダイバーのSさんは、現在利用しているサービスに変わってからの、ここ7～8年は、毎回2本潜水するようになった

が、それ以前は、毎回1本しか潜水をせずに、「お昼にして、ビールを飲んで帰る、そんな感じでした」と発話している。その後「最初、ダイビングで泳力がなくて人についていけなかったので、体力をつけようと思ってボクシングに通いだしました。もう7年ほどになります。どんな流れでもついていけないということがなくなりました」と発話していることから、ダイビングに対する志向が明らかに変化したことがうかがえる。また、P・Rさんは、明確に志向が変化したのかの判断は難しいが、テクニカルダイビングを一区切りし、写真が面白いとしていることから志向に変化があったと考えられる。

志向の定着は、タイプ①～③であり、カメラによる写真撮影に集中している場合（M・N・H・L・O）と、特にそうではないが潜るのが純粋に楽しいとする場合（F・G）、テクニカルダイビングで100m潜水等を行っている場合（Q）であった。これらの対象者は、この後、志向の変化が起きる可能性があると考えられるが、現時点では志向が定着していた。

認知カテゴリーの「コミュニティ」サブカテゴリーは、新たに生成されたことから、対象者全員に質問した場合には、なんらかの回答がされたことも考えられる。しかし、自ら関連した質問からの発話は意味を持ち、タイプ①、④のF・M・N・B・D・Sさんは、ダイビングコミュニティが余暇活動として重要であり、ダイビングの友人と会うことやSNSでの繋がりを意識していると考えられる。また、重要性・中心性に関連した質問から派生した発話であることから、コミュニティをダイビング活動の一部として捉えていることが推察され、表12を見てもコミュニティに関する発話があった対象者は、感情カテゴリーの「重要性・中心性」サブカテゴリーの反応はダブルプラス、プラスが多く、「コミュニティ」と「重要性・中心性」のサブカテゴリーが関係していることが考えられる。

サブカテゴリー「技術」に関しては、テクニカルダイビングの講習を受け認定されているタイプ③のQさんおよび⑥のJ・P・Rさんが技術を重視していることが推察される。しかし、インタビューにおいてP・Q・Rさんは、技術を特に重視しているとの発話も少なく、テクニカルダイビングについて多くを語らなかった。この結果は、3人による集団インタビューの影響があったことも考えられ、1対1の個別インタビューであればテクニカルダイビングに関する発話が多数された可能性もある。なぜなら、講習や資格に関する質問では、100mダイビング、ケーブ、トライミックス^{注13)}などに国内外で多数チャレンジしていることや、講習履歴からも技術重視であることが推察できる。現在、P・Rさんは、カメラ

撮影に志向が向いているが、Qさんは写真撮影をしないとのことであった。しかし、Qさんは昨年末 100m 潜水を達成しているなどチャレンジを続けている。4人の技術重視のテクニカルダイバーの中で、最も経験豊富で高度な技術を持つJさんは、難易度の高いフィールドでのテクニカルダイビングを行っている。インタビューを行った場所でのダイビングも、「なるべく水が動かないトレーニング地であり最適である」と発話しているように、技術重視で達成志向を持っていることが推察される。また、費用はかかるがメキシコの地形が好きだとのことであった。しかし、魚の名前は知らないということであった。

このように、専門志向化した人々を類型化し考察を行った。しかし、専門志向化の後やその過程において、なんらかの理由によりダイビングを中止する人が存在することから、ダイビングをやめる人はどのような特徴を持つのかを明らかにするために、ダイビングショップ経営者2名にインタビューを行った。

この結果、一般的な中止、中断の理由は、病気、結婚、出産、年齢（体力低下）、介護、経済的な理由であった。これは、Scott と Lee¹²⁾がバードウォッチャーを対象とした研究において、ファミリーサポートやライフコースの変更、リタイアなどによって専門志向化の発達パターンに従わない場合があることを支持するものであった。しかし、高度に専門志向化したダイバーの中止理由の例外が2つ存在した。その1つは、他のレジャー活動に移行した人であり、ケースとしては、最近来られていないゲストから、友人であるゲストへ電話があり、会話をしたところ「今は、自転車にハマっている」とのことであった。これは、Kuentzel と Heberlein¹¹⁾の新しい趣味による専門志向化の消耗を支持する結果であった。

もう1つは、「自己完結した人」とのことであった。このケースは、ハイレベルの写真器材と高度な撮影技術を持ち、水中撮影を長期にわたり継続し、集大成としての写真集を出版した後、すべての器材を処分しダイビングを引退したという。このような人が数人存在するという。このようなタイプは「目的完結型」と考えることができであろう。しかし、通常多くの場合、突然潜りに来なくなることから、その理由を把握することは難しいということであった。

結婚、出産については、結婚後にパートナーがダイビングをするかしないかによって、その後の継続の有無がわかれるとのことであった。これは、Kelly¹³⁾が結婚の状況、居住地、

職業、健康などによって、個人の活動継続に対する影響が異なるとしたことを支持するものであり、本調査の対象者において、パートナーがすでにダイビングを中止していても家庭とのバランスをとり継続している人の発話には、

「●ええ。最初というか、出会ったときはやっていました。なんだか言って7～8年ぐらいは、土曜日一緒に来て、土曜日送り返して日曜日はひとりで来るとか。パターンはいろいろあったんですけど、そんな感じでした。（中略）、今は、土曜日は海に行くけど、日曜日は相方と少し交流しないとイケないな、というのもありまして」

というもののや、「旦那さんはいますが、仕事しています（笑）」（これは、夫はいるが、今、この時間、実際に仕事しているという意味）という2つの例からも、家庭とのバランスをとっていることが理解できる。しかし、出産、子育てに関しては、元常勤インストラクターが「シャッターを下ろされた感じ…」と表現したように、ダイビングが好きで潜ることが好きであっても、妊娠中に潜ることはできず、子育て中においてもダイビングを継続するための障害は多いことが考えられる。

6) レクリエーション専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度に与える影響

(1) 主観的幸福感に与える影響

レクリエーション専門志向化がSHに与える影響を調べるために、タイプ別に「生活・仕事の満足度、幸福感」の反応を図6に示した。

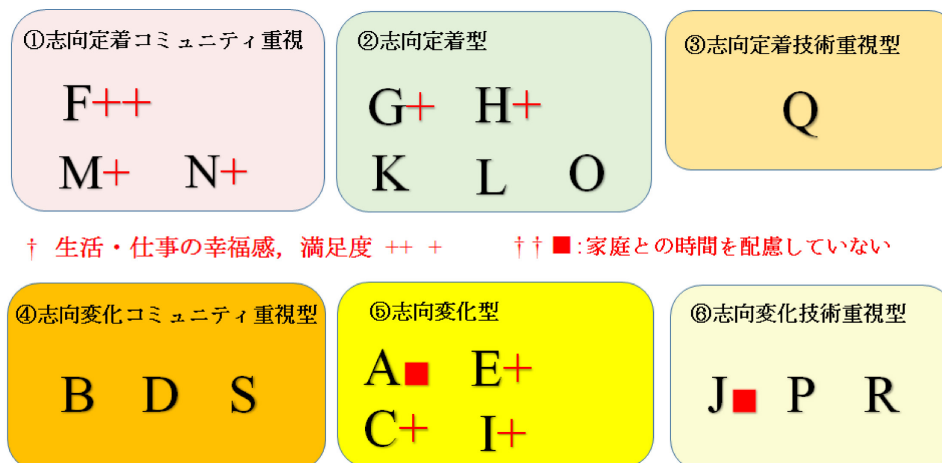


図 6. 専門志向化のタイプと主観的幸福感

生活や仕事, 全般的な SH や満足度に関しては, ダイビングとの関係を感じてはいるが, ダイビング活動が原因で, 生活や仕事の SH や満足度が向上するという直接的な発話は少なかった。例えば, 「幸せかどうかと言われるとよく分かりませんが, ダイビングをやっていて良かったと思います」。この発話が, ダイビングによる幸福感の醸成に繋がったと断定できるかといえは難しいであろう。同様に「ただ, 現状を考えてみると, ダイビングや旅行などがあるので仕事一辺倒にならないということで, そのあたりのバランスに非常に大きく寄与していると思います」なども, 生活の一部であり貢献は認識していると考えられるが幸福感への直接的な関与は認められない。また, 「気がついたら幸せになっていたというか (中略) たとえば, 目的の魚が見られなかったとしても, ダイビングが終わった後, “ああ, 幸せだよ” という感じですよ」といった発話からは, 楽しい, ストレス解消に繋がっている, なくてはならない, という重要性, 中心性は感じられるが, 生活や仕事に対する SH や満足度に関しては, 抽象的であり因果関係を明らかにするには至らないと考えられる。

また, 個人差に関連した発話としては, 「これはもともとの性格もあるのかもしれないですけど, あまり, いろんなことがつまんなくないですね。基本的に何をやってても楽しいです」, 逆の発話としては, 「それは性格的な問題もあると思います。単純に楽しむというのがあまり得意なタイプではありません」の2例からも分かるように, パーソナリティ特性が影響していることが考えられる。

これらの結果とインタビュー時の表情等を総合しても, 対象者が, ダイビングを実施した結果の影響を明確に感じ, 表現できるのは, ダイビングそのものの重要性や中心性であり, ダイビング活動自体の満足度であることが推察され, 本調査のインタビュー結果のみから, レクリエーション専門志向化が SH に与える影響についての因果関係を言及することは難しいと考えられる。

(2) ダイビング満足度を与える影響

レクリエーション専門志向化がダイビング満足度を与える影響を調べるために, タイプ別に「ダイビング満足度」の反応を図7に示した。

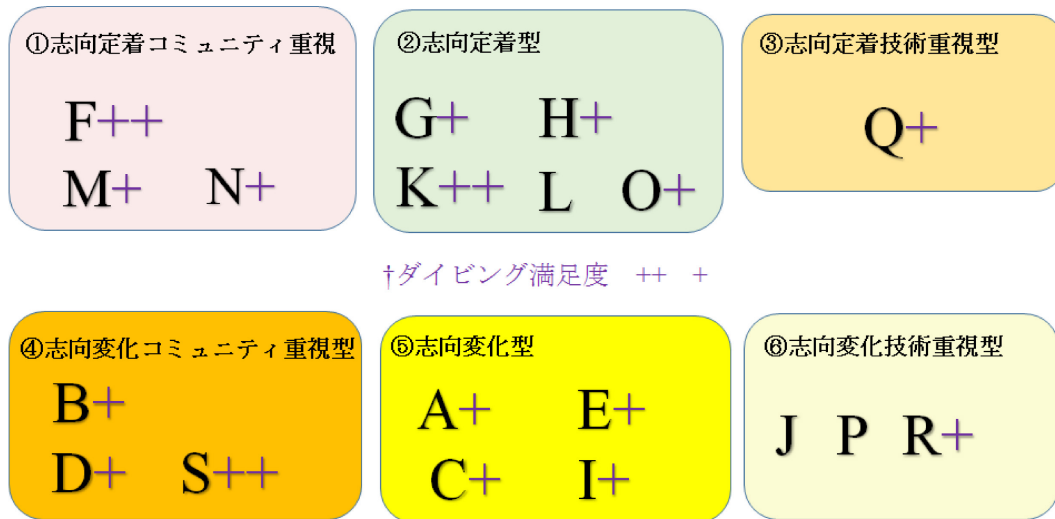


図7. 専門志向化のタイプとダイビング満足度

これを見ると、ダイビング満足度は多くの人が高いことが分かる。また、その発話の内容についても、

「●“行こうぜ”と言われると、“ああ、行こうか”という感じなのですが、実際に行って良かったとも感じます、ダイビングに関しては普通なかなかできない体験をずっとしている、できない海に行っているし、できない深さにも行っていると思っています」

「●人生は1回しかないのだから、楽しいことをやっていたら駄目だ、と思います。だから、どこへ行っても、台風が来ても、“つまらない”とは思わないです。そのような状況でも楽しめることがあるという感じがします」

「●そういう意味では、いまの方が満足度が高いと思います。昔は、たとえば天気で、“きょう晴れた、すごく楽しそう”“雨が降っている、なんかあんまり行きたくない”っていう気分のブレがあったんですけど、いまはあまりないです」

など相対的に質が高い発話および文脈が見られる。また、インタビュー時の表情から、ダイビングの楽しさや満足を感じさせるものであった。これらのことから、専門志向化の過程でダイビング志向の変化やダイビングコミュニティでの活動の影響も加わり、ダイビング満足度の高さや質が向上していることが示唆され、その因果関係が示唆されたと考えられる。しかし、①～⑥に類型化したタイプによっての特徴は見出せなかった。これは、ど

のタイプにおいても専門志向化したダイバーのダイビング満足度が高いことを意味していると考えられる。

4. 総合考察

本章の目的は、第2章・第3章における量的調査によって、その関係が明らかにされたレクリエーション専門志向化とSH・LSについて、その因果関係を明らかにするものであった。仮説検証型の半構造化インタビューによって、新たに「ダイビング志向の変化に対する意識」と「ダイビングコミュニティに対する意識」の下位概念が生成された。そして、専門志向化の下位概念の発話における具体例を考察し、レクリエーション専門志向化がSH・LSに与えた影響について考察を行った。

この結果、本章の対象者は、専門志向化の過程でダイビングの行動様式が変化したことによって、ダイビング活動の経験も長く、その活動頻度も多い。また、ダイビングに対する重要性・中心性には個人差もあるが、いずれも高く、技術や用具（ダイビング器材・カメラ等）に関する認識、知識も高く、全体としてレクリエーション専門志向化の概念による一般から特殊への連続体を支持するものであると考えられる。しかし、ダイビング器材に関しては、潜るための用具であり、テクニカルダイバー以外は、特にそれに対するこだわりはなかった。

専門志向化とSH・LSについては、専門志向化されたダイバーのLSは高く、その質も高いことが示唆された。これは、第2章・第3章の結果を支持するものであり、その因果関係が示唆されたと言える。しかし、レクリエーション専門志向化とSHとの因果関係は示唆されず、第2章・第3章の結果を支持することはできなかった。また、専門志向化の類型化によるタイプを見ると、「志向変化型」は満足度の低下が起きると、新たな生物発見や生態観察に挑むことや、他のダイビング志向や次なる目的へと楽しみ方を変化させていた。同様に「技術重視型」は、日々技術を維持するためのトレーニングを行っていた。そして「志向定着型」は、水中写真撮影などに目的を持ちその活動を継続させていた。また、「コミュニティ重視型」は、ダイビング活動に、ダイビングコミュニティでの活動が加算され、コミュニティでの充足感、満足度が全体でのLSを高め、それが継続していることが推察された。

これらの活動には、ダイビング活動を継続できる環境や経済要因をクリアしていることが条件となる。ダイビングショップ経営者のインタビューによる非継続者の特徴は、病気、結婚、妊娠（出産）、子育て、年齢（体力低下）、経済的理由、介護、経済状況などがあげられる。これらの疎外要因は、他のスポーツにおいても同様でありダイビングに限られたものではない。東京都が2012年に行った調査¹⁴⁾では、スポーツ・運動をしなくなった理由には、「仕事や家事・育児が忙しくて時間がないから60.1%」、「機会がなかったから29.8%」、「年をとったから29.1%」、「仲間がいないから8.1%」、「けがや病気のため8.5%」と様々な理由があげられる。しかし、ダイビングという余暇活動を継続し専門志向化している人々の多くは、これらの疎外要因に該当しない、もしくは、それらに対処してきたことが考えられる。結婚、出産、子育てにより、ダイビングインストラクターの職業をやめざるをえなかった対象者は、仕事以外のプライベートでもダイビングをしていた生活から、「潜ることができない」という状況を初めて体験し、それを「シャッターを下ろされた感じ」と表現している。

今回、専門志向化をした後にダイビングを中止した人（病気や年齢などの疎外要因を除く）のインタビューを行うことはできなかった。しかし、ダイビングショップ経営者のインタビュー結果から、「目的完結型」の存在を確認することができた。高度に専門志向化し目的や志向を変化させるなどして継続してきたが、最終的にそれを完結することによって終了（修了）するということが推察され、すべての専門志向化したダイバーが、ここに到達する可能性があると考えられる。

また、特徴的な事例では、テクニカルダイバーの発話において、重要性や中心性の発話は少ないが、「器材もあるし、やめるにやめられないけど…究極は、そこに住んでの探検になりますからね」という究極のライフスタイルが見え隠れする。同様に「志向変化型」のダイバーでは、それを仕事にするという選択肢があり、その決断をした人は、ダイビングショップ経営やカメラマンなどのダイビングによる生業を目指したことが考えられる。

以上のようにレクリエーション専門志向化がSHに与える影響について、その因果関係を明らかにすることは困難であった。しかし、レクリエーション専門志向化がLSに与える影響については、明らかにすることができ、海洋スポーツ・レクリエーションの継続による専門志向化によってLSがより高まっていることが示唆された。

5. 結論

本章は、レクリエーション専門志向化したスクーバダイバーを対象に、専門志向化の形成過程とその過程における SH・LS に関するインタビューから、専門志向化が SH・LS に与える影響について、その因果関係を明らかにすることを目的とした。

本章においては、レクリエーション専門志向化の感情、認知、行動の3カテゴリ（局面）6 サブカテゴリ（下位次元）の質問に対する発話から、対象者の専門志向化の形成過程を分析した。その際、M-GTA によって探索的に下位概念の検討を行い、「ダイビングコミュニティに対する意識」と「ダイビング志向の変化に対する意識」の下位概念が追加された。また、感情カテゴリ（局面）の重要性と中心性は独立したサブカテゴリとして成立せず一つのサブカテゴリとした。

対象者の発話の具体例から、本章の対象者の専門志向化の形成過程について明らかにすることができた。また、各カテゴリの下位概念の反応から本調査の対象者の専門志向化を①志向定着コミュニティ重視型、②志向定着型、③志向定着技術重視型、④志向変化コミュニティ重視型、⑤志向変化型、⑥志向変化技術重視型の6タイプに類型化することが可能であった。また、専門志向化後に、一般的な非継続理由（健康、家庭状況など）以外でダイビングを継続しない人には、何らかの目的を達成した「目的完結型」が存在することが示唆された。

第2章・第3章において可能性が示唆されたレクリエーション専門志向化が SH・LS に与える影響については、SH への影響において、感情局面の重要性・中心性に関係した発話はされるが、具体的に SH がその形成過程において高まったとする発話は少なく、その因果関係を明らかにすることはできなかった。しかし、LS は、その形成過程において向上し、その質が高まっていることが示唆された。

第4章 注記および引用文献

注記

注 1) 対象者個人が特定されないように、年齢は、30歳~39歳、40歳~49歳、50歳~59歳、60歳以上とした。居住地、出身地は、東京、大阪以外、県ではなく、東海、甲信越、南関東、北関東、東北などのエリア表示とした。職業は、個別の発話のみ挿入し一覧からは除外した。潜水本数は、50本単位として四捨五入した。

注 2) 各潜水指導団体が初級レベルから指導員までの認定証のカードを発行している。認定カードランクとは、Open water, Advanced Open water, Rescue Diver, Dive master などであり、インストラクターも Open water scuba diving Instructor などの認定を受けている。

注 3) テープ起こし業者は、守秘義務を徹底し秘密保持契約書（NDA）に対応している。本調査のテキスト化は、各データを“軽く整文によるケバ取り”にて依頼し、マイクロソフトワード形式にて納品された。音声の聞き取りが不十分なものは、●＝が記載されていることから、元の音声データ、およびフィールドノートから修正を行った。

注 4) テクニカルダイビングとは、主流のレクリエーション・ダイビングに比べて遥かに深い場所へ、経験豊富かつ資格のあるダイバーが行う。テクニカルダイビングは、この種のダイビングに伴う追加された危険性を管理するために、多くの器材とトレーニングが必要であることにより区別される。（PADI：http://www.padi.co.jp: 参照 2015-7-5）

注 5) リブリーザーとは、閉鎖式（または半閉鎖式）で呼吸を循環させる装置のこと。深く、長く潜ることができ、水中生物に接近しやすいなどのメリットがあることから、水中撮影などで使われていたが、器材が非常に高価で複雑なことから、レジャーダイビングの世界で使われることはなかった。しかし、近年、器材の価格がリーズナブルになり普及している。

注 6) 水中ハウジングとは、水中においてカメラを使用するためのケースであり、金属やアクリルなど多種存在する。最近では、コンパクトデジタルカメラ用のケースが、カメラ発売とほぼ同時に販売されることから人気を得ている。

注 7) オープンサーキットとは、呼吸した空気を、オープンに外に排出しているものである。通常のスクーバダイビングがこれにあたる。

注 8) CCR とは、クローズドサーキットリブリーザーの略で閉鎖式の呼吸循環装置のこと

注 9) クローズドサーキットとは、呼吸した空気を外に排出せずに、器材の中で循環させることである。

． SCR とは、セミクローズドサーキットで、半閉鎖式のことである。

注 10) ケーブとは、ケーブダイビングのことであり洞窟潜水のことである。

注 11) セルフダイビングとは、単独にて潜水を行うことであり、レジャーダイビングにおいても、潜水経験に応じて、決められた場所において許可される場合がある。

注 12) バディ潜水とは、潜水時にバディ（ペア）を組み、安全に潜るシステムである。

注 13) トライミックスとは、混合ガスで、ヘリウム、窒素、酸素の3つを混合したものである。

引用文献

- 1) 松浦均, 西口利文編: 観察法・調査的面接法の進め方. 東京, ナカニシヤ出版, 2010.
- 2) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的調査への誘い—. 東京, 弘文堂, 2003.
- 3) 木下康仁: ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて—. 東京, 弘文堂, 2007.
- 4) 竹崎久美子: 修正版 M-GTA と Grounded Theory Approach (焦点 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチをめぐって). 看護研究, 38(5): 417-421, 2005.
- 5) 二宮浩彰: レクリエーションの行動科学. 東京, 不昧堂出版, 2007.
- 6) Iso-Ahola SE and Weissinger E: Leisure and Boredom. Journal of Social and Clinical Psychology, 5(3): 356-364, 1987.
- 7) Iwasaki Y, MacKay K, Mactavish J: Gender-Based Analyses of Coping with Stress among Professional Manager: Leisure Coping and Non-Leisure Coping. Journal of Leisure Research, 37(1): 1-28, 2005.
- 8) Iwasaki Y and Mannell RC: Hierarchical Dimensions of Leisure Stress Coping. Leisure Sciences, 22(3): 163-181, 2000.
- 9) 進藤正雄, 宮地力, 本間三和子, 中島幸, 堀出知里: 「ヨット」受講生のセーリング技術習得過程と自己効力感の変化. 大学体育研究, 29: 69-78, 2007.

- 10) 渡壁史子, 橋本公雄, 徳永幹雄, 柳敏晴, 西田順一: 海洋体験学習がメンタルヘルスに及ぼす影響について. 九州スポーツ心理学研究, 13(1): 37-38, 2001.
- 11) Kuentzel WF and Heberlein TA: Life Course Changes and Competing Leisure Interests as Obstacles to Boating Specialization. Leisure Sciences, 30(2): 143-157, 2008.
- 12) Scott D and Lee J-H: Progression, Stability, or Decline? Sociological Mechanisms Underlying Change in Specialization Among Birdwatchers. Leisure Sciences, 32(2): 180-194, 2010.
- 13) Kelly JR: Leisure identities and interaction, London, Allen and Unwin, 1983.
- 14) 東京都生活文化局: 都民のスポーツ活動に関する世論調査, 2012.
<http://www.metro.tokyo.jp/INET/CHOUSA/2012/10/60mau101.htm> (参照:2015-7-15)

資料1 「研究参加への説明書」

研究参加への説明書

1. 本研究は「海洋レジャー・レクリエーション活動における専門志向化が幸福感・レジャー満足度
に与えた影響」と題する研究で、レジャー・レクリエーション活動を行うことによって専門志向化を
している人が、活動の継続によってどのように専門志向化したのか、そして専門志向化が幸福感・レ
ジャー満足度にどのような影響を与えたのかを明らかにするためにインタビュー調査を行うものです。
2. 本研究の対象者はダイビング愛好者を考えており、あなたにご協力を戴く必要があります。具体
的には、あなたにインタビュー調査をしていただき、その際のインタビューを録音します。あなたに
不快を与える質問はありませんが、もし答えたくない質問があれば、答える必要はありません。
3. この研究へのご協力は全くの任意ですので、拒否されてもかまいません。また、研究開始後でも、
お申し出頂ければ、いつでもご辞退戴けます。拒否されたり、ご辞退されることにより、あなたに不
利益が生ずることは一切ありません。また、本研究では、心身に悪影響を来すことは無いと考えてい
ますが、不測の事態が生じた場合は直ちに研究担当者に申し出ていただければ、誠意をもって対処い
たします。
4. 得られた、データは、平均値等あなたの氏名等個人が特定できない形で、体育・スポーツ、レ
ジャー・レクリエーションに関係した学会に発表し、論文とすることを考えております。データは個人
情報と切り離し、厳重に管理し、研究が全て終了するまで保管いたします。
5. 個人情報管理責任者は研究責任者の松本秀夫です。他者に漏洩する事がないように細心の注意を
払います。

以上、ご説明申しあげましたが、同意後であっても、疑問点があればいつでも下記の研究責任者に
ご連絡ください。

6. 研究実施期間 2015年5月1日～2016年3月31日
7. 保管期間 研究終了後3年(2019年3月31日 予定)

本研究に関する説明により、自由意思に基づく同意を得たことを確認いたします。

研究責任者： 松本 秀夫 印
連絡先（電話番号等） XXX-XXX-XXXX

資料2 「研究参加についての同意書」

東海大学 「人を対象とする研究」に関する倫理委員会 (様式4)

研究参加についての同意書

私は、研究計画「海洋レジャー・レクリエーション活動における専門志向化が幸福感・レジャー満足度
に与えた影響」に関する以下の事項について、詳しく説明を受けました。

【研究内容】

海洋レジャー・レクリエーション活動における専門志向化が幸福感・レジャー満足度
に与えた影響

【研究実施期間】

2015年5月1日～2016年3月31日

【保管期間】

研究終了後3年(2019年3月31日 予定)

【説明事項】

《研究実施期間中》

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 研究への参加は任意であること | <input type="checkbox"/> 研究における不快な状況 |
| <input type="checkbox"/> この研究の目的 | <input type="checkbox"/> 情報およびデータ等の収集方法について |
| <input type="checkbox"/> 研究の方法 | <input type="checkbox"/> あなたに研究参加をお願いする理由 |
| <input type="checkbox"/> 研究の実施場所 | <input type="checkbox"/> 研究に対する問い合わせ・苦情等の連絡先 |

《収集したデータ等について》

個人情報の取り扱いについて

- | | |
|---|--------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> データ等の取り扱いについて(保管期間等) | <input type="checkbox"/> データ等の利用について |
|---|--------------------------------------|

これらの事項を確認したうえで、自らの自由意思により本研究への参加に同意いたします。

年 月 日

現住所

参加者氏名： _____ 印 _____

第5章 総合考察

1. 本論文のまとめ

本論文の目的は、海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向化と参加者の主観的幸福感およびレジャー満足度の関係を追究することであり、以下、3つの課題「レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性」、「レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性に関する国際比較」、「レクリエーション専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度に与える影響の因果関係」を明らかにすることであった。

第2章において、アメリカ在住の釣り人を対象とした調査において、レクリエーション専門志向化指標の妥当性、信頼性は、確認的因子分析および Cronbach の α 係数、AVE によって検証され、2段階クラスター分析によって、専門志向化レベルを High・Middle・Low の3段階にバランスよく類型化することができた。また、主観的幸福感尺度の得点とレジャー満足度の得点を従属変数、専門志向化レベル、所得を独立変数とする対応のない2要因分散分析を行った。この結果、主観的幸福感は、専門志向化レベルと所得の主効果が認められ、専門志向化レベルにおいて、High が Middle・Low より高い ($Low \cdot Middle < High$) 主観的幸福感を示した。また、レジャー満足度は、専門志向化レベルの主効果が認められ、Low よりも Middle が高く、Middle よりも High が高く ($Low < Middle < High$)、専門志向化レベルと主観的幸福感・レジャー満足度の関係を明らかにすることができた。従って、レクリエーション専門志向化の高まりによって、主観的幸福感・レジャー満足度が高まる可能性が考えられた。

第3章では、レクリエーション専門志向化の国際比較研究のため、確認的因子分析によってレクリエーション専門志向化指標を6因子14項目に修正した。さらに多母集団同時分析において配置不変モデル、測定不変モデルが認められ、本調査において国際比較をすることの妥当性を確認した。また、2段階クラスター分析によってアメリカと日本のダイバーの専門志向化レベルを High・Middle・Low の3段階に類型化することができた。

主観的幸福感尺度の得点とレジャー満足度の得点を従属変数、専門志向化レベル、所得、

国を独立変数とする対応のない3要因分散分析を行った結果、主観的幸福感には、専門志向化レベルと所得の主効果が認められ、HighがMiddle・Lowより高い主観的幸福感が示され、Middleが、Lowよりも高い主観的幸福感が示された(Low < Middle < High)。所得では、⑥\$150,000以上(1500万円以上)が②\$25,000~39,999(250~399万円)と④\$60,000~79,999(600~799万円)より高かった。また、主観的幸福感は、国による差異は認められなかった。

レジャー満足度は、専門志向化レベルと国(RS×国)、所得と国(所得×国)に交互作用がみられ、日本はレジャー満足度がLowよりMiddleが高く、MiddleよりHighが高かった(Low < Middle < High)。アメリカはLowよりMiddle・Highが高く(Low < Middle・High)、MiddleとHighの群間に違いは見られなかった。また、所得が\$150,000以上(1500万円以上)において、日米のスクーバダイバーにおけるレジャー満足度に違いは認められず、それ以外は、有意にアメリカの方が日本より高かった(日本 < アメリカ)。このように、日米によって部分的に違いはあるものの、第2章と同様レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性が示唆され、レクリエーション専門志向化の高まりによって、主観的幸福感・レジャー満足度が高まる可能性が認められた。

第4章では、レクリエーション専門志向化の感情、認知、行動のカテゴリー(局面)のサブカテゴリー(次元)の質問による半構造化インタビューから専門志向化の形成過程を分析した。その際、M-GTAによって探索的に下位概念の検討を行い、「ダイビング器材に対する意識」、「カメラ・ビデオ器材に対する意識」、「認定カードランク・講習に対する意識」に、「ダイビングコミュニティに対する意識」と「ダイビング志向の変化に対する意識」の下位概念が追加された。また、「ダイビングの重要性に対する意識」と「ダイビングの中心性に対する意識」は独立した下位概念として成立せず、「ダイビングの重要性・中心性に対する意識」の下位概念とした。そして、専門志向化を6タイプに類型化することができた。

第2章・第3章において可能性が示唆されたレクリエーション専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度を与える影響については、主観的幸福感への影響において、感情カテゴリーの「ダイビングの重要性・中心性」に関係した発話はされるが、その形成過程において主観的幸福感が高まる具体的な発話は少なく、第4章のインタビュー結果のみから専

門志向化と主観的幸福感の因果関係を明らかにすることは難しいと考えられる。しかし、レジャー満足度は、専門志向化の形成過程においても高く、その質が高まっていることが示唆され、継続的なダイビング活動により専門志向化し、専門化された活動に対するレジャー満足度が継続して高まったと考えられ、その因果関係が示唆されたと考えられる。

本論文では、このように、レクリエーション専門志向化の概念による類型化とその形成過程の分析、およびレクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係を検証した。

これまでのレクリエーション専門志向化の多くの先行研究¹⁻⁶⁾は、専門志向化の概念が参加者を類型化する指標として有効であることを示している。本論文におけるアメリカ在住の釣り人と日米のスクーバダイバーが、レクリエーション専門志向化の多次元指標によって有効に類型化されたことは、これらの研究を支持するものであった。また、日本のスクーバダイバーにおいても専門志向化の概念が有効であったことは、二宮ら⁷⁾が日本のウインドサーファーを対象にした調査において専門志向化の概念が下位集団の分類に有効であったことを支持するものであり、日本の海洋スポーツ・レクリエーションにおいても専門志向化の概念による研究の対象範囲を拡大することが可能であることを示唆するものであった。

また、専門志向化したスクーバダイバーの「ダイビングコミュニティに対する意識」に関しては、その場所での交流や SNS、ダイビング旅行への同伴などが認められた。これは、二宮ら⁸⁾が参与観察とインタビュー調査から、ウインドサーフィンのレベルの高い快樂志向の参加者が、風が吹いていない時も、仲間と集まって盛り上がる行為を楽しみにしていると述べていることと同様の結果であると考えられる。

主観的幸福感・レジャー満足度の国際比較については、日米の幸福感は変わらず、*World Happiness Report 2015*⁹⁾の結果と異なるものであった。これは、主観的幸福感尺度の平均点が、日米いずれも高い傾向であることから^{10,11)}、第3章のデータが、余暇活動としてのスクーバダイビングの実施の影響から主観的幸福感が高かったことが推察される。これは、レジャー活動と主観的幸福感に関係があるとする研究¹²⁻¹⁵⁾を支持するものであり、Kleiberら¹⁶⁾が指摘した余暇活動がポジティブ感情を高め、ネガティブ感情を低下させることにも関係していると考えられる。また、レジャー満足度は、第2章・第3章の量的調査の結

果においても、若干の違い（日本：Low < Middle < High, アメリカ：Low・Middle < High）はあるが、日米いずれも専門志向化のレベルが高いほど、レジャー満足度が高い傾向であったことから、レジャー活動による満足度の向上は国によって異なることが示唆されたと言える。また、専門志向化の形成過程のインタビューにおいて、同じことを継続することによって飽きがかかることから、ダイビングの目的や志向を変化させている、もしくは変化した参加者が複数存在した。これは、レジャーにおける退屈感が多いほど、レジャー満足度が低くなるとする Iso-Ahola と Weissinger¹⁷⁾の研究を支持するものであった。すなわち、継続的なレジャー活動による専門志向化を果たした参加者は、退屈感を回避し、レジャー満足度が高い経験を長期にわたり継続したと考えられる。

このように、本論文の結果は、幸福感研究、ポジティブ心理学研究、レジャー研究におけるレジャー活動と主観的幸福感の関係を支持するものであった。また、レクリエーション専門志向化の概念による類型化の有効性を支持するものであり、これまで検討されていなかった、レジャー活動の継続によるレクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度に関係があることが示唆されたと考えられる。

2. 今後の課題

本論文の結果から、レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係が明らかとなった。しかし、インタビュー調査の結果からは、専門志向化の形成過程における主観的幸福感への影響について明確にすることはできなかった。これは、日本人の幸福感の捉え方や質問の設定など様々な問題を含んでいることが考えられる。また、アメリカなどの他国におけるインタビュー調査も視野に含め、今後さらに検討を加える必要がある。

幸福感と所得の関係は、主として経済学において議論がなされてきたことから、本論文においても関係する要因として分析を行った。関係する要因として認められる反面、所得の質問に回答をしない対象者も多数存在し、第3章の国際比較研究においては128名（12.6%）が回答したくないとしている。

また、本論文の対象とした海洋スポーツ・レクリエーションは、フィッシングとスクーバダイビングであり、この結果をすべての海洋スポーツ・レクリエーションとして一般化

することはできない。第4章のインタビューからは、経験豊富なダイバーは、通常のダイビング器材に全く固執していないことが明らかになった。これは、第3章の国際比較研究において、ダイビング器材の因子が除かれたことの一因として考えることが可能である。しかし、サーフィン、カヌー、スタンドアップパドルサーフィンなど、活動に用具の占める割合が大きい場合や競技性が高い場合は、用具への関与が高くなることが十分に予想される。このように種目よっての用具の捉え方には違いが予想され、種目間の違いに焦点をあてた研究の実施も課題となる。

研究実施上の課題としては、第3章の国際比較研究において、ダイバーの経験が日米で異なる分布であったことは、サンプリング方法を各国で同様に実施することの困難さを感じた。また、レクリエーション専門志向化指標の測定不変モデルの妥当性を得るためには、指標の次元および下位項目を減少させる必要が生じ、これがサンプルの偏りの影響であったのか、スクーバダイビングの特徴であったのかの判断は難しい。今後は、国際比較の調査計画において、サンプリングの方法が課題となる。

このように本論文で用いたレクリエーション専門志向化の概念は、レジャー行動を類型化する指標として有効であると考えられることから、今後さらに複数の海洋スポーツ・レクリエーション活動に範囲を広げ、海洋スポーツ・レクリエーションの普及発展に寄与できる研究を展開していきたい。

第5章 引用文献

引用文献

- 1) Oh C-O, Sutton SG, Sorice MG: Assessing the Role of Recreation Specialization in Fishing Site Substitution. *Leisure Sciences*, 35(3): 256-272, 2013.
- 2) Oh C-O and Ditton RB: Using Recreation Specialization to Understand Multi-Attribute Management Preferences. *Leisure Sciences*, 28(4): 369-384, 2006.
- 3) Ditton RB and Sutton SG: Substitutability in Recreational Fishing. *Human Dimensions of Wildlife*, 9(2): 87-102, 2004.
- 4) Waight CF and Bath AJ: Recreation Specialization Among ATV Users and Its Relationship to Environmental Attitudes and Management Preferences on the Island of Newfoundland. *Leisure Sciences*, 36(2): 161-182, 2014.
- 5) Schroeder SA, Fulton DC, Lawrence JS, Cordts SD: Identity and Specialization as a Waterfowl Hunter. *Leisure Sciences*, 35(3): 218-234, 2013.
- 6) Bryan H: Leisure value system and recreation specialization: The case of Trout Fishermen. *Journal of Leisure Research*, 9(3): 174-187, 1977.
- 7) 二宮浩彰, 菊地秀夫, 守能信次: 専門志向化の概念枠組みによるウインドサーファーの類型化とその測定指標. *レジャー・レクリエーション研究*, 56: 1-10, 2006.
- 8) 二宮浩彰, 菊地秀夫, 守能信次: レクリエーションの専門志向化からみたウインドサーフィン行動—レジャーの社会的世界におけるフィールドワークを通じて—. *レジャー・レクリエーション研究*, 54: 1-10, 2005.
- 9) Helliwell JF, Layard R, Sachs J, Eds.: *World Happiness Report 2015*, New York, Sustainable Development Solutions Network, 2015.
- 10) Lyubomirsky S and Lepper HS: A measure of subjective happiness: Preliminary reliability and construct validation. *Social Indicators Research*, 46(2): 137-155, 1999.
- 11) 島井哲志, 大竹恵子, 宇津木成介, 池見陽, Sonja Lyubomirsky: 日本版主観的幸福感尺度の信頼性と妥当性の検討. *日本公衛誌*, 51(3): 845-853, 2004.

- 12) Brow A, Frankel B, Fennell M: Happiness through leisure: the impact of type of leisure activity, age, gender and leisure satisfaction on psychological well-being. *Journal of Applied Recreation Research*, 16(4): 368-392, 1991.
- 13) Lloyd K and Little DE: Self-Determination Theory as a Framework for Understanding Women's Psychological Well-Being Outcomes from Leisure-Time Physical Activity. *Leisure Sciences*, 32(4): 369-385, 2010.
- 14) Mannell RC: Leisure, Health and Well-Being. *World Leisure Journal*, 49(3): 114-128, 2007.
- 15) Lu L and Hu CH: Personality, leisure experiences and happiness. *Journal of Happiness Studies*, 6(3): 325-342, 2005.
- 16) Kleiber DA, Walker GJ, Mannell RC: *A Social Psychology of Leisure*. (2nd edition.) State College, PA, Venture Publishing, 2011.
- 17) Iso-Ahola SE and Weissinger E: Leisure and Boredom. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 5(3): 356-364, 1987.

謝 辞

本論文を執筆するにあたり、主査として多大なるご指導を賜りました東京海洋大学大学院千足耕一准教授に深甚なる謝意を表します。副査であります東京海洋大学大学院、婁小波教授、小暮修三准教授、ならびに論文審査委員の大島弥生教授には、貴重なご意見を頂き深く感謝申し上げます。また、社会人として大学院入学後、数々の心遣いならびにご指導頂きました東京海洋大学大学院佐野裕司元教授に深く感謝の意を表します。

東京海洋大学海洋スポーツ健康科学研究室の社会人入学の先輩である蓬郷尚代先生、藤本浩一先生には、博士論文作成の手続きを含め数多くのアドバイスを頂きました。また、現役生、OB・OG の皆様にも多大なるご協力を頂きましたこと、心より感謝申し上げます。

社会人入学での博士課程進学に際し、推薦ならびに進学のご許可を頂きました東海大学副学長山下泰裕教授(前体育学部長)、前体育学科主任中村なおみ教授に感謝申し上げます。また、体育学部長今村修教授、体育学科主任大塚隆教授には、学部内業務に特別の配慮頂きましたことに感謝申し上げます。加えて、体育学科の同僚の先生方には多大なるご理解とご協力を賜りましたこと、大変有難く、また大変恐縮に存じております。特に内田匡輔准教授には、特別のご支援を頂き最後まで頑張れたかと思えます。

東海大学大学院体育学研究科の修士課程において、体育・スポーツ心理学研究の道筋を与えて頂きました今村義正名誉教授に深く感謝申し上げます。

フロリダ大学において、研究の機会を与えて頂きました Dr. Christopher M Janelle 教授、ならびに共同研究者として最新の知見をご示唆頂いた佐藤晋太郎先生に感謝申し上げます。

これまでの人生において、幾多の困難に対して、いつも激励と援助をしてくれた亡き父と、今も支えてくれる母に深く感謝します。

最後になりますが、社会人としての大学院生活、博士論文作成をいつも応援し、支えてくれた家族、妻さゆり、娘桃子に深く感謝します。

2015年9月

松本秀夫